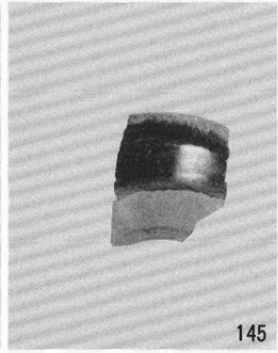


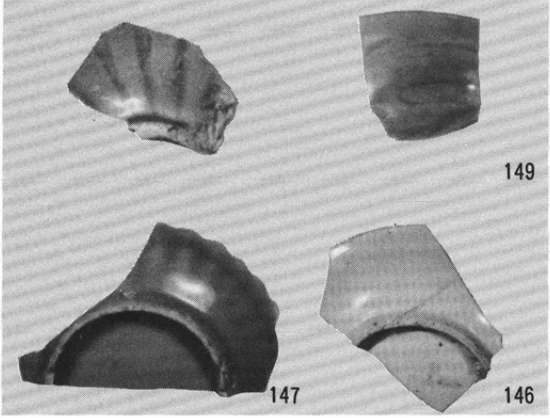
150



145



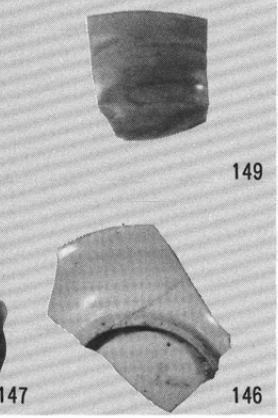
148



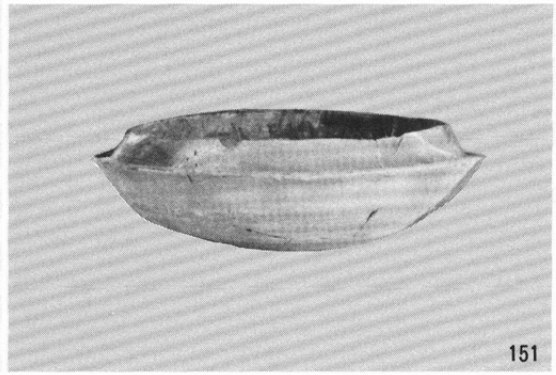
149



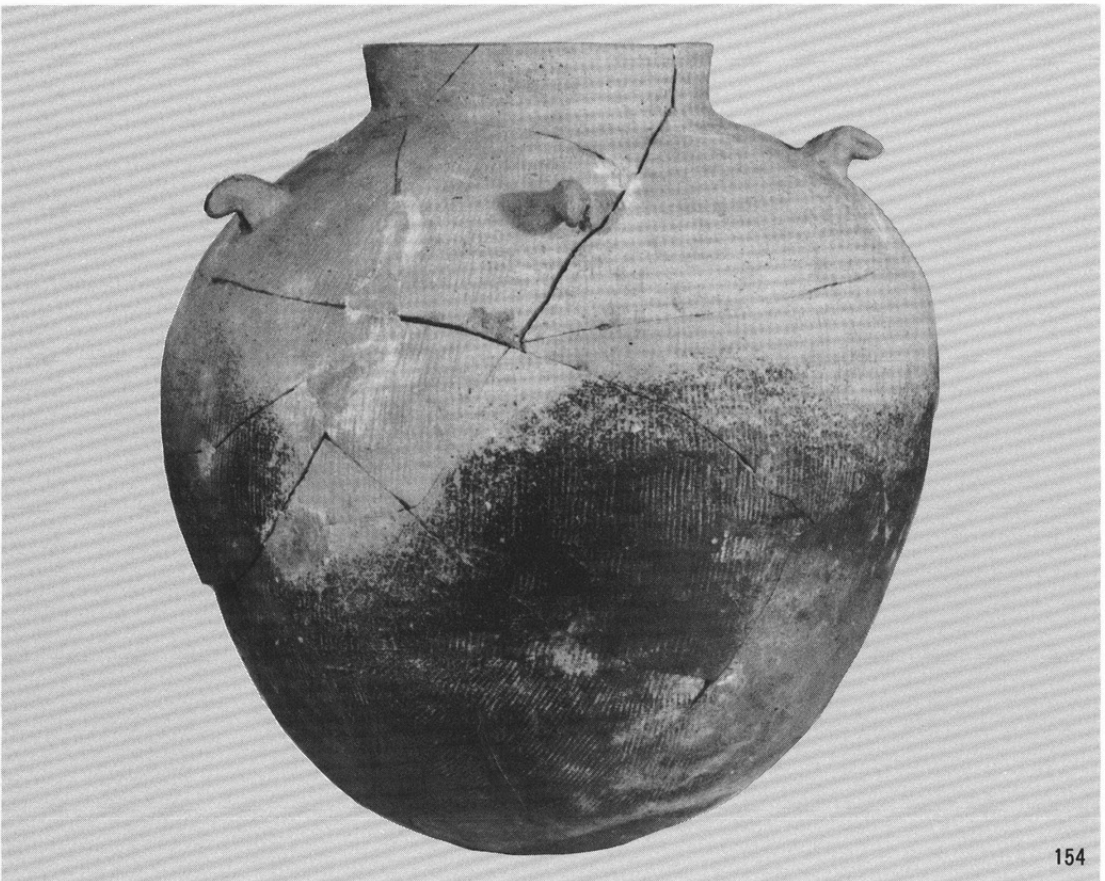
147



146



151



154

陶磁器・須惠器杯 (1/3)・須惠器壺 (1/4)

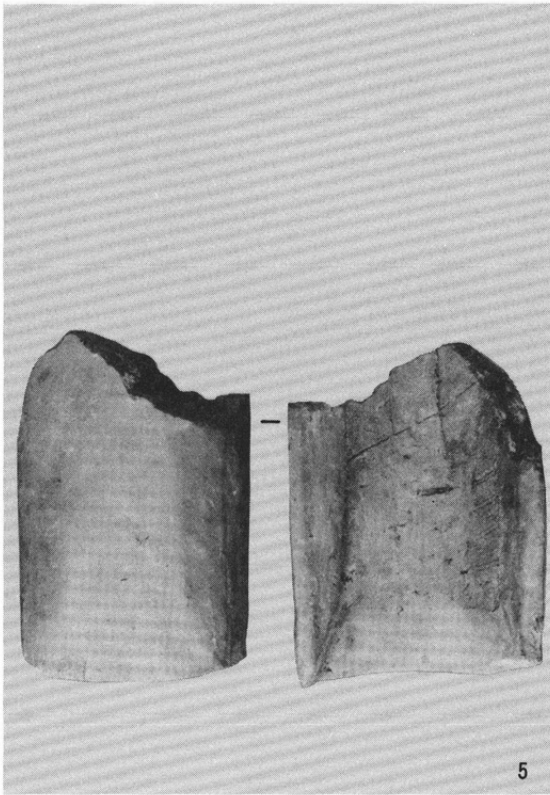
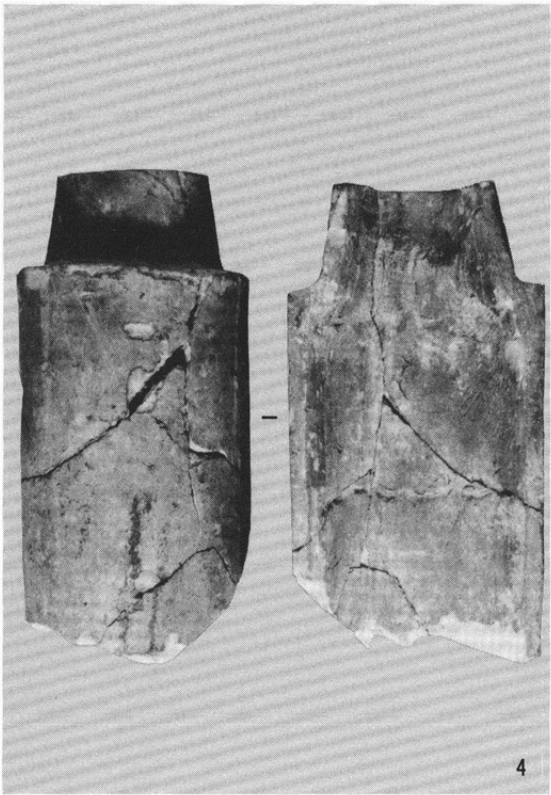
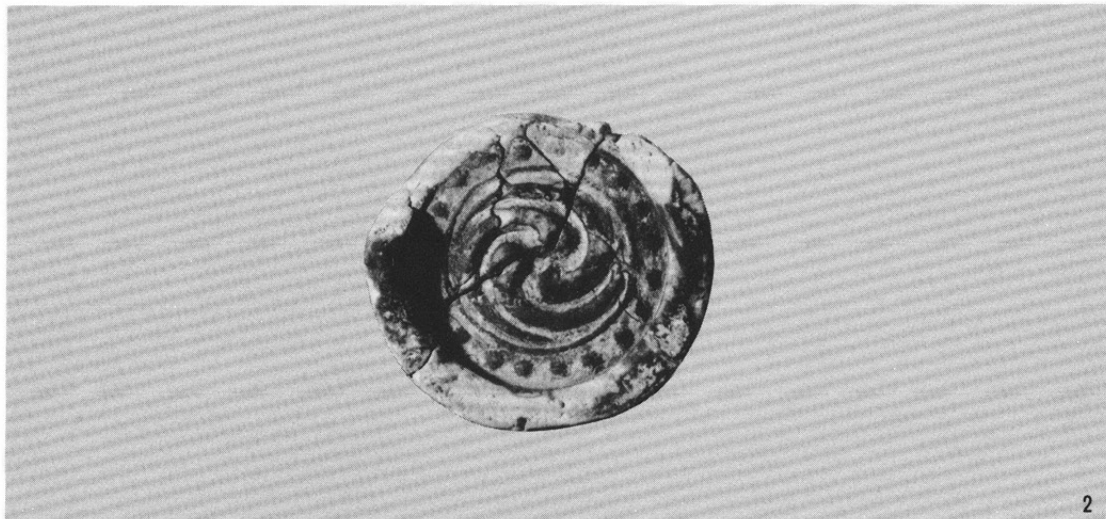
2

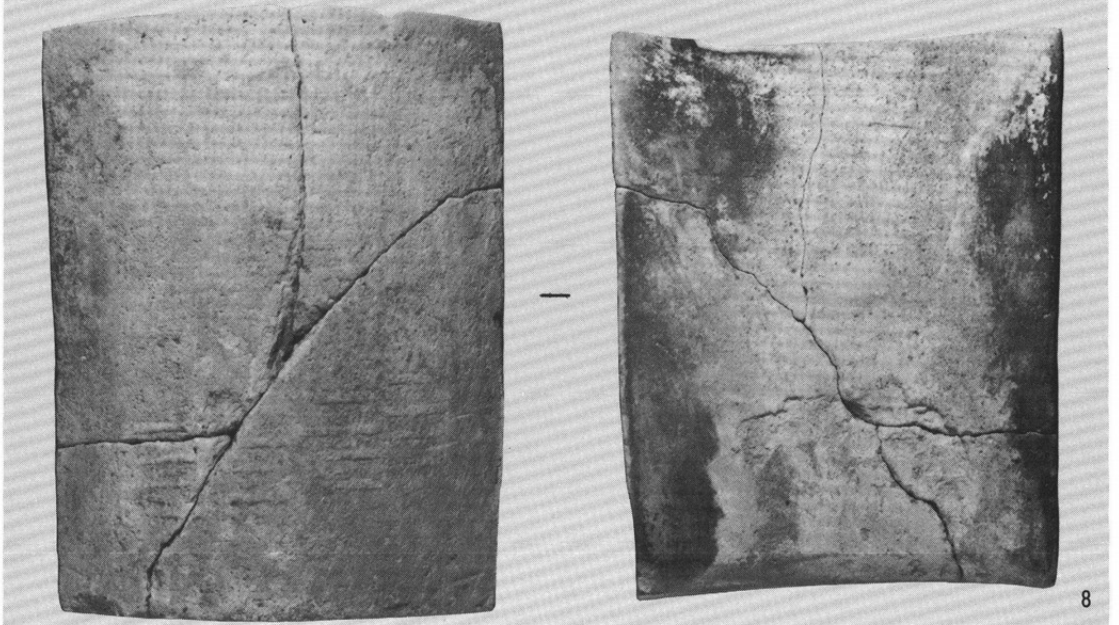
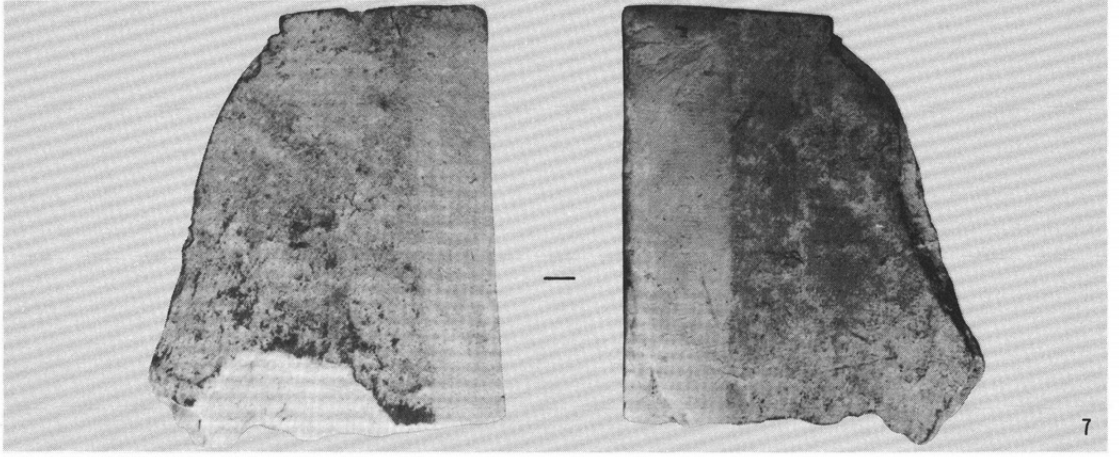
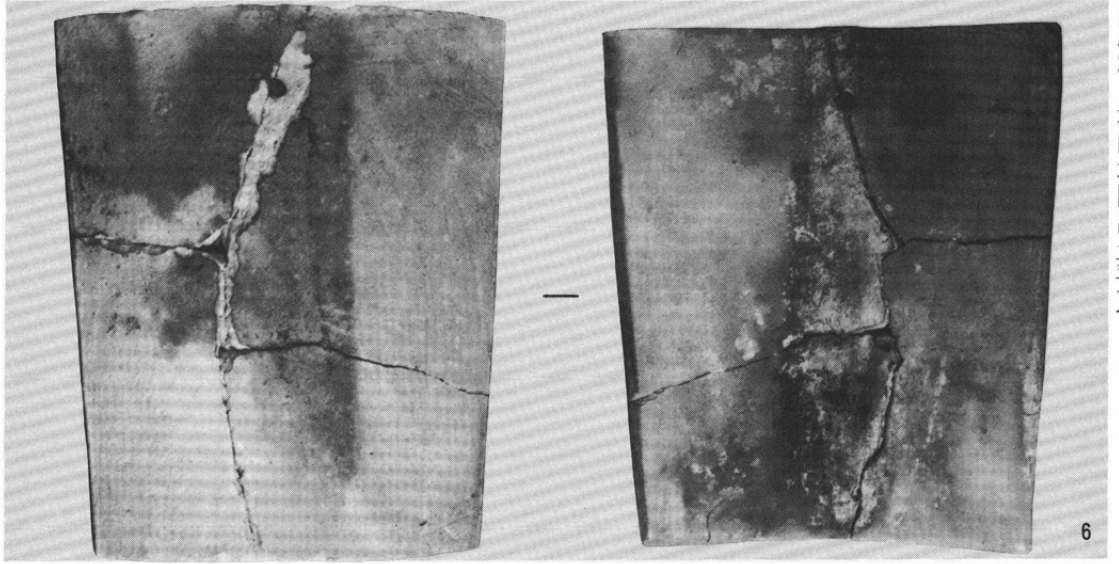
3

4

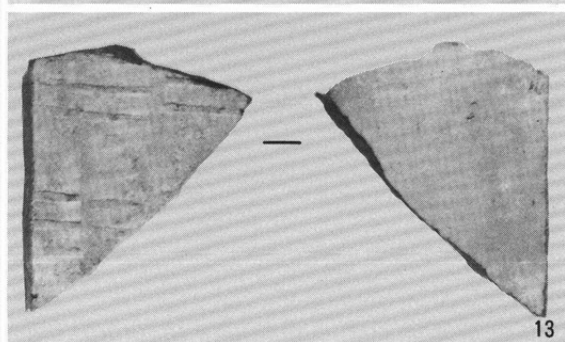
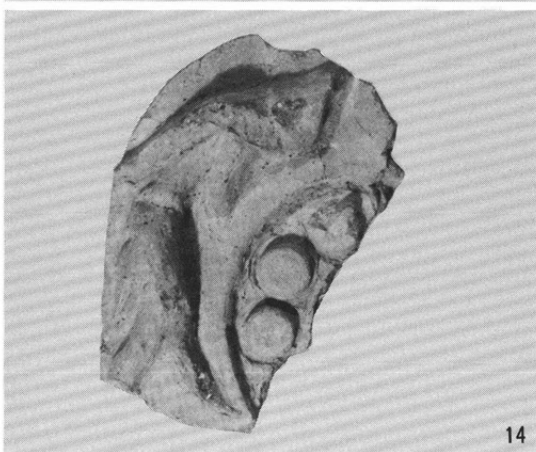
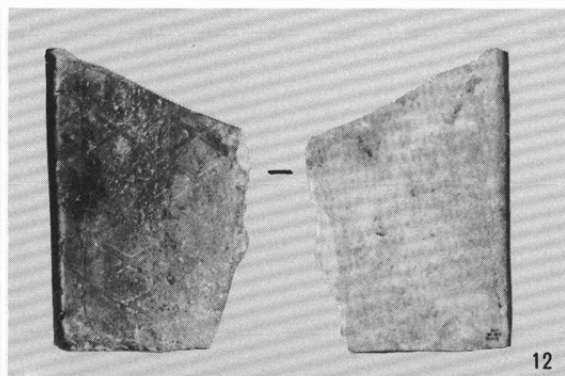
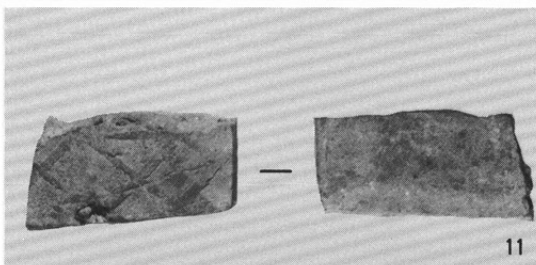
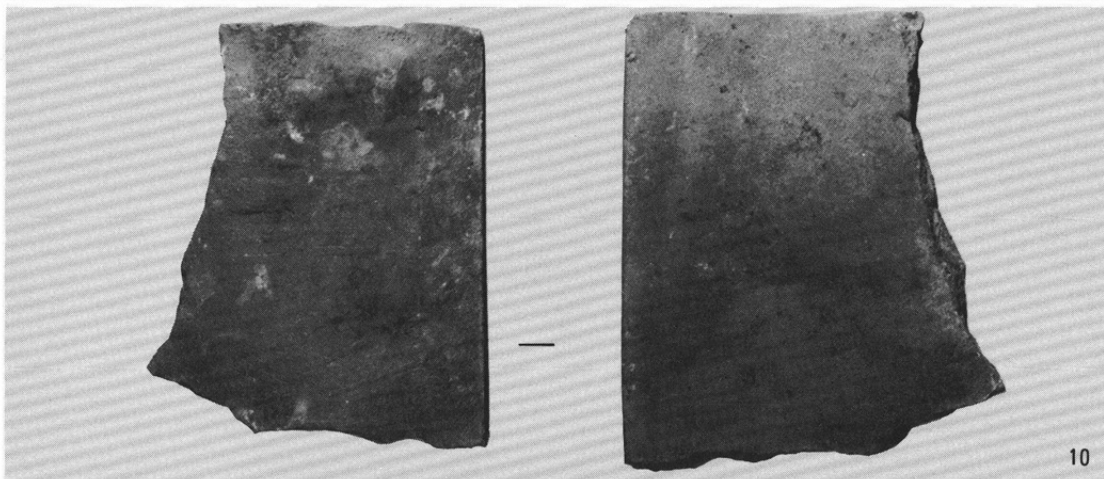
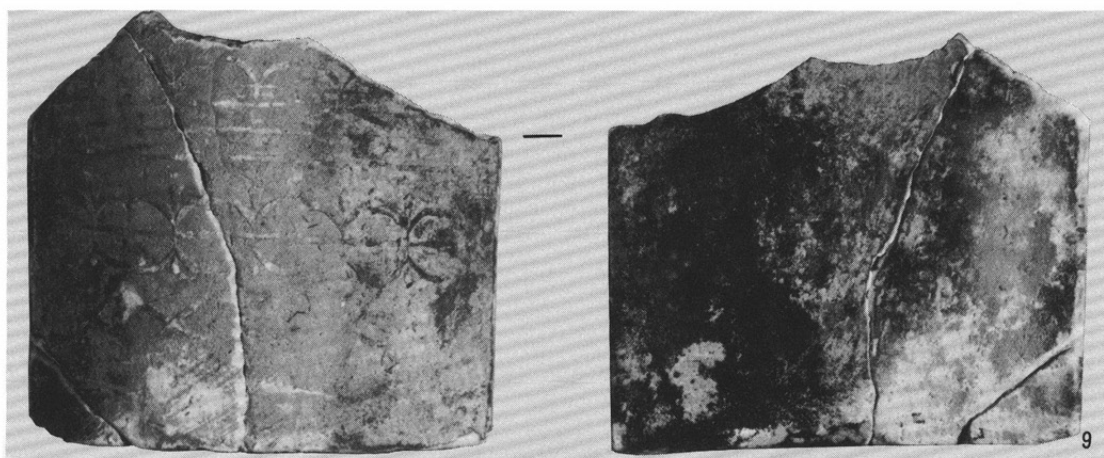
5

軒丸瓦・軒平瓦 (1/2)・丸瓦 (1/4)

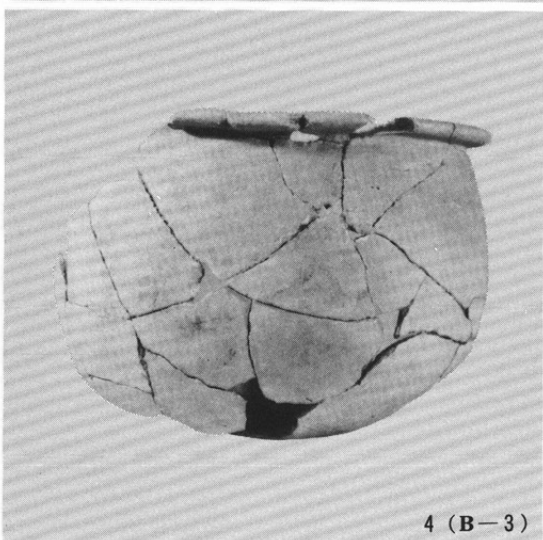
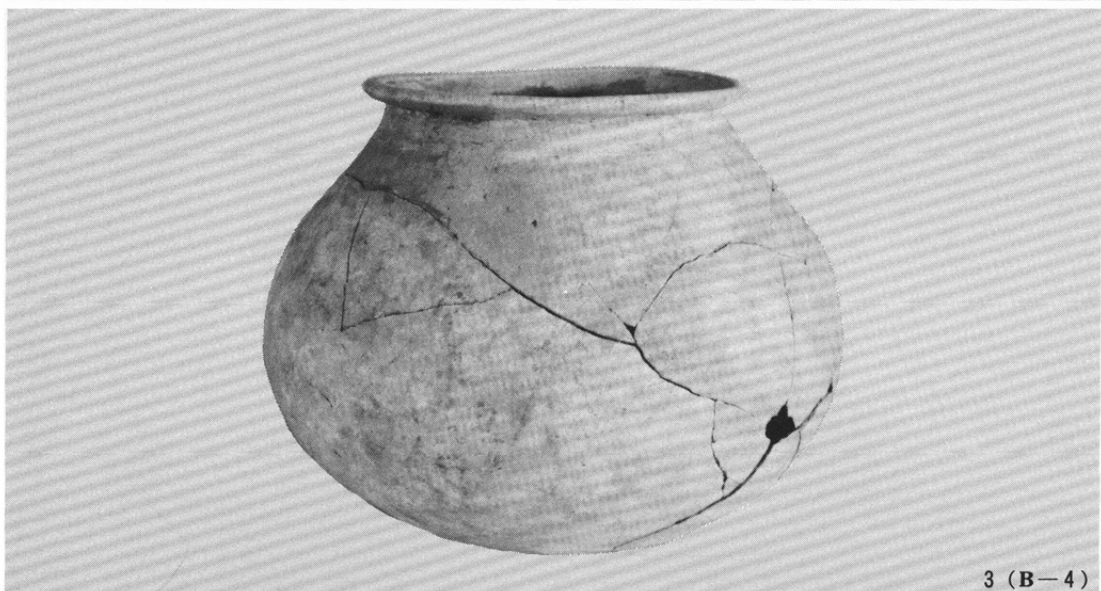
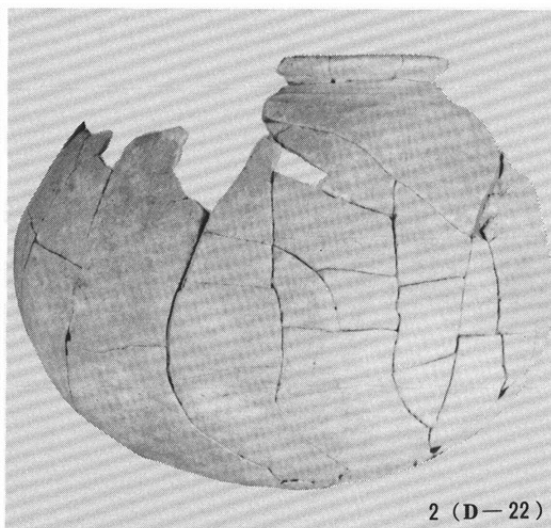
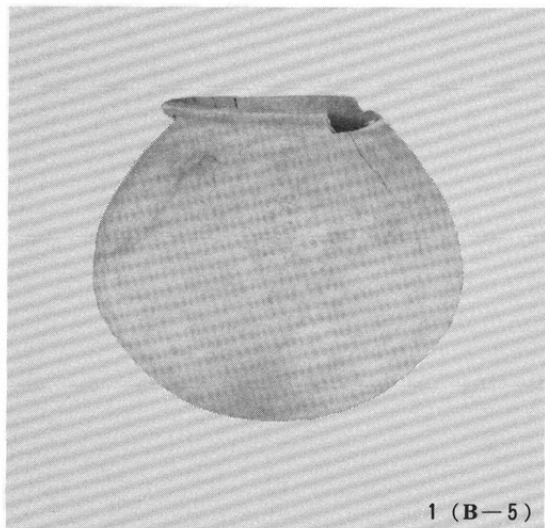


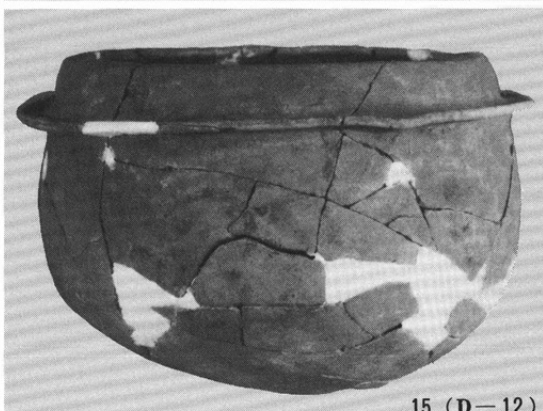
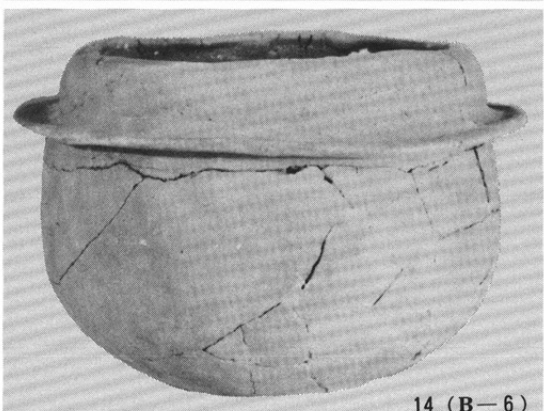
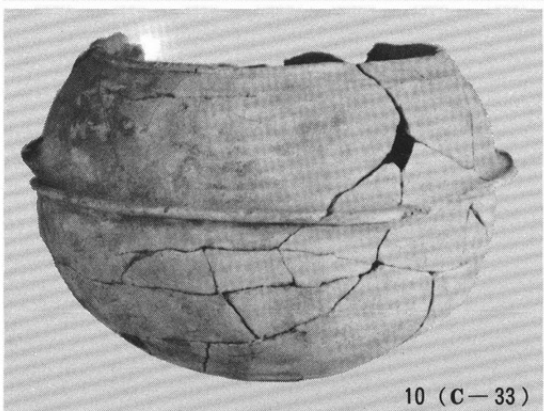
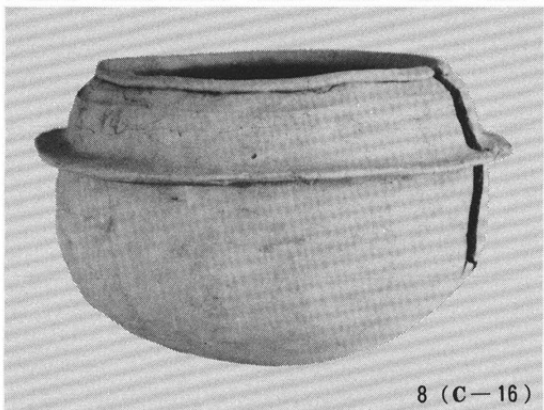
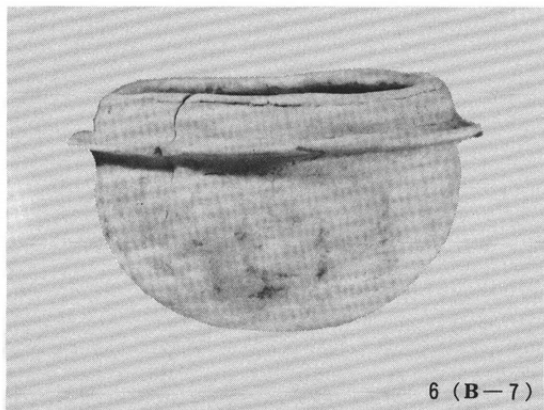


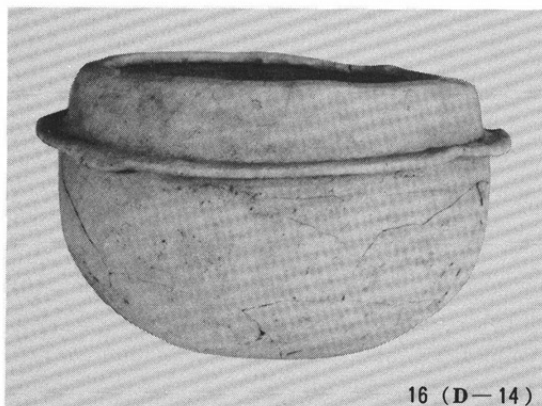




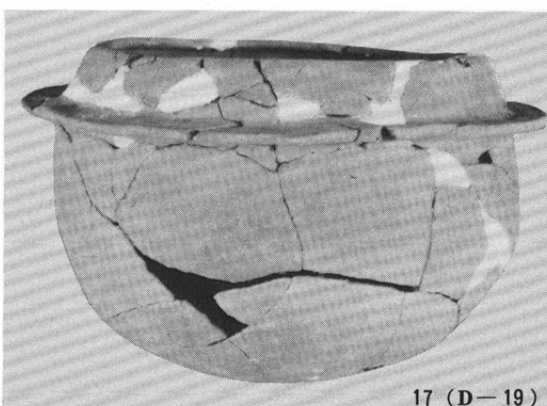




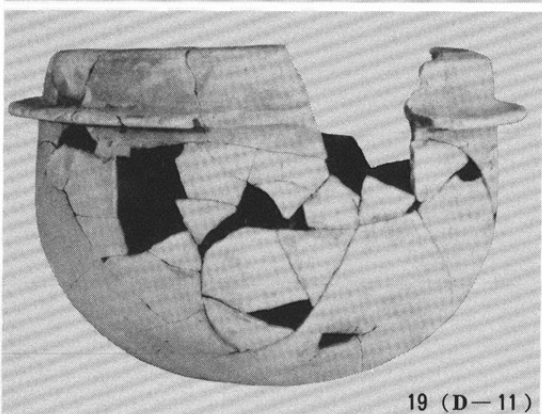




16 (D-14)



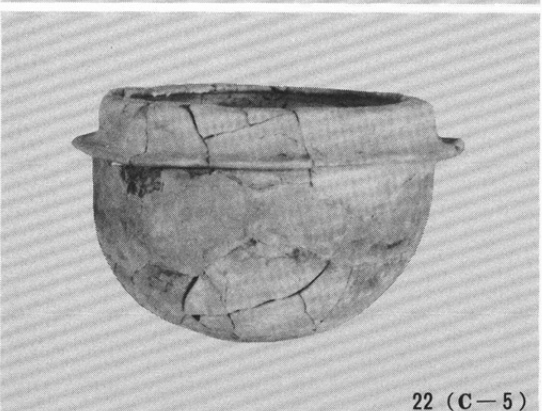
17 (D-19)



19 (D-11)



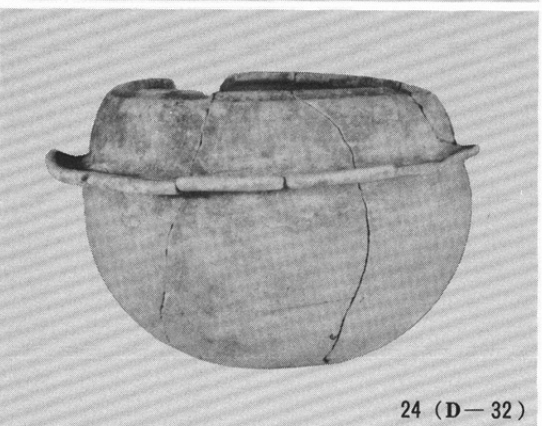
21 (D-38)



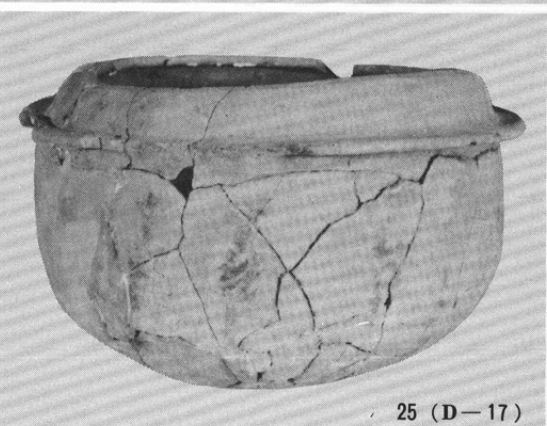
22 (C-5)



23 (D-23)

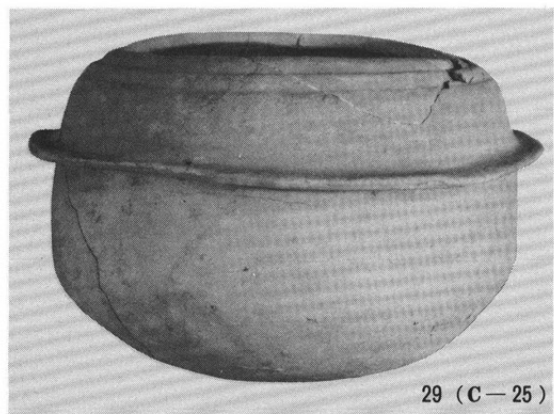


24 (D-32)

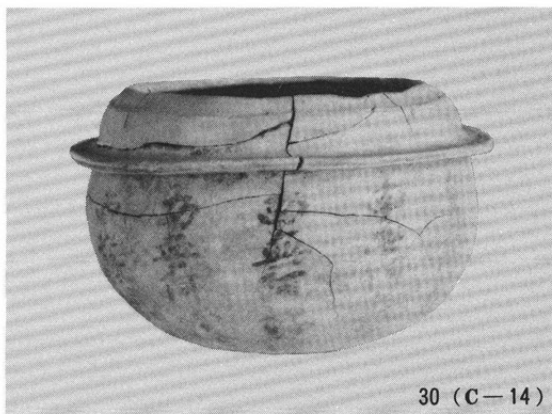


25 (D-17)

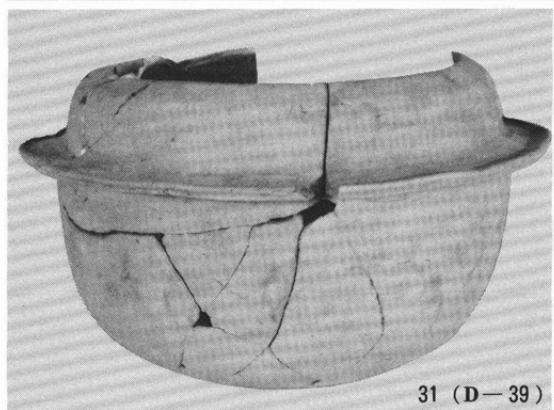




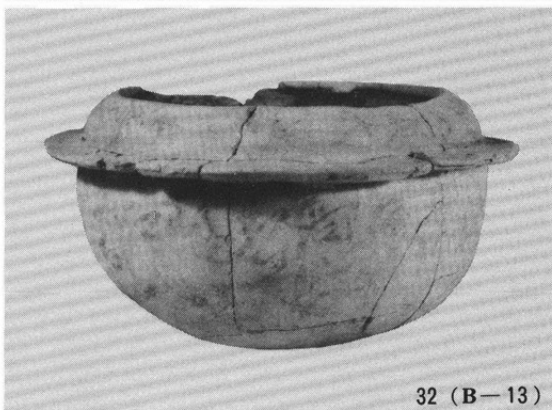
29 (C-25)



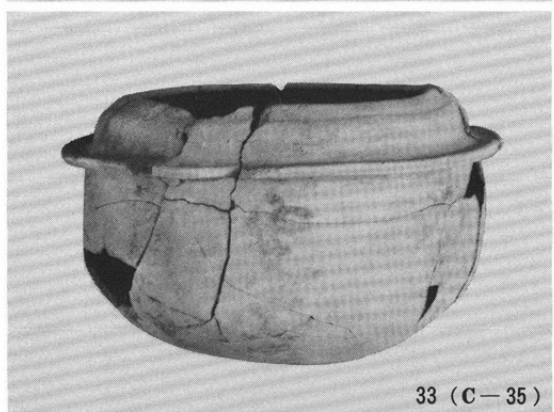
30 (C-14)



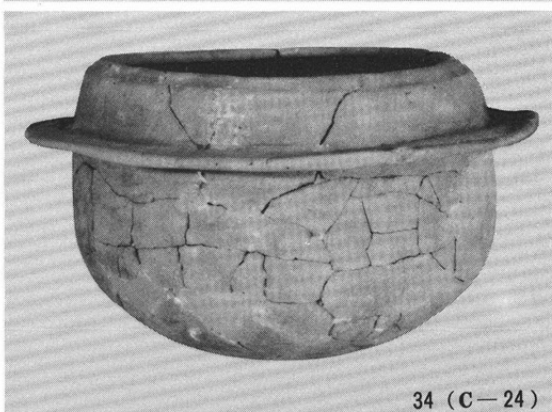
31 (D-39)



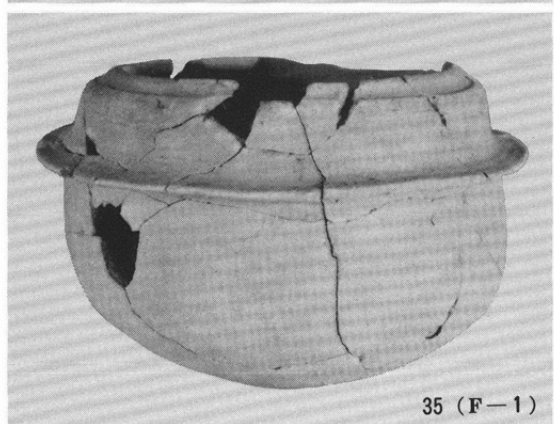
32 (B-13)



33 (C-35)



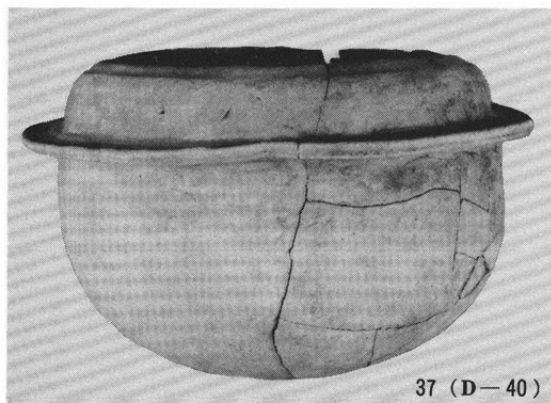
34 (C-24)



35 (F-1)



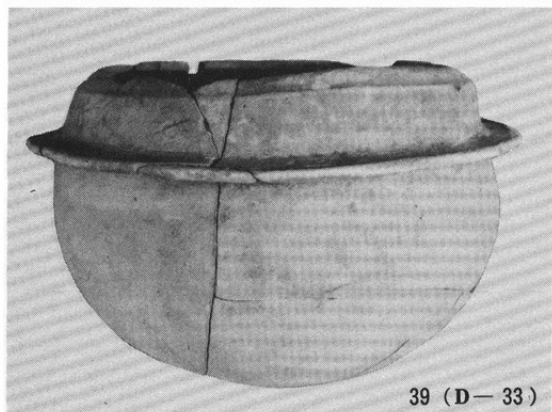
36 (B-9)



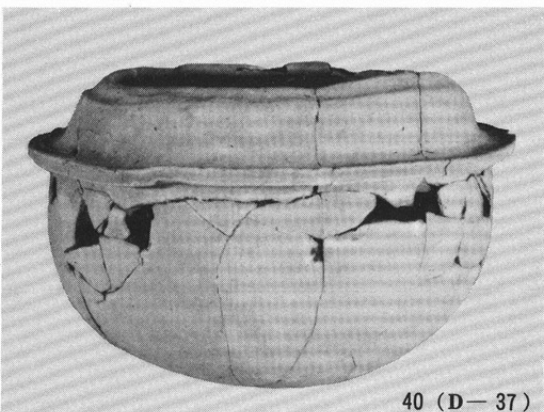
37 (D-40)



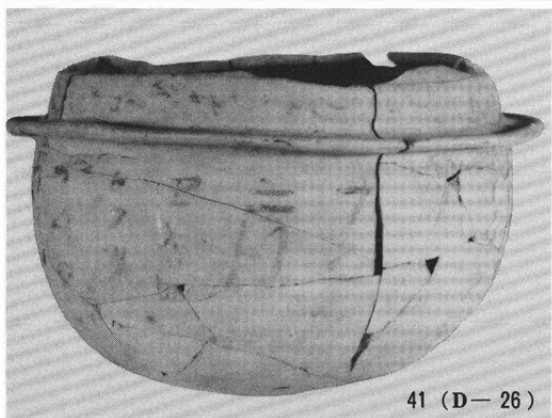
38 (C-21)



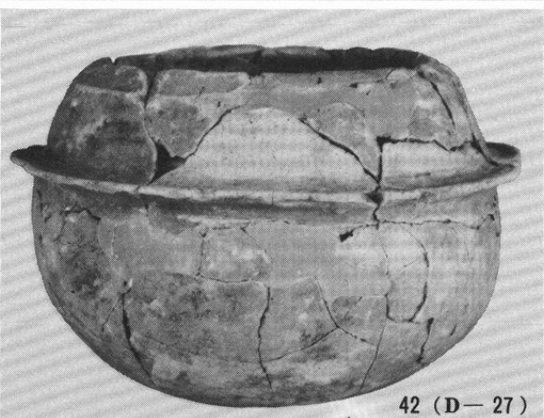
39 (D-33)



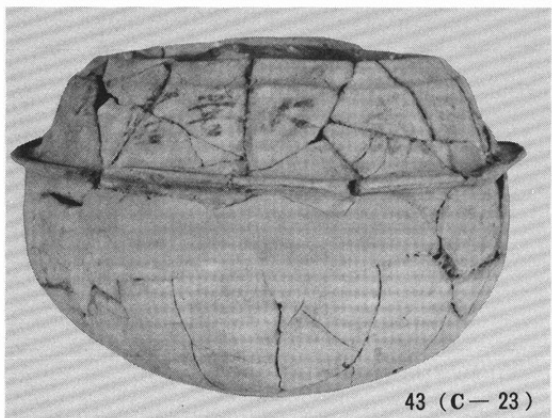
40 (D-37)



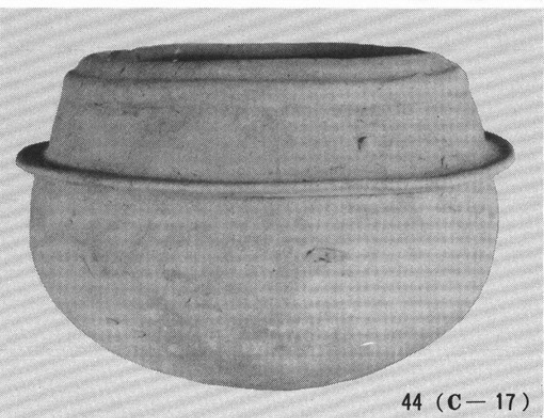
41 (D-26)



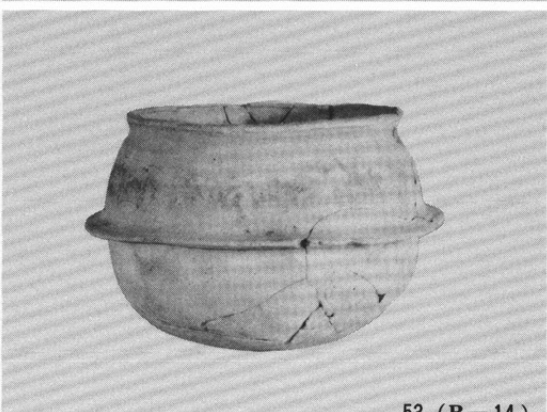
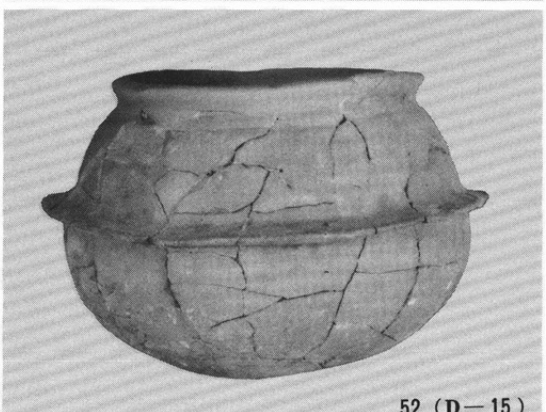
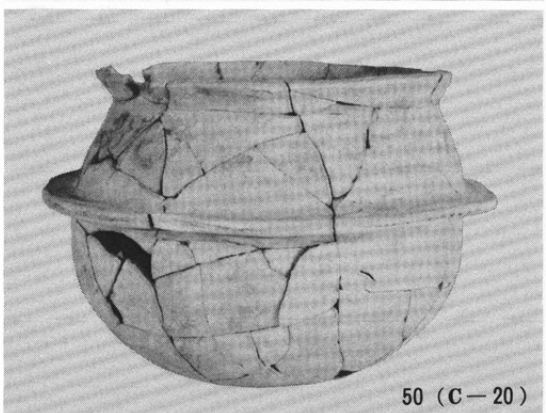
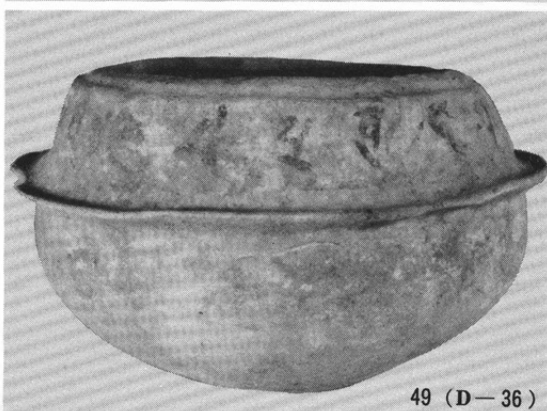
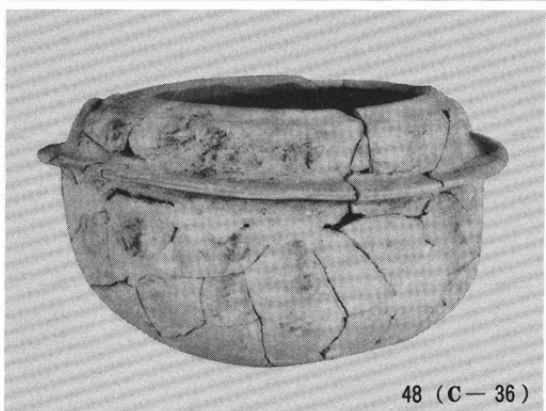
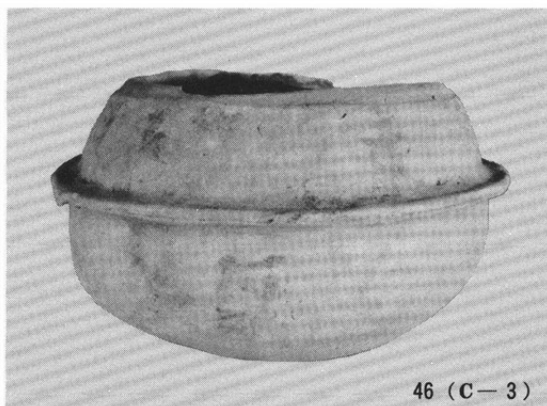
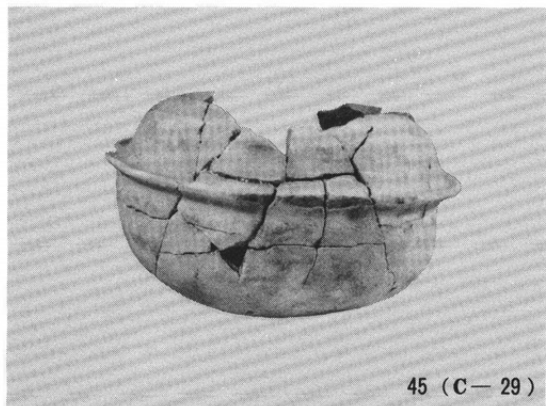
42 (D-27)



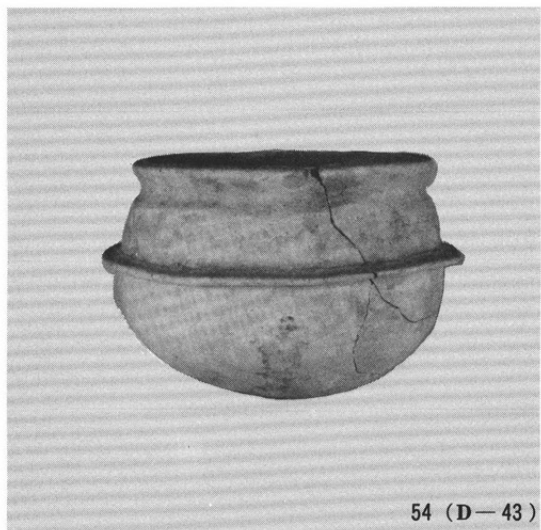
43 (C-23)



44 (C-17)



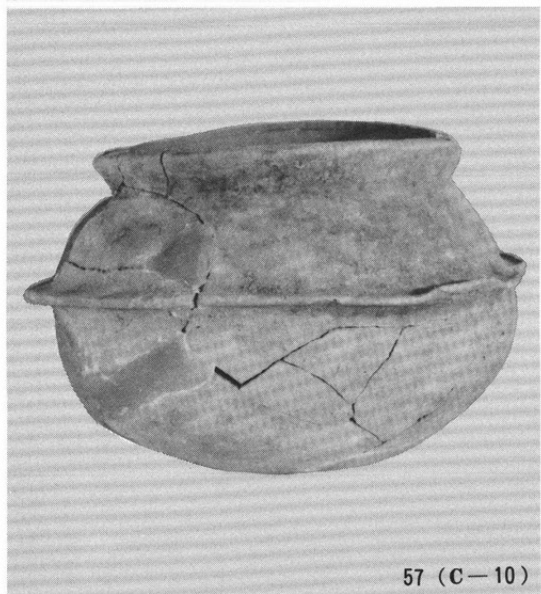




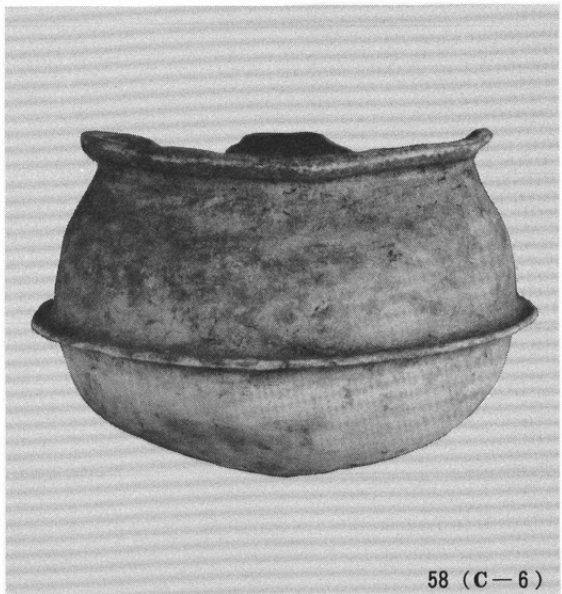
54 (D-43)



55 (C-15)



57 (C-10)



58 (C-6)



59 (D-4)



61

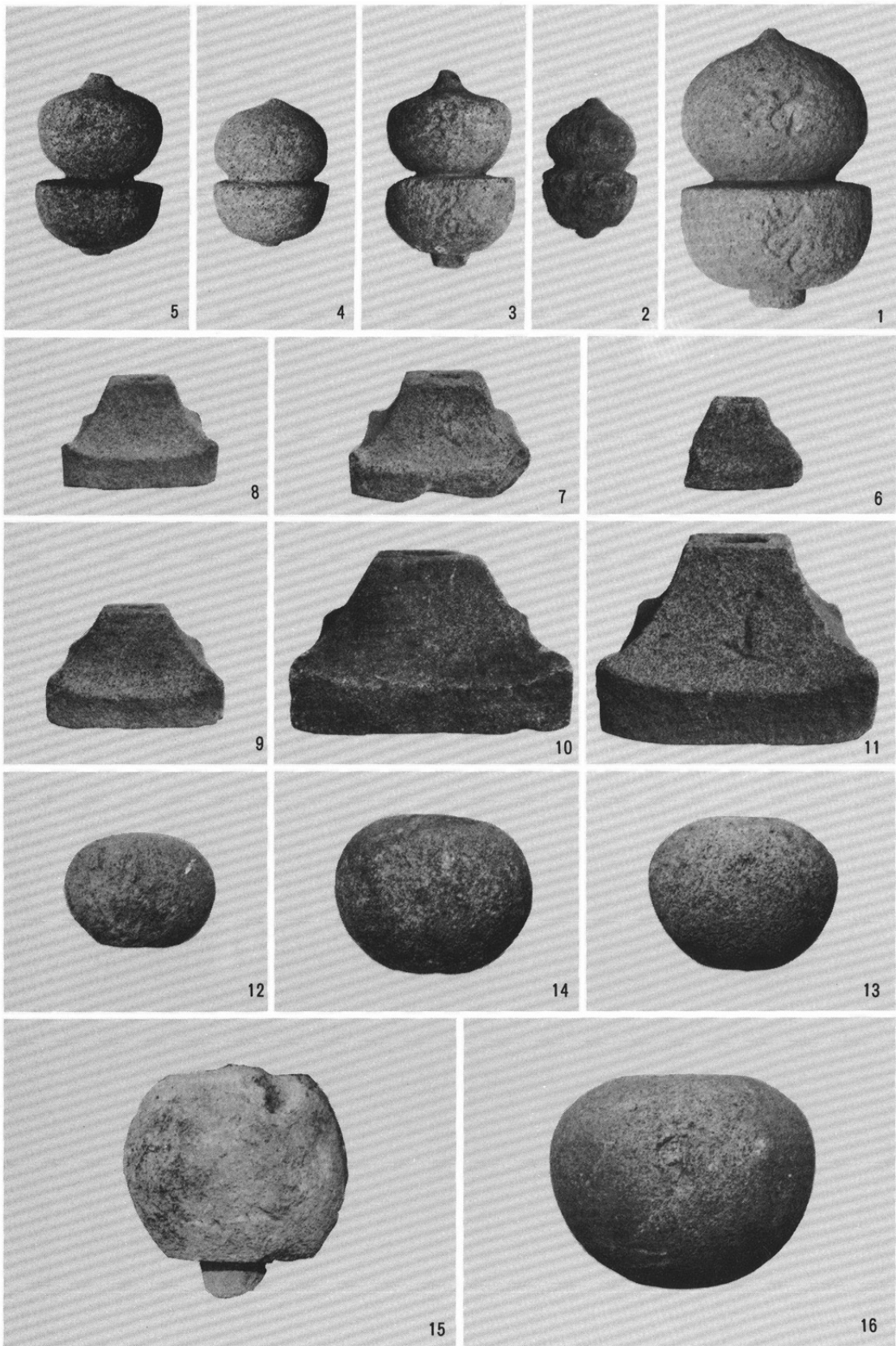


60

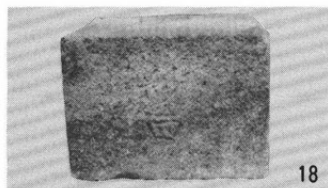


62

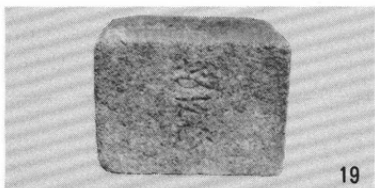
(1/4)







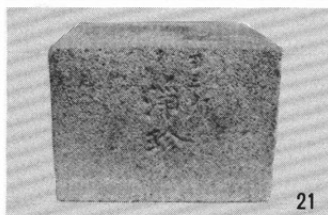
18



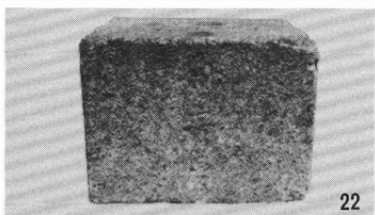
19



20



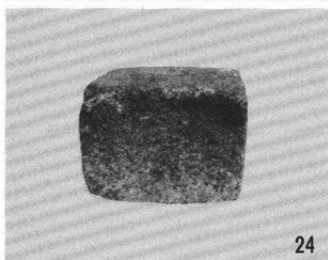
21



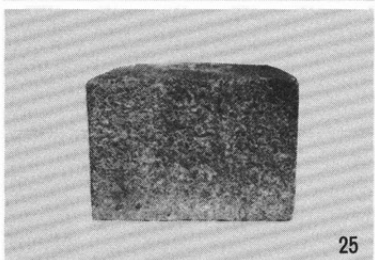
22



23



24



25



26



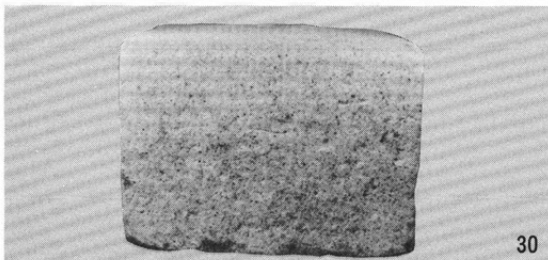
28



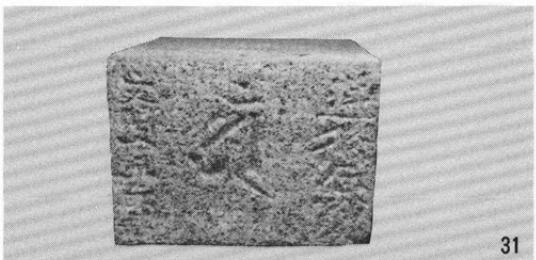
27



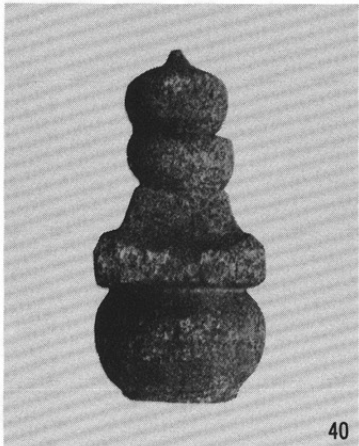
29



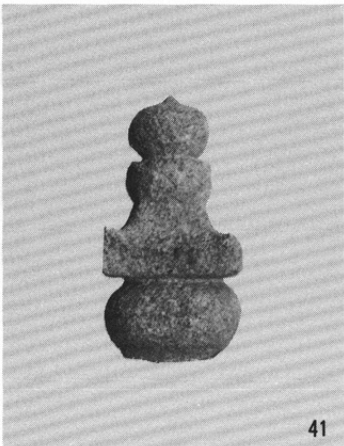
30



31



40



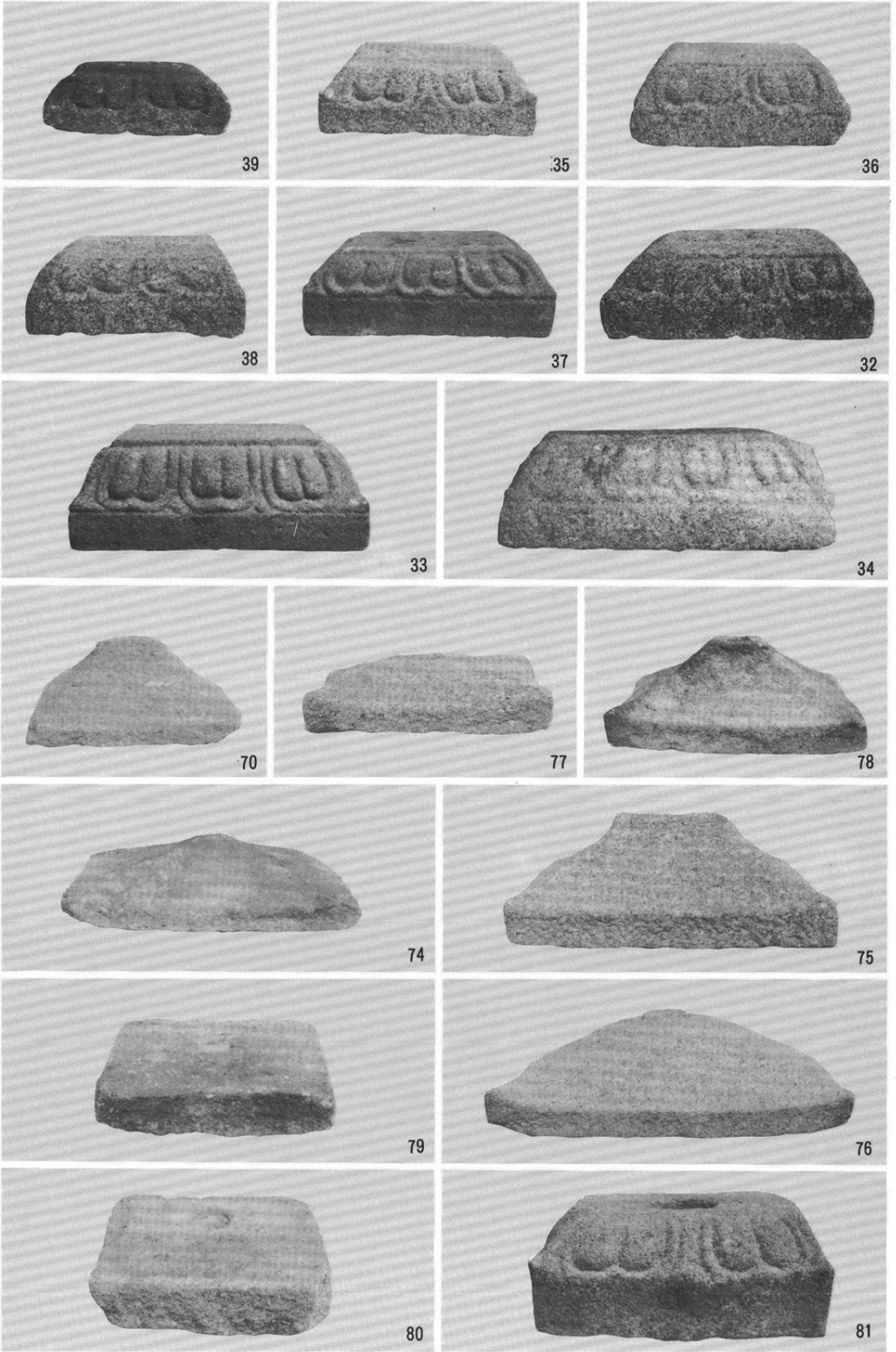
41

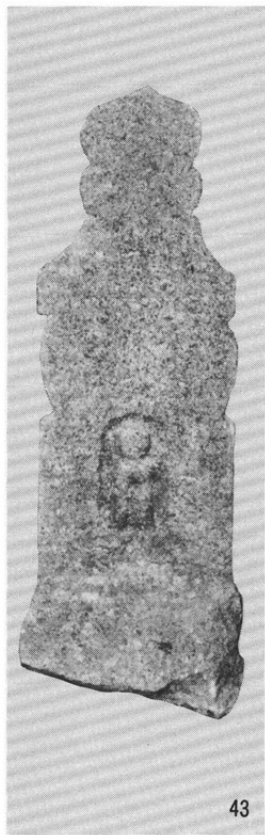


17

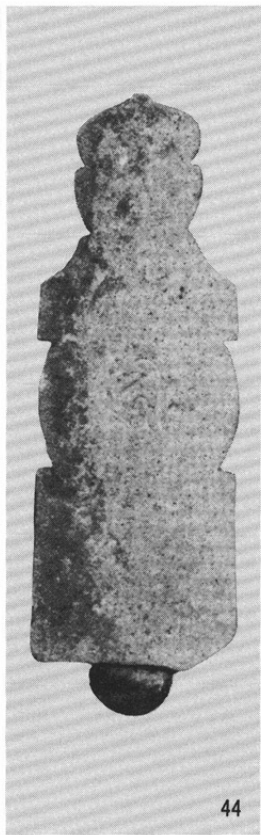


42

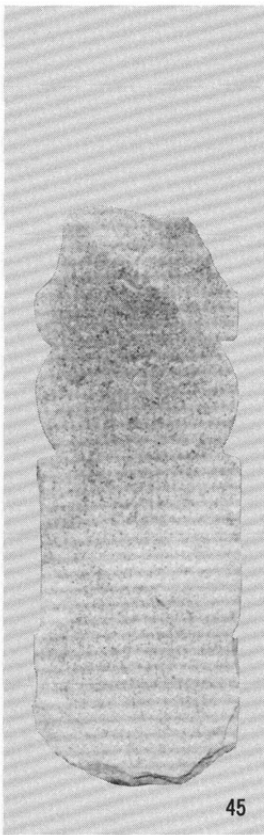




43



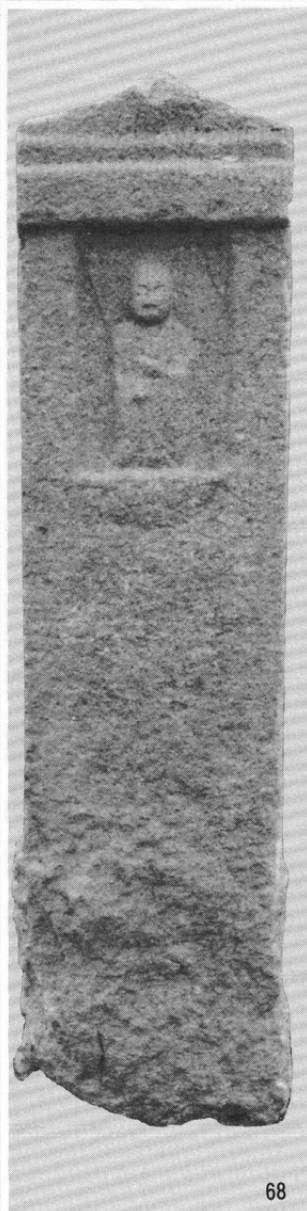
44



45



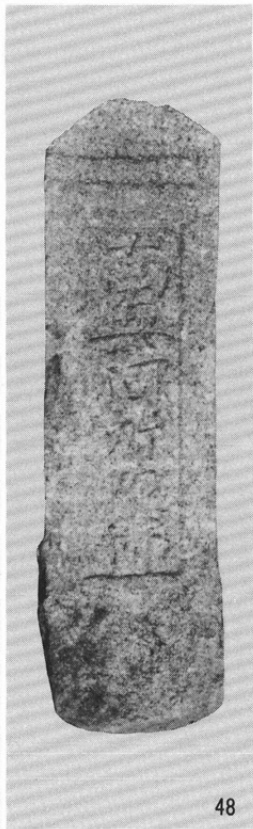
46



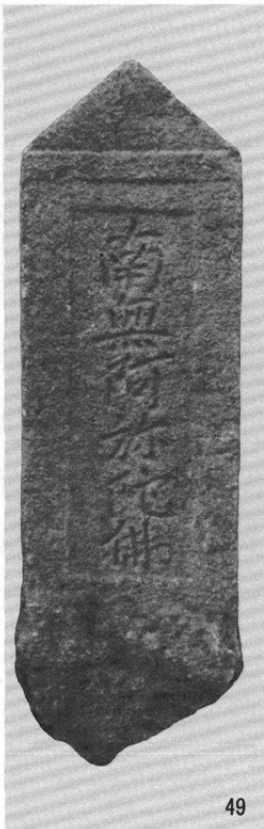
68



47



48

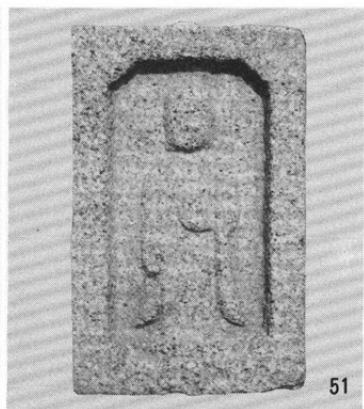


49





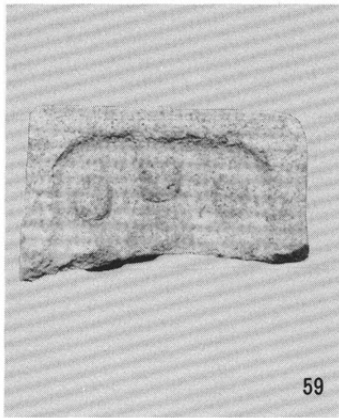
50



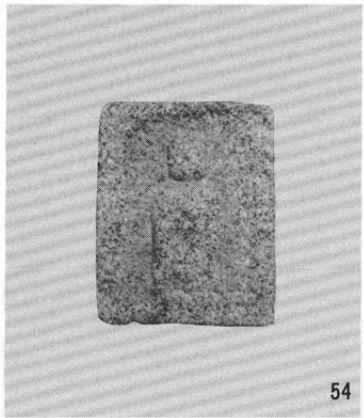
51



52



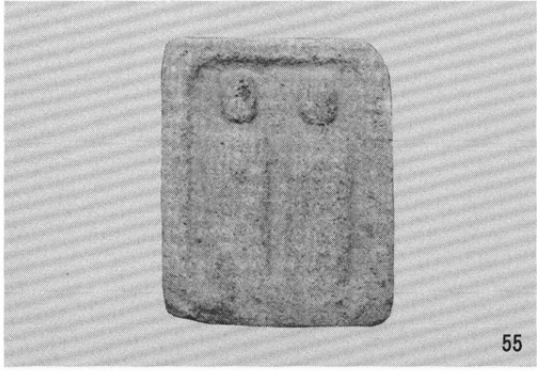
59



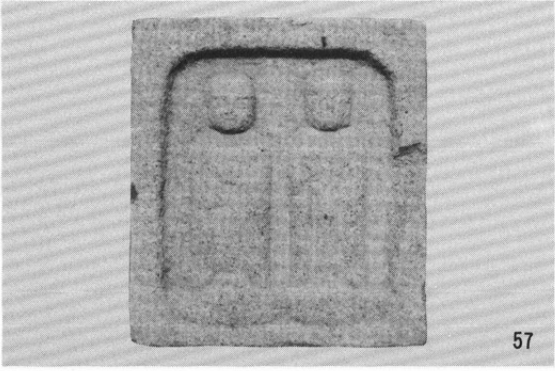
54



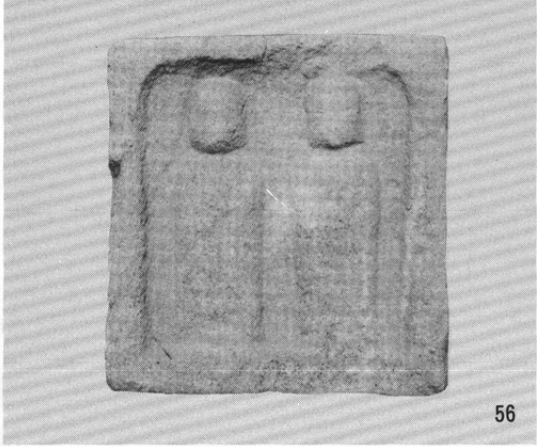
53



55



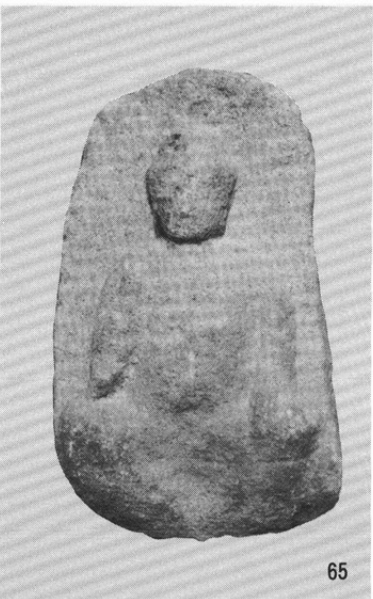
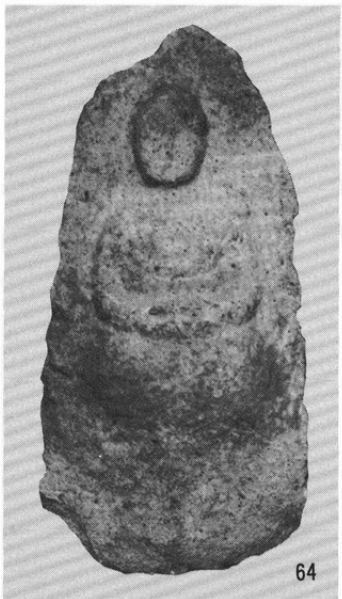
57

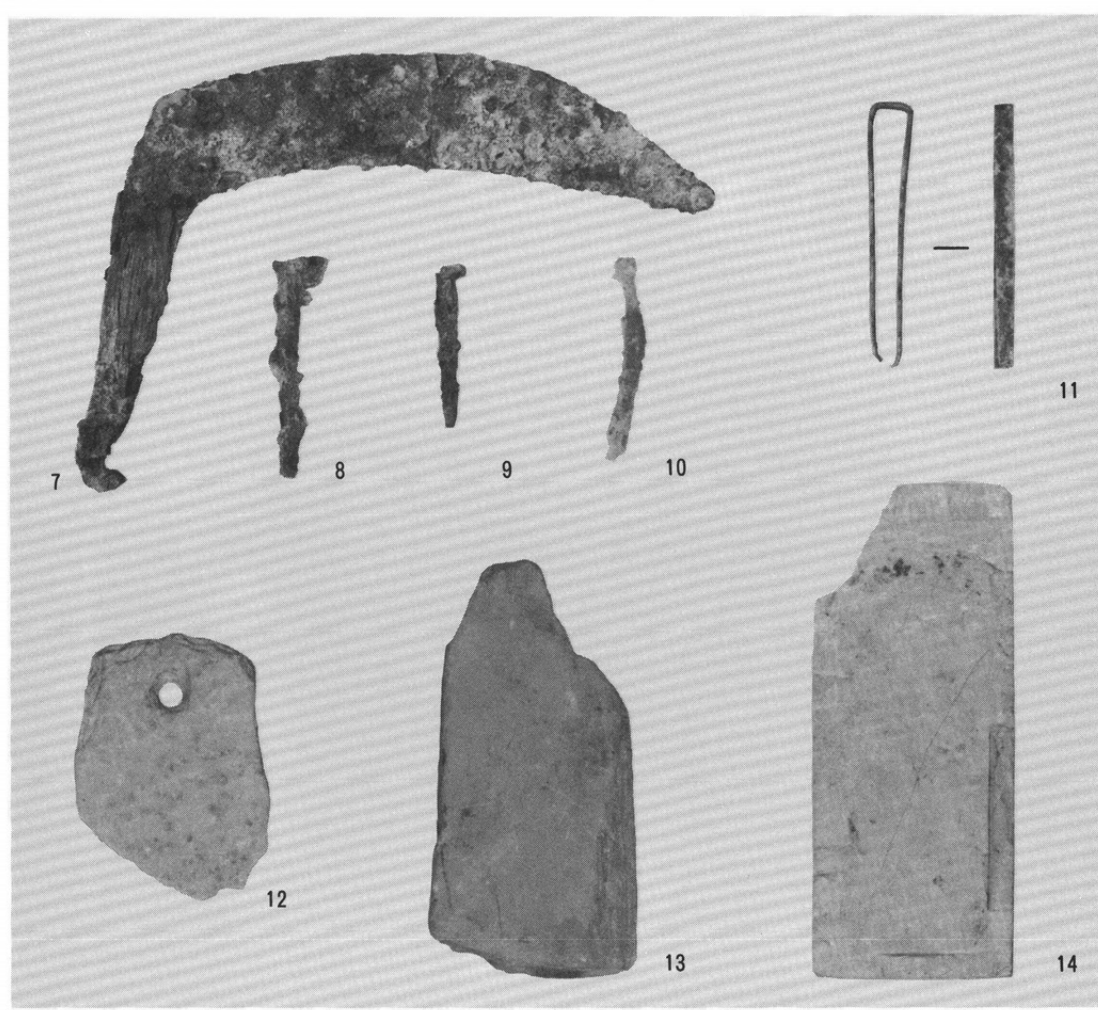
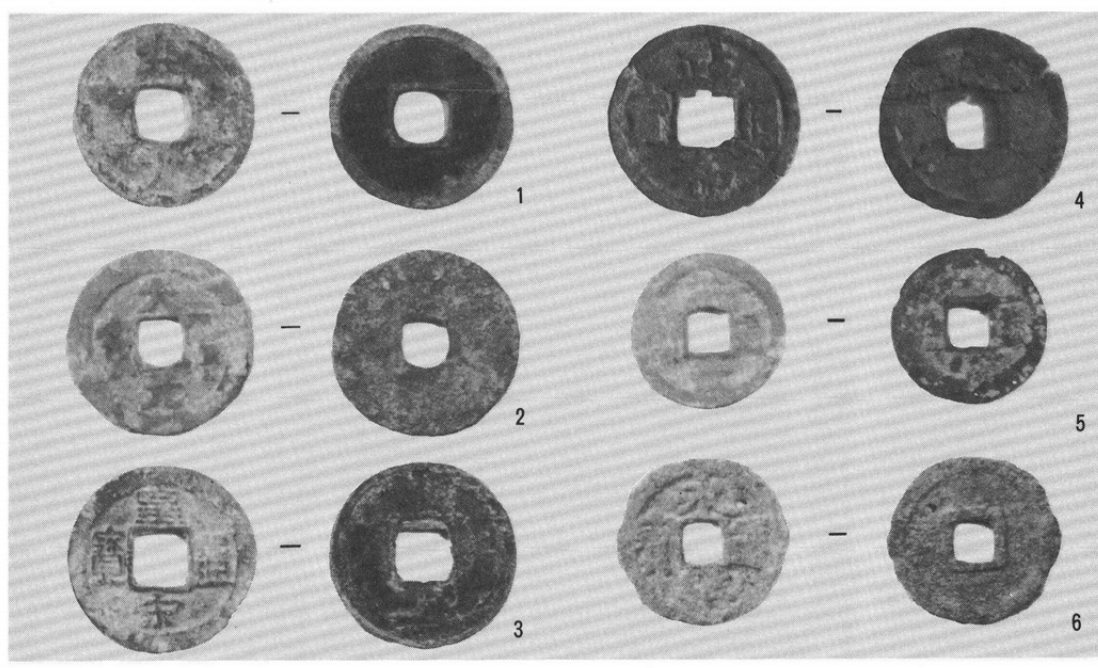


56



58





錢貨 (1/1) ・金属製品・石製品 (1/2)



宮 山 4 号 墳

発掘調査報告





1. 出土土器



2. 埋葬施設

## I 調査の契機と経過

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市道東里73号線の拡幅工事に伴い実施したものである。市道東里73号線は、主要地方道奈良・笠置線より分かれ、北村町宮山丘陵を抜ける幅3 m程度の道であり、宮山古墳群のうち2～3号墳の墳丘裾部に沿いつくられている。拡幅工事計画は、宮山2～4号墳の墳丘裾部を削るものであったが、事前に行った奈良市土木課との協議の結果、拡幅を反対側に行うことにより、2・3号墳については、現状のまま保存されることになった。しかしながら4号墳については、5号墳との間に道路があり、自然崩壊によりその切通し崖面に遺物がすでに露出するといった状態であった。この箇所では、道路拡幅は、直接墳丘には及ばないが、拡幅工事により、墳丘の崩壊がいつそう進むことも予想され、4号墳についてのみ発掘調査を実施することになった。調査は地形実測を含め、昭和55年3月17日より開始し、同年4月3日に現地での調査を終了することができた。

## II 位置と環境

宮山4号墳の所在する奈良市東部は、盆地部とは春日断層崖によって画され、高原性の地域性をもつ異った環境を形づくっている。この地域は、大和高原と呼ばれ、標高約400 m前後の高原地帯がつづき、布目川、白砂川などの開析した山間小盆地を中心に集落が古くより点在している。山間小盆地の中で、比較的規模の大きい大柳生盆地においては、縄文～奈良時代の遺物散布地が確認されており、後期古墳と考えられる円墳が、大柳生、田原、北村などの地域に集中をみせている。また田原においては、先年発見された太安萬侶墓をはじめとした奈良時代古墳の存在も知られている。<sup>注1)</sup><sup>注2)</sup>

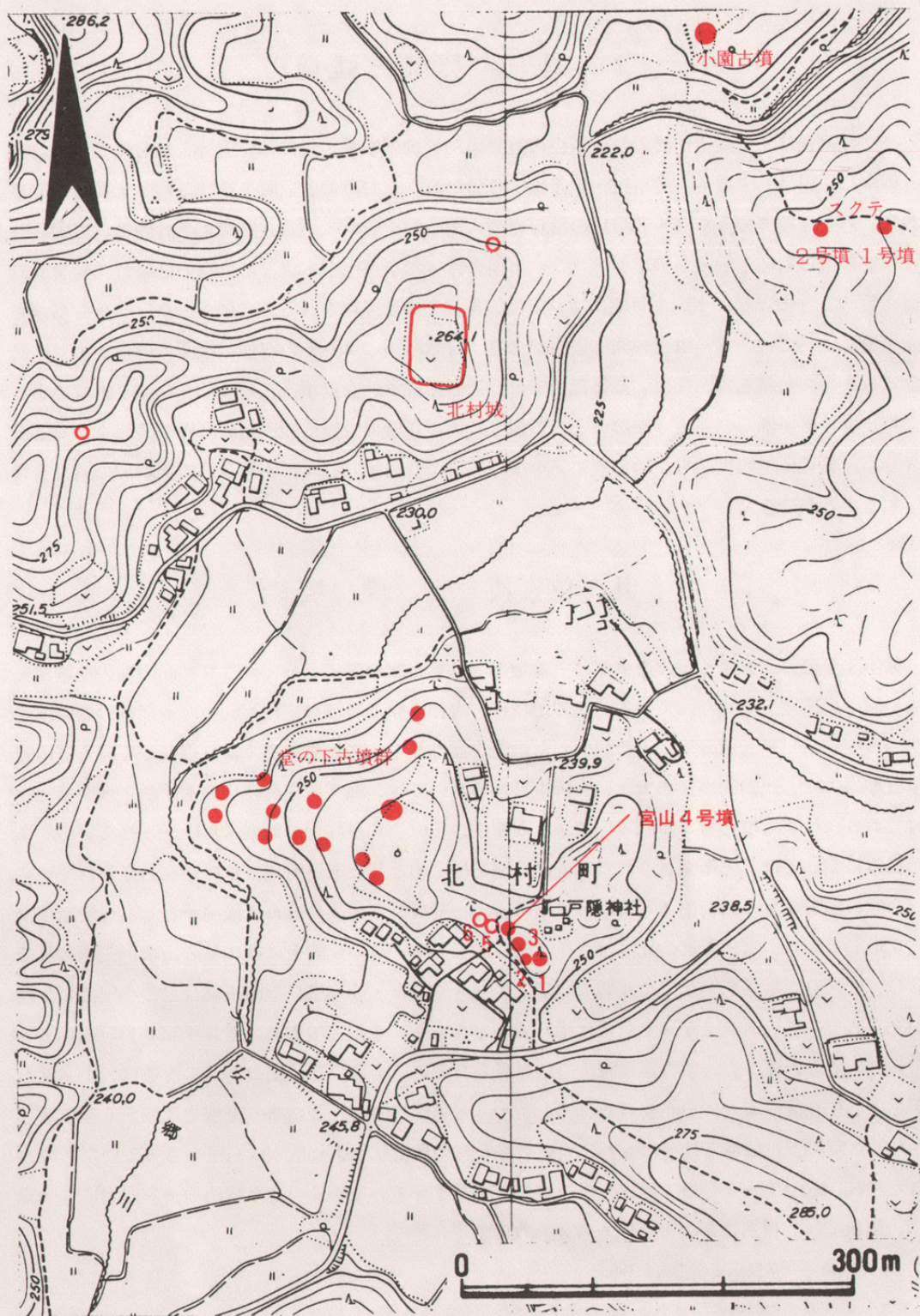
今回の調査を行った宮山4号墳は、北村町宮山と呼ばれる標高265 mを最高所とした丘陵尾根上に立地しており、水田面との比高は、7.0 m程度を測る。この丘陵上には19基の円墳が確認されており、北村町の集落をへだてた北側の尾根上にもスクテ1・2号墳、小園古墳などの小円墳の存在が知られている。スクテ1・2号墳は横穴式石室をもち、小園古墳からは耕作中に6世紀後半と考えられる須恵器杯3点、須恵器提瓶1点が発見されている。<sup>注3)</sup>宮山丘陵上の19基の円墳は、小字堂の下を中心に丘陵西寄りに分布する13基と、宮山4号墳を含む、丘陵南寄り尾根上に並ぶ6基に区分される。堂の下古墳群ではその5基について、石材の散乱状態より横穴式石室をもっていたものと考えられ、宮山1～6号墳では、1号墳が横穴式石室をもっている。また宮山5・6号墳については、現状では、自然地形の可能性も考えられる。

注1) 奈良市『奈良市史考古編』1968

注2) 奈良県立橿原考古学研究所『奈良市太安萬侶墓発掘調査概報』1979

注3) 注1参照





第1図 宮山4号墳と周辺の遺跡分布(1/5000)

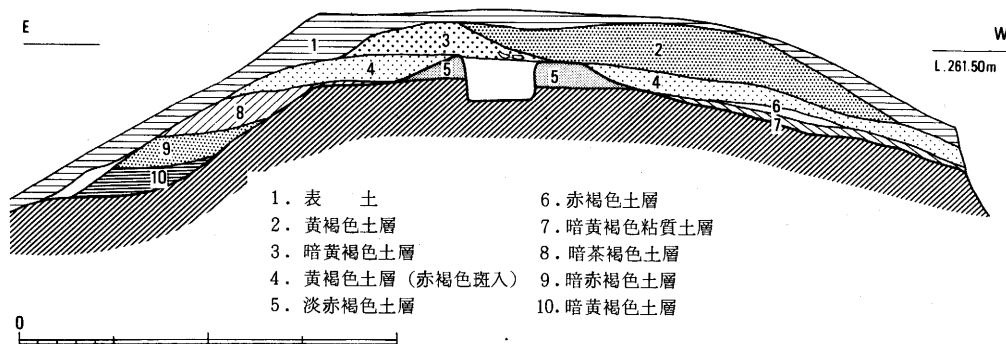
### Ⅲ 墳丘と外部施設

宮山4号墳は、1～3号墳とともに丘陵尾根稜線上に位置しており、その墳丘南裾は、3号墳と接している。墳丘は、その西北約½が、市道東里73号線の切通しに沿って自然崩壊が進んでいるが、地形実測を通じて径11m、高さ2m程度の円墳であることを確認することができた。また外部施設としての葺石、埴輪列については、まったく認めることができない。

墳丘については現在の地表面より約20cmが表土（腐葉土）であり、以下墳丘中央部では約60cmの黄褐色土の盛土があり、地山の赤褐色土に至る。旧自然地形の隆起を利用して墳丘は築造されており、墳丘構築に際しては、まず、南側では地山面を削り整形し、東側では傾斜面に盛り土して墳丘下半部をつくっている。この段階で墓壇が掘削され、埋葬が行われたものと思われ、墳丘中央部ではさらに黄褐色土を約40cm盛り土して墳丘の築造は完了している。

### Ⅳ 埋葬施設と遺物出土状態

埋葬施設は墳丘ほぼ中央に存在した木棺直葬1箇所である。主軸を磁北に対して $41^{\circ}30'$ と大きく西に振ったもので、墳丘中央部に盛り土された淡赤褐色土上面から地山を掘削してつくられる土壇内に木棺を埋置する。土壇は上部で幅約1mを測り、長さは北部が崩壊しているため本来の規模は明らかではないが、約2.1m遺存していた。底部は幅約60cm、長さ2.0mを測る。木棺はこの墓壇のほぼ中央に水平に埋置され、木棺そのものは遺存していなかったが、木棺痕跡の横断面は半円形を呈しており、割竹形木棺と想定される。棺底部は墓壇底より約5cm高い。観察しえた幅は、棺底部より約10cmの高さで約57cmを測ることができ、南端ではやや狭く約50cmを測ることから被葬者の頭部を北側に置かれていた可能性も考えられる。木棺痕跡の長さについては1.7m遺存していた。



第2図 宮山4号墳墳丘土層(1/80)

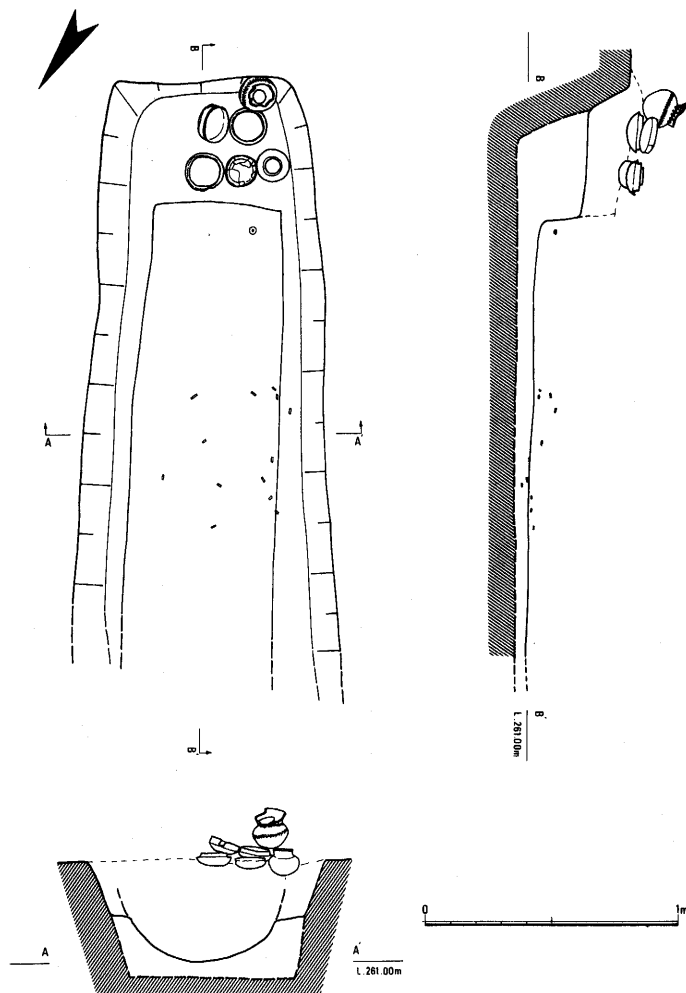
IV 埋葬施設と遺物出土状態



第3図 宮山2～5号墳墳丘外形(1/200)



## 宮山4号墳



第4図 宮山4号墳埋葬施設(1/30)

遺物の出土状態は、棺南端、墓壇の上面より、須恵器広口壺1点、須恵器杯蓋1点、須恵器杯2点、須恵器短頸壺1点、土師器杯1点が、並置された状態で出土し、棺の埋置終了後、一括して置かれ、墳丘の築造とともに埋納されたと考えられる。棺内よりは南端寄りで滑石製紡錘車1点、棺中央部より管玉13点が散在した状態で出土した。管玉は棺底部と土壇部との間よりも出土しており、被葬者の身につけていたものか、棺外に副葬されたものか断定はできない。また、墳丘西寄りでは、墳丘下半部の盛り土である黄褐色土層上面より須恵器広口壺1点、子持有蓋台付壺1点が立てられた状態で出土しており、墳丘下半部の築造、埋葬終了後に、墳丘上において祭祀が行われた可能性が推察される。また墳丘東側裾部表土より須恵器杯、南側裾部表土より須恵器高杯、西側表土より須恵器短頸壺がそれぞれ出土した。

なお、地元の伝承によれば、墳丘西北崩壊部より、須恵器が出土していることが知られるが、現在その所在は明らかではなく、実見することはできなかった。

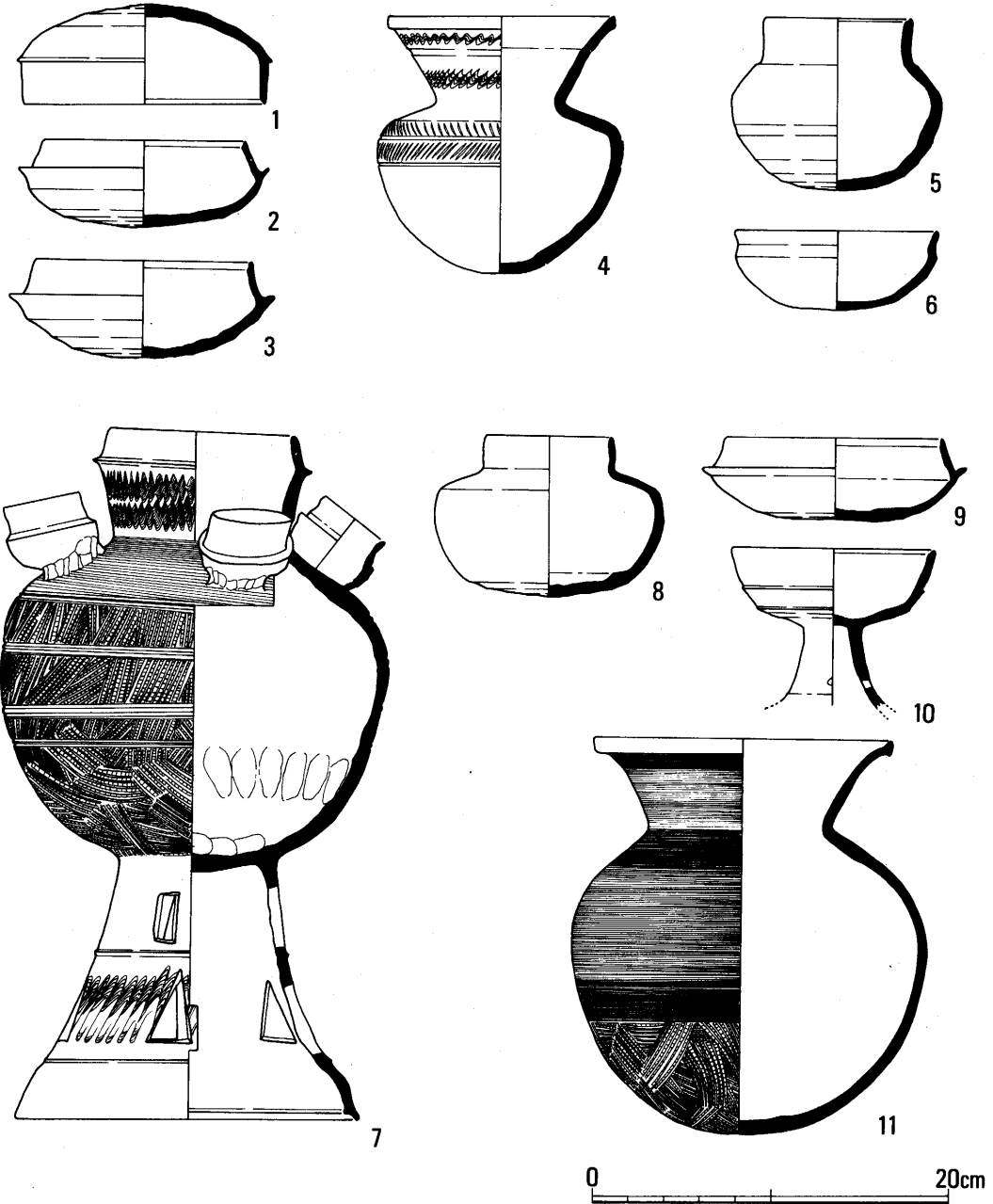
## V 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・玉類・石製品がある。以下、出土地点ごとにその概要を記述する。

### (1) 墓壇内出土遺物

土師器(第5図 図版4) 椀(6)がある。丸底に近い小さな底部と、ゆるやかに内彎しなが

V 出土遺物の概要



第5図 宮山4号墳出土土器(1/4)

ら斜め上方に立ち上る体部とからなる。口縁部は強いよこなでによって「く」の字状に外反し、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに摩滅が著しく、調整は観察し難い。色調は赤褐色を呈し、胎土は細砂を含む。

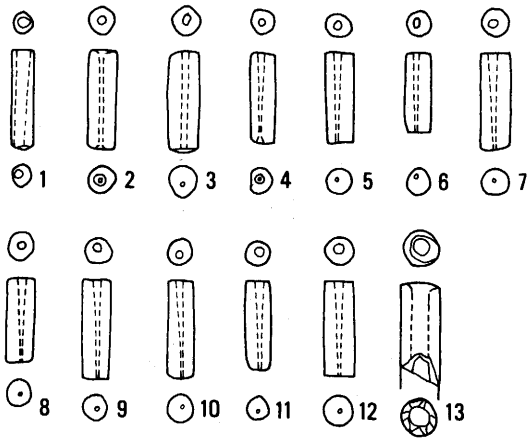
須恵器(第5図 図版4) 杯・杯蓋・広口壺・短頸壺がある。

杯(2・3) たちあがり部はやや内傾している。口縁端部は内傾して浅い凹面をなすもの(2)と、内面に段をなして内傾するもの(3)がある。受部からたちあがりにかけて回転ナデを施し、底・体部は回転ヘラ削り調整を行う。ロクロ回転は右方向。(2)は黒灰色を、(3)は青灰色を呈す。胎土には砂粒を含む。

杯蓋(1) 口縁部は垂直に下り、口縁端部は段をなして内傾する。天井部はやや丸味を持ち、口縁部との間に鋭い稜をなす。天井部下半と口縁部は回転ナデ、天井部上半は回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転は右方向。灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

広口壺(4) 口頸部は斜上方に大きく開き、口縁端部は断面三角形を呈す。体部最大径は上位に位置し、肩部は強く張出す。口頸部中央に浅い沈線をめぐらせ、その上下に波状文を施す。また体部にも2条の沈線をめぐらせ、その間と上部に方向を異にした2条の刻み目文を施す。体部上半から口頸部にかけて回転ナデを行い、体部下半は回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転は右方向。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。

短頸壺(5) 短くほぼ垂直に立ち上る頸部を持つ。口縁端部はやや丸く、段をなして内傾する。体部最大径はやや上位にある。体部上半から頸部にかけて回転ナデを施し、体部下半は回転ヘラ削りを行う。ロクロ回転は右方向。色調は黒灰色を呈し、胎土は1~5mm大の砂粒を含む。



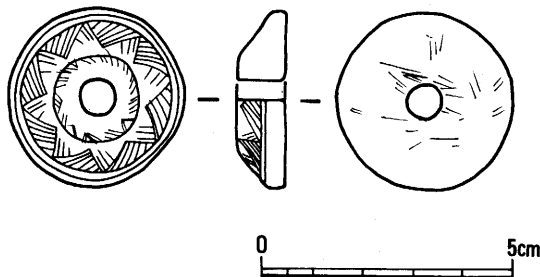
(2) 棺内出土遺物

玉類 (第6図 図版5)

管玉が13点ある。碧玉製のもの12点(1)~(12)と、ガラス製のもの1点(13)である。碧玉製のものはいずれも端面円形を呈し、一方向より穿孔されている。色調は濃青緑色を呈す。ガラス製のものは、端面円形を呈し、孔径は中央部でやや大きくなる。一端を欠いている。色調はコバルトブルーを呈す。

石製品 (第6図 図版5)

紡錘車が1点ある。上・下面は平らに整形し、側面は上半に斜面を作った後、ほぼ垂直に落している。側斜面には線刻による鋸歯文がめぐる。中心部に径0.7cmの円孔を穿つ。径2.55cm、厚さ1.0cmを計る。滑石製である。使用による摩滅が著しい。



第6図 宮山4号墳出土管玉・石製紡錘車(2/3)



## V 出土遺物の概要

	全 長	最 大 径	最 小 径	最大孔径	最小孔径	重 量
1	20.00	5.20	5.00	2.80	2.35	0.9
2	19.65	6.10	6.00	2.10	1.10	1.4
3	20.60	6.70	6.40	2.15	1.15	1.7
4	18.80	5.40	5.15	1.85	1.00	1.1
5	18.20	6.00	5.75	1.95	0.75	1.2
6	16.30	5.85	5.65	2.00	1.10	1.05
7	19.80	6.35	6.20	2.20	0.90	1.5
8	17.45	6.30	6.15	2.00	0.75	1.35
9	20.10	6.20	6.00	1.95	1.00	1.4
10	19.45	6.10	6.05	2.10	1.00	1.35
11	20.55	7.80	7.55	4.85	3.30	1.5
12	17.60	5.50	5.25	1.70	1.05	1.0
13	19.20	6.30	6.15	2.10	1.05	1.45

表1 宮山4号墳出土管玉計測表(単位:mm 重量単位:g)

### (3) 墳丘出土遺物

須恵器 杯、高杯、広口壺、短頸壺、子持有蓋台付壺がある。

杯(9) 口縁部はやや内傾して立ち上り、端部はやや鋭く内側にわずかの段を持つ。底部は浅く、平坦に近い。口縁部から体部にかけて回転ナデを施し、底部にわずかの回転ヘラ削りを行う。ロクロ回転は右方向。色調は灰色を呈し、胎土は細砂を含む。

高杯(10) 口縁部はやや外方に立ち上り、端部は丸い。杯部中央に1条の稜がめぐり、脚部はなだらかに外反して下るが、下半を欠く。円形スカシを4方向に穿つ。口縁部および脚部は回転ナデ調整、杯部下半は回転ヘラ削りを行う。ロクロ回転は左方向。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。

広口壺(11) 頸部は大きく外反し、口縁端部は垂直な凸部をなし下端が丸く突出する。体部はほぼ球形である。頸部および体部上半にはクシ目を密に施し、体部下半はタタキ調整を行う。体部内面はナデ調整。色調は青灰色を呈し、胎土には砂粒を含む。

短頸壺(8) 肩が張り扁平な感じを受ける体部に、短く直立する頸部を持つ。端部は丸い。頸部は回転ナデ、体部上半は回転ヘラ削りの後回転ナデ、体部下半および底部は回転ヘラ削りを施す。ロクロ回転は左方向。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。

子持有蓋台付壺(7) ほぼ球形の体部に短い頸部と脚部を持つ。やや外反する頸部に内傾するたちあがり部がつき、口縁端部は丸い。受部は断面三角形を呈す。頸部には2条の波状文をめぐらせている。体部上半4方向に小壺がつく。脚部はやや外反して下った後、大きく外方にふんばり、端部は浅い凹面を持ち内傾する。2条の稜線がめぐり、上段には4方向に方形スカシを、中段には波状文をめぐらせた後5方向に三角形スカシを設けている。体部はタタキ調整を行った後、肩部と体部下半に3条のクシ目を施している。色調は黒灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。

## VI ま と め

宮山古墳群は、宮山丘陵に存在する小円墳群の中で、6基で構成される小支群として把握することが可能である。最も南に位置する1号墳が横穴式石室を有し、今回調査した4号墳より時期が新しいことが明らかな他、群集墳の単位として、支群内の相互関係、築造順序等をうかがうことのできる資料はない。今回調査した4号墳については、その出土遺物からほぼ5世紀末～6世紀初頭とその時期を考えておくのが妥当と思われ、おそらくは宮山古墳群の中では、比較的、古い時期に築造されたものであろう。

奈良市東部山間地域における群集墳については、従来調査例は少く、その大部分は、横穴式石室を主体とする6世紀後半の後期古墳とみなされてきた。しかしながら今回の宮山4号墳のように木棺直葬を埋葬主体とし、一墳丘にひとつの埋葬施設しかもたない。古い様相を呈するものは、田原ケコバ古墳<sup>注)</sup>なども知られ、いくつか点在しているように思われる。奈良市東部山間地域においては、これらの古墳の出現を契機として群集墳の形成が進んでいったとも考えられ、同時代の大和盆地部においてみられる同様の木棺直葬墳を含む群集墳との関連で、このような群集墳中に位置する単葬の木棺直葬墳の出現契機について考察を進めねばならないものと考えられる。

また宮山4号墳では、棺内より出土した副葬品としては、玉類と、石製紡錘車のみであり、通常一般的な鉄製品の副葬はみられない。このことが、被葬者の性格あるいは、地域性を示すものとは速断はできないが、被葬者の性別を含めた検討が今後の課題となるであろう。

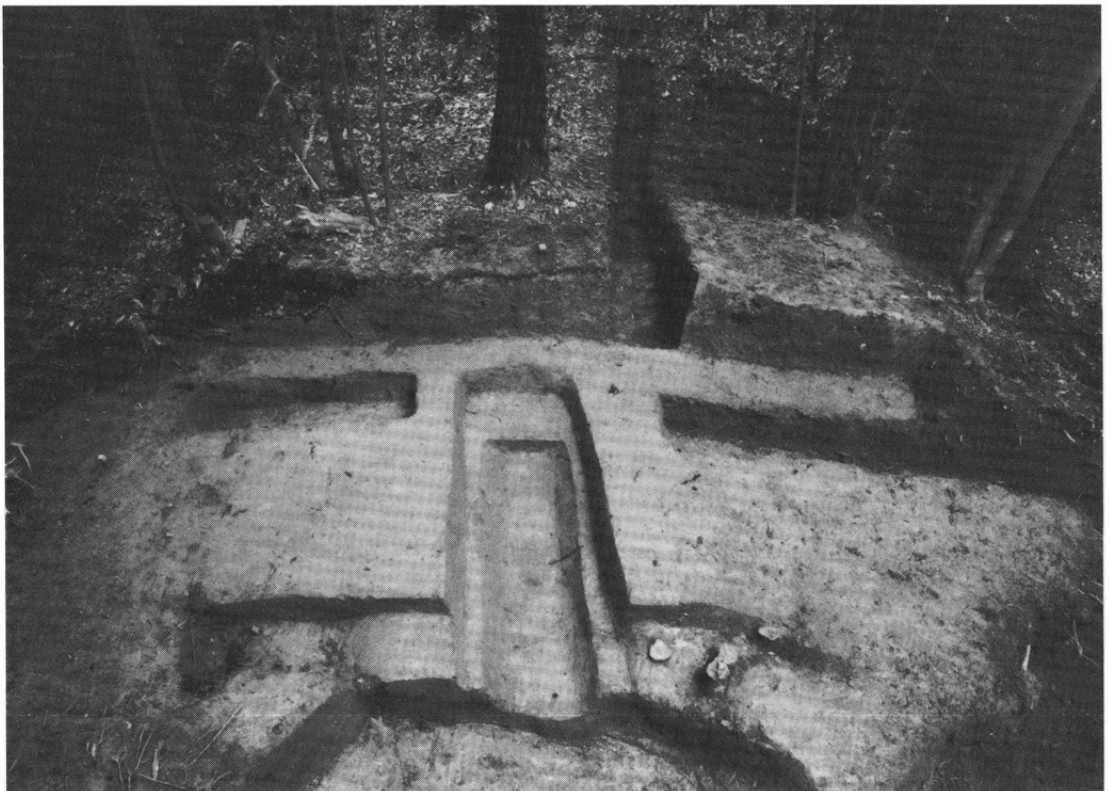
以上、群集墳のもつ性格上、その中の1基のみの調査からうかがい知れることはきわめて限定される。ただ、奈良市東部山間地域においては、宮山4号墳のような単葬の木棺直葬小円墳から、複次葬の横穴式石室をもつ小円墳へと同一の築造単位内で、比較的簡単な変化を示している可能性は、想定されなくはない。今後の資料の増加、蓄積を待ち、考察を進めたい。

注) 奈良県教育委員会「奈良市ケコバ第1号墳出土遺物」『奈良県文化財調査報告第三集』1960

圖 版

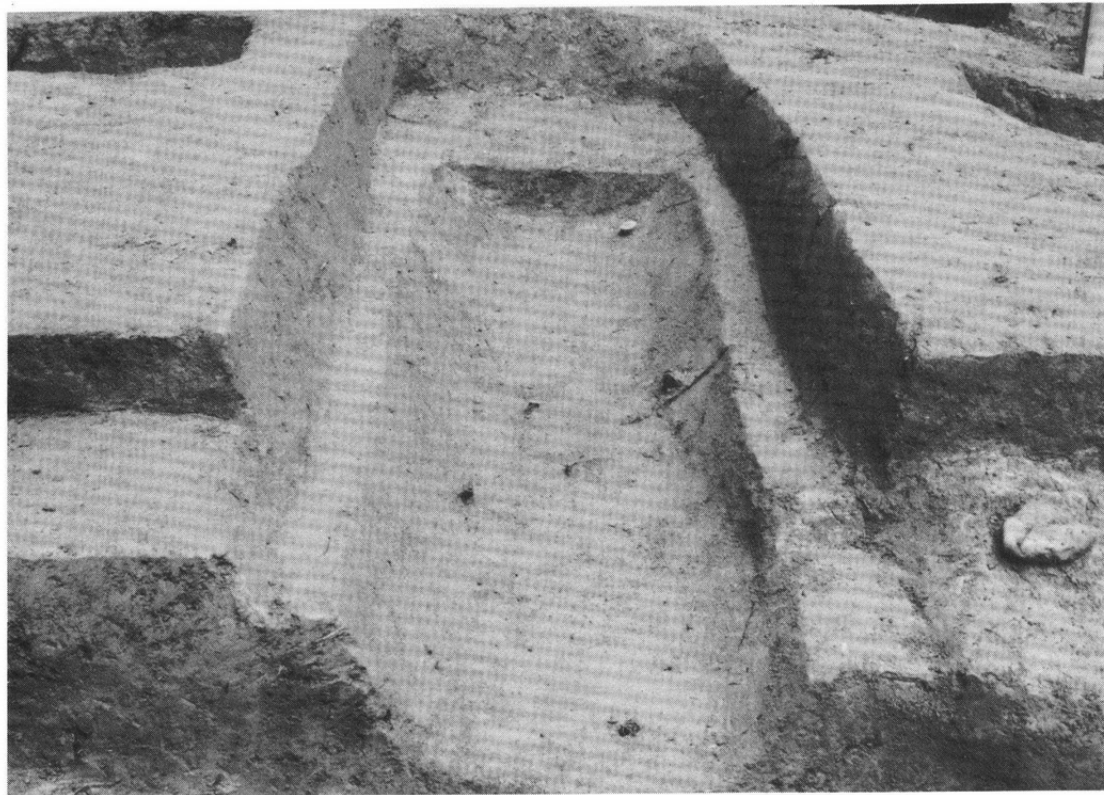


1. 墳丘 (南から)

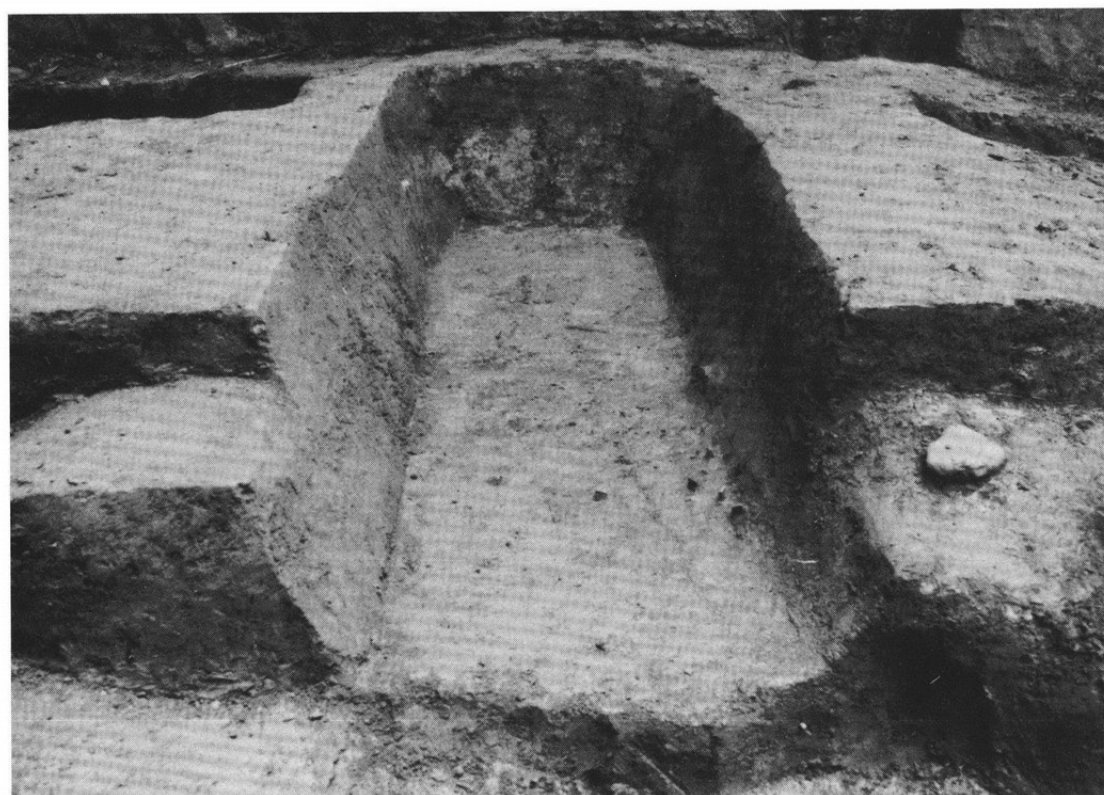


2. 埋葬施設 (北から)





1. 木棺痕跡（北から）



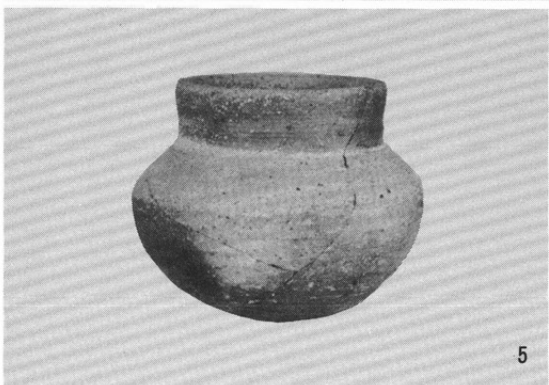
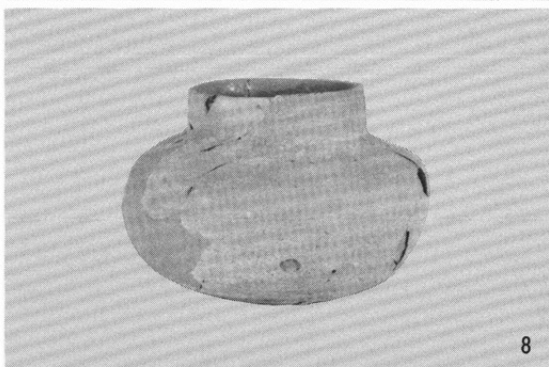
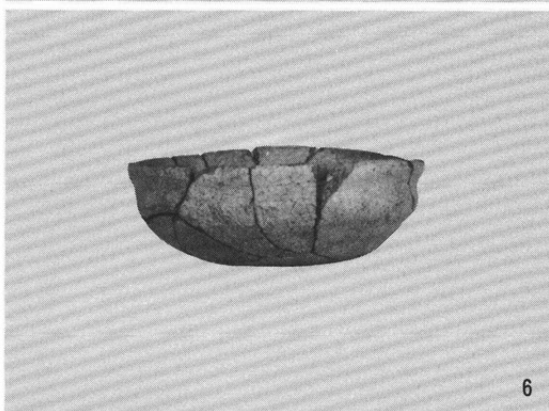
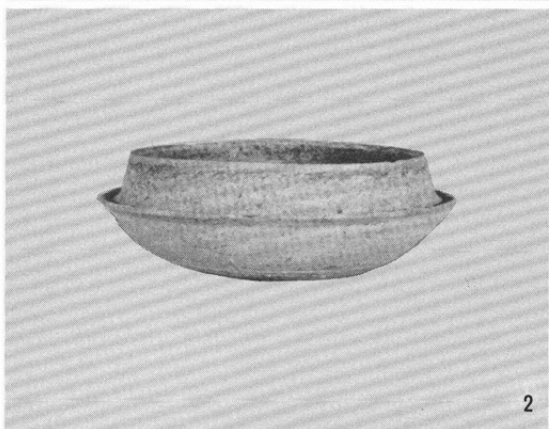
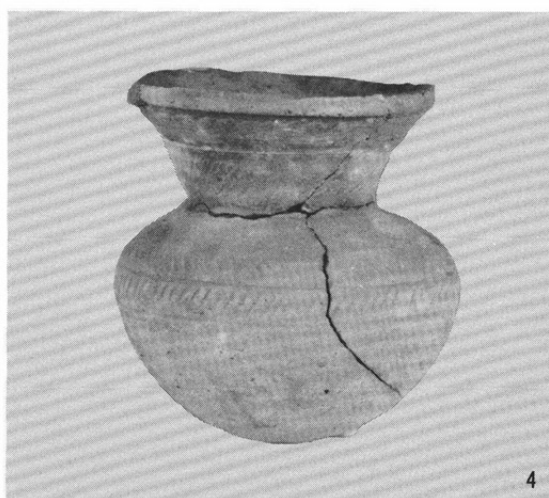
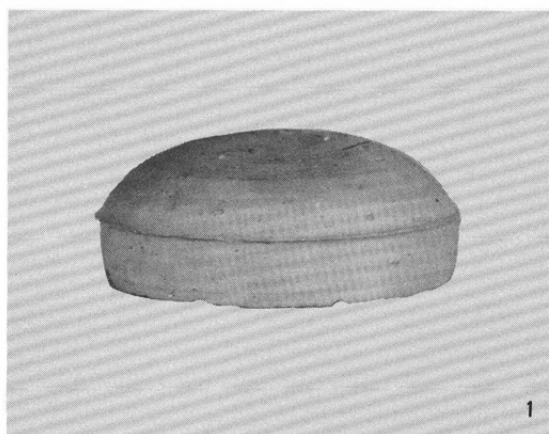
2. 墓壇（北から）



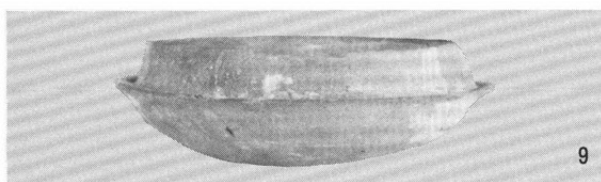
1. 墳丘内遺物出土状態（南から）



2. 墓坑内遺物出土状態（北から）







9



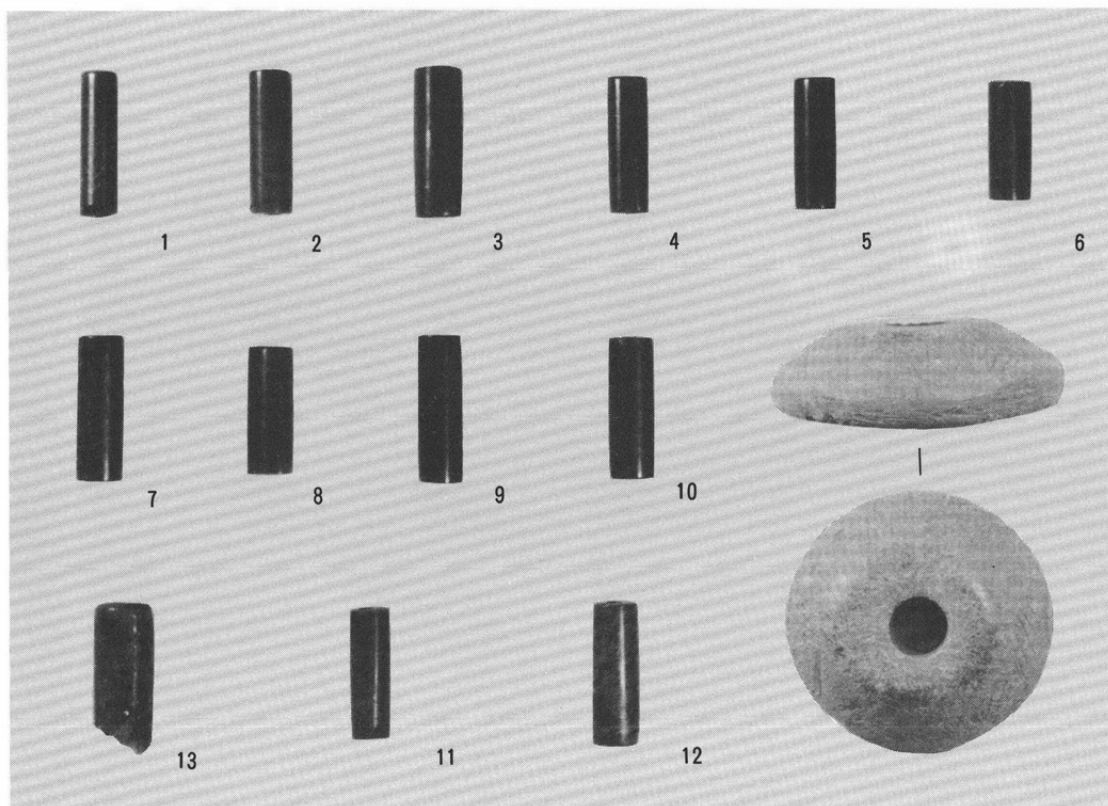
11

(1/3)



7

(1/4)



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

13

11

12

(1/1)

平城京右京四条四坊五坪

発掘調査報告



## 例 言

1. 本書は、奈良市平松町171番地において、宅地造成工事に伴って実施した事前発掘調査の報告である。

1. 発掘調査は、昭和55年6月23日から同年7月26日にかけて実施した。

1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財室が行ない、森下恵介、西崎卓哉、中井 公、篠原豊一の4名が現地を担当した。

なお、調査補助員として、奈良大学考古学研究会学生諸君の参加があった。

1. 発掘調査および本書の作成にあたって、伊達宗泰（花園大学）、毛利光俊彦（奈良国立文化財研究所）の両氏より御教示を得、また、計測座標の設定にあたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景調査室の御協力を受けた。記して感謝したい。

1. 本書の執筆ならびに編集は、調査担当者全員の討議をもとに、中井 公が行なった。

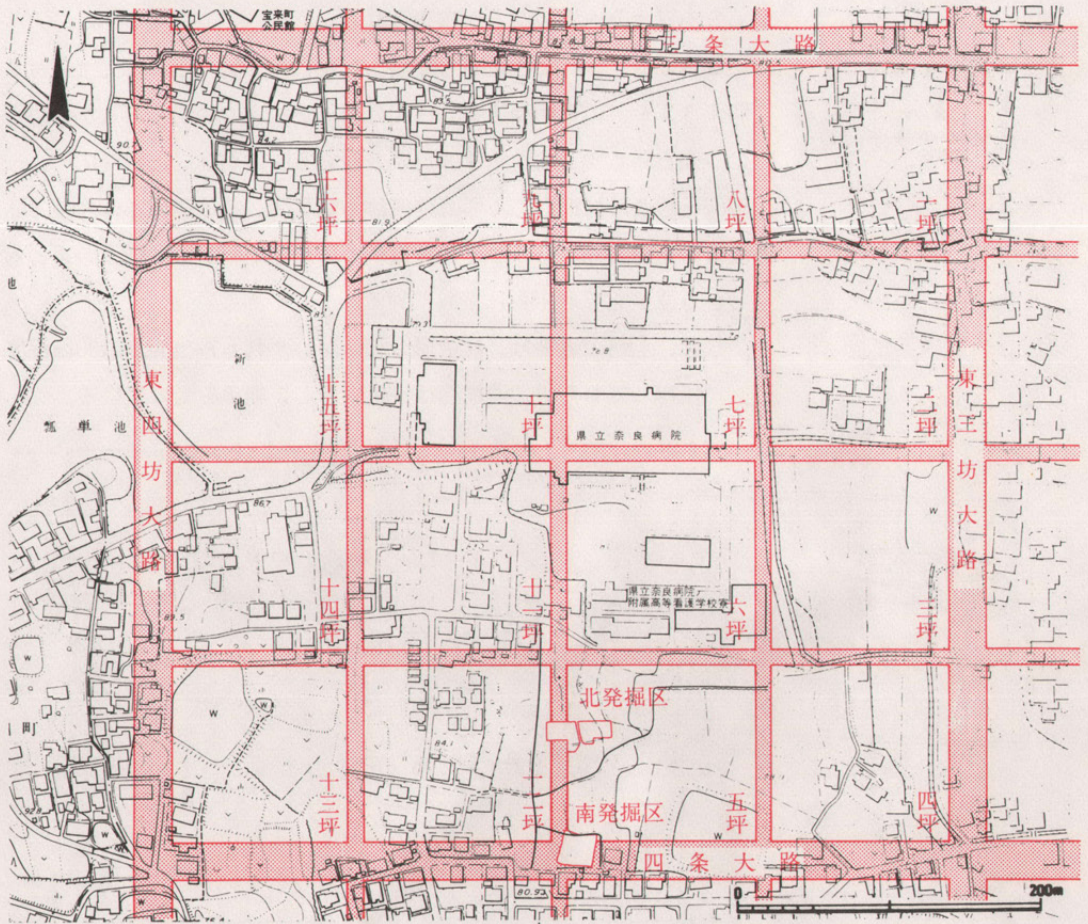
## 目 次

I はじめに .....	95
II 検出遺構 .....	96
III 出土遺物 .....	99
IV ま と め .....	100



# I はじめに

昭和54年12月、大富土地開発株式会社より、奈良市平松町171番地において宅地造成工事計画のある旨、市教育委員会文化財室へ届出があった。造成予定地は、平城京の条坊では右京四条四坊五坪に相当し、西側には平松廃寺（十二坪）との間を画す坊間路、南側には四条大路が推定された。このため奈良市教育委員会は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部及び県教育委員会文化財保存課と協議の上、発掘調査を担当することになった。調査にあたっては、条坊遺構の確認に主眼を置き、2箇所の発掘区を設定することとした。ひとつは、五・十二坪間の坊間路の検出を目的とした北発掘区（518㎡）で、いまひとつは、五・十二坪間の坊間路と四条大路との交差部分の検出を目的とした南発掘区（345㎡）である。調査は、昭和55年6月23日に着手し、その全日程を終了したのは同年7月26日であった。



第1図 発掘区の位置と周辺の条坊（1/5000）

## II 検出遺構

### 北発掘区（第2・3図）

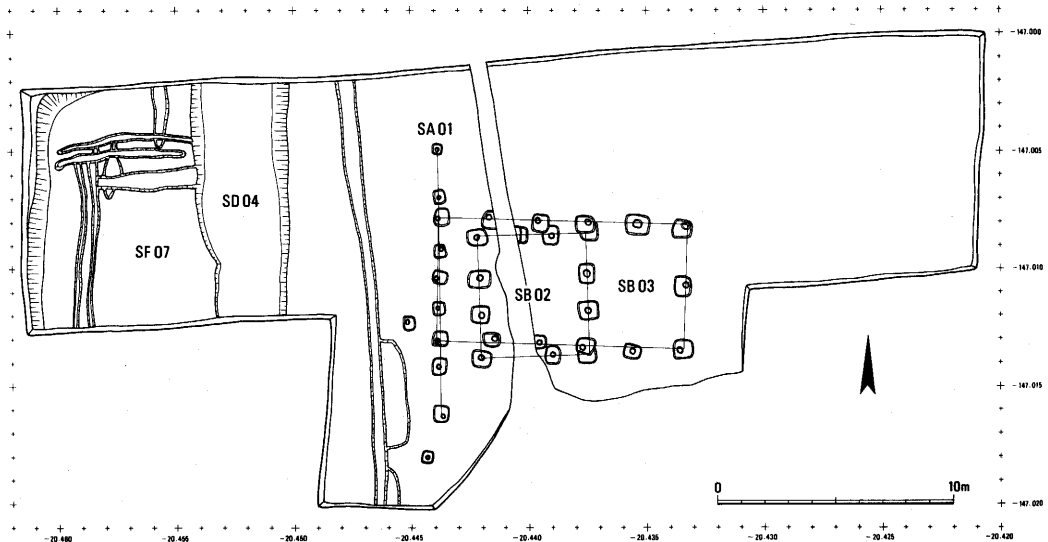
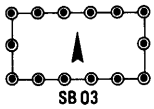
検出した主要な遺構は、塀1条、掘立柱建物2棟、右京四条四坊五・十二坪間坊間路・同東側溝である。

**SA01** 発掘区中央部やや西寄りで検出した南北方向の掘立柱列。全長5間（11.4m）で、柱間寸法は一定せず、北から7-7-8.5-8.5-7尺に復原できる。

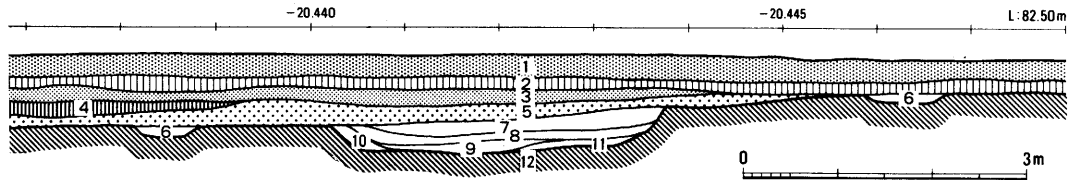
**SB02** 発掘区中央部で検出した桁行3間（5.1m）、梁行3間（4.5m）の南北棟建物。柱間は梁行が5尺の等間であるが、桁行は北から6-5-6尺に復原できる。柱掘形は一辺80cm前後のものが整然と並び、径30cmほどの柱痕跡が明瞭にわかる。柱穴の重複関係からSB03よりも古いことが確認される。

**SB03** SB02と重複して検出した桁行5間（10.5m）、梁行2間（5.1m）の東西棟建物。柱間は桁行が7尺の等間であるが、梁行は等間とならず、北から1間目が8尺、2間目が9尺とやや広い。一辺80cm程度の柱掘形をもち、柱痕跡も明瞭で、その径は25cm内外ある。柱穴の重複関係からSB02よりは新しいことがわかる。国土方眼に対し、方位が北で若干東に振れている。

なお、上述の遺構は、柱掘形の深さがいずれも検出面から30cm程度しか残存しておらず、遺構面は後世に著しい削平を受けている。



第2図 北発掘区・検出遺構平面図



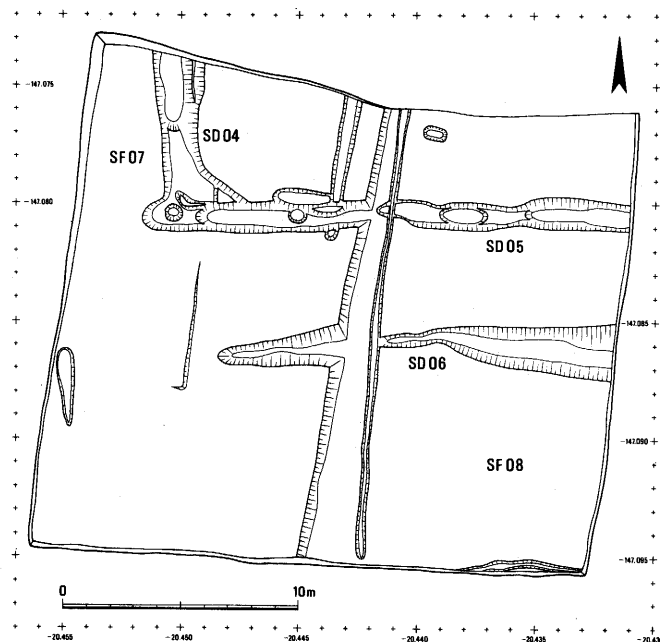
- |               |                     |                      |
|---------------|---------------------|----------------------|
| 1. 黒色腐蝕土(耕土)  | 5. 茶褐色砂質土           | 9. 黄褐色砂(SD04下層埋土)    |
| 2. 黄褐色砂質土(床土) | 6. 黄灰色砂質土           | 10. 黄褐色粘質土(SD04下層埋土) |
| 3. 灰褐色砂質土     | 7. 茶褐色砂質土(SD04上層埋土) | 11. 茶褐色粘質土(SD04下層埋土) |
| 4. 灰褐色砂質土     | 8. 茶褐色砂(SD04上層埋土)   | 12. 黄灰褐色粘土(地山)       |

第3図 北発掘区・北壁土層図

**SD04** 発掘区西寄りで検出した南北方向の素掘り溝。幅2.9～4.1m、深さ25～35cm。埋土は上・下2層に大別される。上層は上から茶褐色砂質土及び同色の砂が堆積し、ともに奈良時代の丸・平瓦片を含む。下層は東肩から茶褐色粘質土、西肩から黄褐色粘質土が流入し、これらの上に黄褐色砂が堆積するが、いずれも遺物はほとんど含まない。道路SF07の東側溝。

**SF07** 発掘区西端で検出した南北方向の通路。地山面を路面とし、東端は南北溝SD04によって限られる。西側溝を検出していないために、その路面幅は不明である。五・十二坪間を画する坊間路となる。なお、路面上には、後世の素掘り溝数条が縦横に掘込まれている。

検出した主要な遺構は、四条大路・同北側溝と、これらに交差する南発掘区(第4・6図)右京四条四坊五・十二坪間坊間路・同東側溝などである。



第4図 南発掘区・検出遺構平面図

**SD05** 発掘区北半部で検出した東西方向の素掘り溝。段差をもった耕作面の設定とその耕作のため、遺構面は著しい削平を受けてはいるが、幅1.3m、深さ40cmまでを確認し得た。原地形を反映してか、溝の底面は西方に向かって登りの勾配をもち、発掘区内での平均勾配は2.6度を測る。埋土は上・下2層に大別される。上層は茶褐色砂の堆積で、遺物はほとんど含んでいない。一方、下層は、北肩から茶褐色砂、南肩から黄褐色砂が流入しており、底に手づくねのミニチュア高杯2点を含んでいた。道路SF08の北側溝と考えられ、西端は北折して右京四条四坊

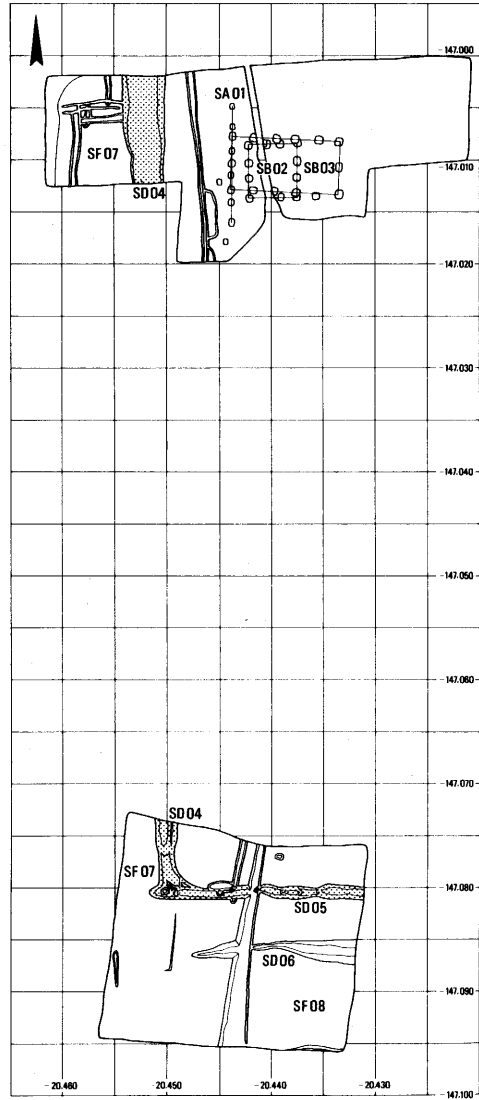


## II 検出遺構

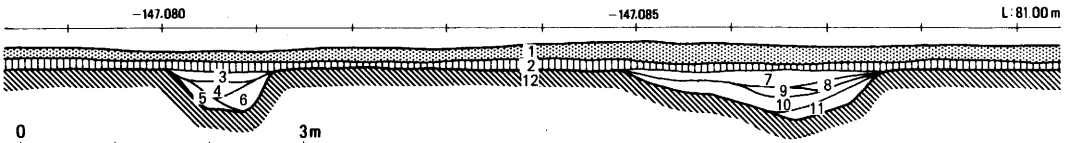
五・十二坪間の坊間路東側溝SD04につながる。

**SD06** 東西溝SD05の南方約6mで、これに平行して検出された東西方向の素掘り溝。SD05と同様に上面の削平が著しく、確認し得たのは幅2.5m、深さ35cmまでである。溝底面はやはり西に登りの勾配をもち、発掘区内での平均勾配は3.3度になる。埋土は上・下2層に大別される。上層には上から黄褐色土と茶褐色土とが堆積し、下層には茶褐色及び黄褐色の砂が堆積する。いずれも遺物を含んでいない。溝は、東西溝SD05と南北溝SD04との交差部南方で途切れてしまうが、遺構面の受けた削平を考慮に入れると、これで完結したものか否かについては明らかでない。

**SF08** 発掘区南半で検出した東西方向の通路。上面の削平が著しく、路面の状態を明確に知ることはできない。ただ、東西溝SD05・06にみられる底面の傾斜状態からみて、路面は西へ登り勾配をもった坂道となろう。北側溝SD05を検出したのみで、南側溝を検出していないために、その路面幅は不明である。四条大路に相当し、発掘区の西端では、右京四条四坊五・十二坪間の坊間路SF07と交差する。



第5図 南北両発掘区の位置関係



- |                   |                    |                    |
|-------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 黒色腐蝕土(耕土)      | 5. 黄褐色砂(SD05下層埋土)  | 9. 茶褐色土(SD06上層埋土)  |
| 2. 茶褐色砂質土(床土)     | 6. 茶褐色砂(SD05下層埋土)  | 10. 茶褐色砂(SD06下層埋土) |
| 3. 茶褐色砂(SD05上層埋土) | 7. 黄褐色土(SD06上層埋土)  | 11. 黄褐色砂(SD06下層埋土) |
| 4. 茶褐色砂(SD05上層埋土) | 8. 淡黄褐色土(SD06上層埋土) | 12. 灰色粘土(地山)       |

第6図 南発掘区・東壁土層図

### Ⅲ 出土遺物

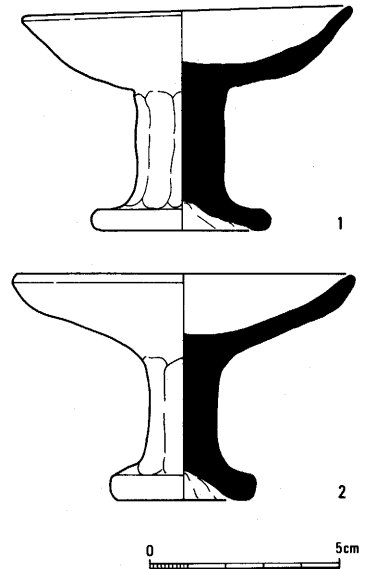
**瓦類 (第7図)** 瓦類は、北発掘区の包含層及び溝 SD04 から多量に出土した。大部分は丸瓦と平瓦であるが、軒丸瓦2点、軒平瓦2点を含んでいた。また、調査区内で、軒平瓦1点、鬼瓦1点が採集された。

1は、外区内縁に珠文、外縁に凸鋸齒文を巡らせた8弁複弁蓮華文軒丸瓦。平城宮6273AもしくはB型式と同範であるが、小片のためそのいずれであるかは決し難い。2は、左から右に流れる偏行唐草文軒平瓦。上下の外区には珠文帯を飾る。流れに反する方向の小支葉が特徴的で、類例は片岡王寺にある。<sup>注1)</sup> 3も、左から右に流れる偏行唐草文軒平瓦。上外区には珠文、下外区には線鋸齒文を飾る。平城宮6641-E型式と同範である。4は、いわゆる「東大寺式」に属する均整唐草文軒平瓦。対葉形の宝相華を中心飾りに3回反転する唐草を配し、外区には大粒な珠文を巡らす。平城宮6732-K型式と同範である。5は、「南都七大寺式」と呼ばれる鬼面文鬼瓦。南都七大寺式の鬼瓦は毛利光氏の分類ではI~Vの5型式に分類されるが、本例はⅢ式の左顎鬚に相当する小片である。<sup>注2)</sup> 薬師寺、唐招提寺、西大寺に同型式の出土がある。(1・2・4は包含層出土、3・5は採集品)<sup>注3)</sup> <sup>注4)</sup> <sup>注5)</sup>

**土器 (第8図)** 両発掘区を通じ、土器の出土はきわめて少ない。図示し得たのは、わずかに南発掘区四条大路北側溝SD05出土の手づくねのミニチュア高杯2点のみである。ともに土師質で、1は口径8.7cm、高さ6.0cm、2は口径9.0cm、高さ5.9cm。



第7図 軒瓦・鬼瓦



第8図 ミニチュア高杯

## IV ま と め

今回の調査区が、平城京の条坊区画の上では、右京四条四坊五坪に相当し、西側に五・十二坪間の坊間路、南側に四条大路が想定されたことは先にも述べた。ここで、今回検出した条坊関係の遺構が、平城京の条坊内で占める位置について検討を加え、まとめとしておこう。

南発掘区で検出した東西溝SD 05は、四条大路の北側溝に相当すると考えられるが、これの心は、平城宮朱雀門心から国土方眼位で南へ1086.050 mの位置にある。しかし、平城京の造営方位は、朱雀大路で国土方眼位に対して平均N15'41" Wの振れをもつので、<sup>注6)</sup>この修正を加えると両者心々間の南北距離は1077.533 mとなる。ところで、平城京における大路の路面幅については、従来の調査から、二条大路が側溝心々間127尺、<sup>注7)</sup>東一坊大路・<sup>注8)</sup>西一坊大路・<sup>注9)</sup>西三坊大路がそれぞれ同80尺、<sup>注10)</sup>東三坊大路が同50尺であることが知られている。ただ、<sup>注11)</sup>四条大路についてはその路面幅を確認するに至っておらず、ここでは側溝心々間80尺と推測しておく。すると、平城宮朱雀門心から四条大路北側溝心までの造営計画距離は、朱雀門心が二条大路心<sup>注11)</sup>の北80尺の位置にあるので、80尺+3600尺(2条幅) - 40尺(四条大路½幅) = 3640尺である。したがって、この場合に得られる造営単位尺は、 $1077.533 \text{ m} \div 3640 \text{ 尺} = 0.296 \text{ m}$ という数値になる。これは、従来の条坊関係遺構の調査で得られた造営単位尺の多くが0.295 ~ 0.296 mの範囲内に落ち着く傾向と合致し、造営単位尺として適当な数値であると判断できる。このことは、東西溝SD 05が四条大路北側溝として条坊計画上の位置にあったことを示す。

一方、北発掘区及び南発掘区で検出した南北溝SD 05は、右京四条四坊五坪と同十二坪とを画する坊間路の東側溝と考えられるが、これの心は、平城宮朱雀門心から国土方眼位で西へ1863.770 mの位置にある。これに先の朱雀大路の国土方眼位に対する振れの修正を加えると、両者心々間の東西距離は1868.707 mとなる。ところで、従来の調査から知られる平城京の条・坊間路の路面幅は、側溝心々間20尺の小路相当規模のものから、同80尺の大路相当規模のものまで多様である。ここでは、右京四条四坊五・十二坪間坊間路の幅員について、これを側溝心々間40尺と推測しておく。すると、平城宮朱雀門心から問題とする坊間路の東側溝心までの造営計画距離は、5400尺(3坊幅) + 900尺(2坪幅) - 20尺(坊間路½幅) = 6280尺である。したがって、この場合に得られる造営単

地 点	X	Y	備 考
四 条 大 路 北 側 溝 SD 05 心	-147,080.540	-20,450.080	) 両側溝交点心での値。 『平城宮発掘調査報告Ⅸ』による。
右京四条四坊五・十二坪間坊間路東側溝SD 04心	-147,080.540	-20,450.080	
平 城 宮 朱 雀 門 心	-145,994.490	-18,586.310	

第1表 計測座標値表



位尺は、 $1868.707\text{ m} \div 6280\text{ 尺} = 0.2976\text{ m}$ という数値になる。この $1\text{ 尺} = 0.2976\text{ m}$ という数値は、これまでに京内調査で得られた造営単位尺の多くと比較した場合、若干大きな数値ではないかと考えられる。ところが、遺存地割による坊間距離の計測結果によれば、平城京は、左京・右京のそれぞれ4坊分を比較した場合、右京が左京に比して長く、1坊分の平均距離は左京532.0、右京539.2<sup>注12)</sup>mとなり、中でも右京の三坊と四坊とがとりわけて広いことが指摘されている。こうした点を考慮すると、 $1\text{ 尺} = 0.2976\text{ m}$ が不適当な数値であるとの断定もいちがいにはできない。いずれにせよ、京内とりわけても右京城における調査例の少ない現在、今後の調査成果との比較にまたねばならない点が多い。

注1) 奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』1969

注2) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」奈良国立文化財研究所『研究論集VI』1980

注3) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1975』1976

奈良国立文化財研究所『昭和49年度平城宮跡発掘調査概報』1975

注4) 奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観12』（唐招提寺1）1969

注5) 奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観14』（西大寺）1973

田中重久「西大寺創立の研究」『考古学評論3』1941

注6) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

注7) 昭和55年度、奈良国立文化財研究所平城宮跡第122次（宮南面東門）の調査の結果による。

注8) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1966』1967

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1967』1968

注9) 奈良国立文化財研究所『昭和50年度平城宮跡発掘調査概報』1976

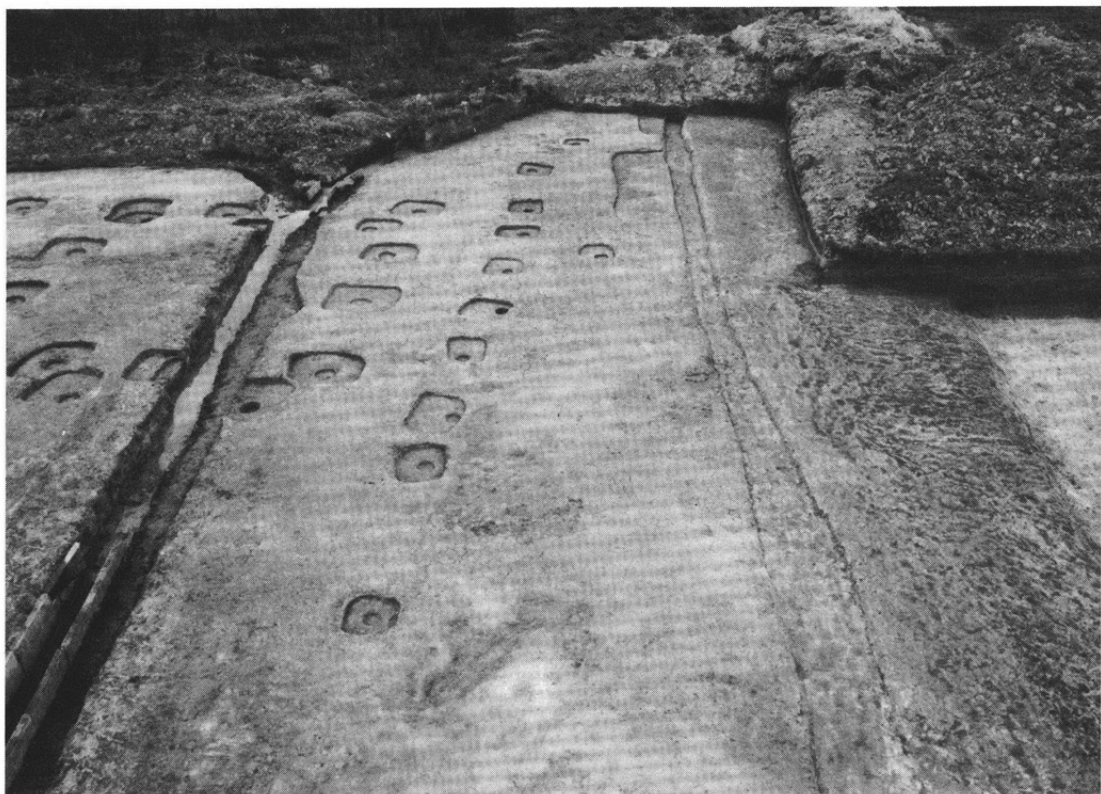
奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調査概報』1978

注10) 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977

注11) 奈良国立文化財研究所「平城京左京一条三坊の調査」『平城宮発掘調査報告VI』1974

注12) 岸 俊男「遺存地割・地名による平城京の復原調査」奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

# 圖 版

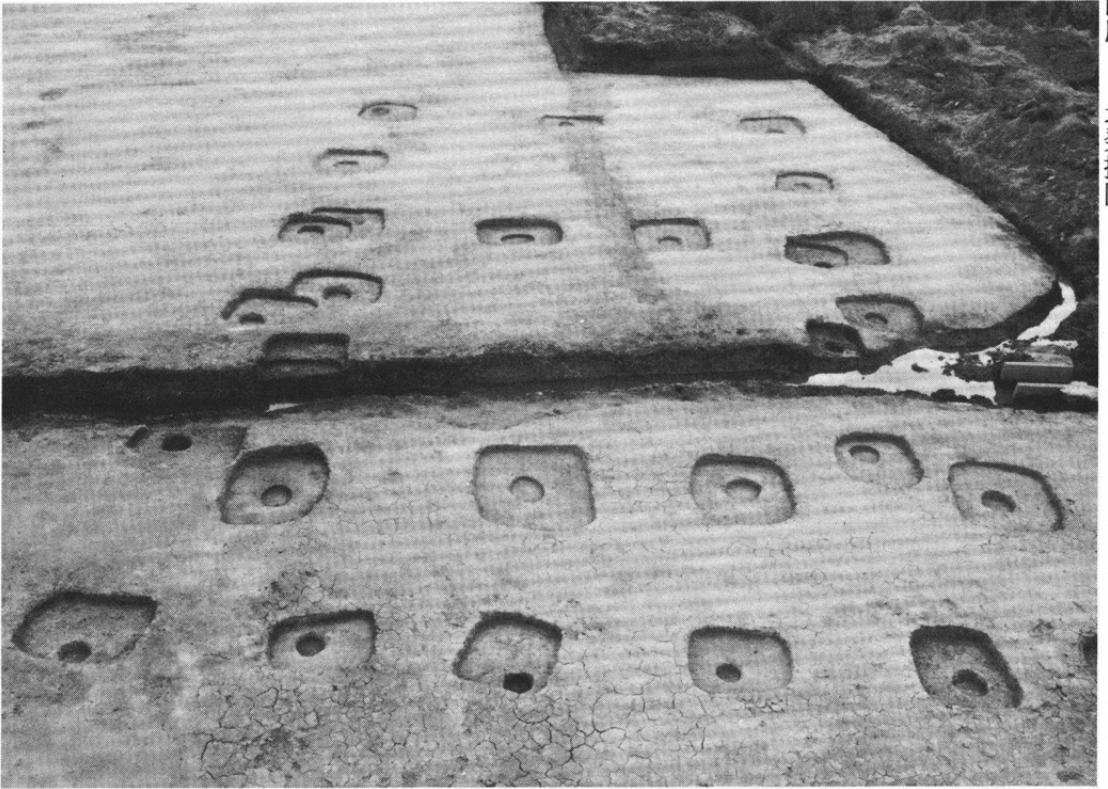


1. 塀SA01 (北から)

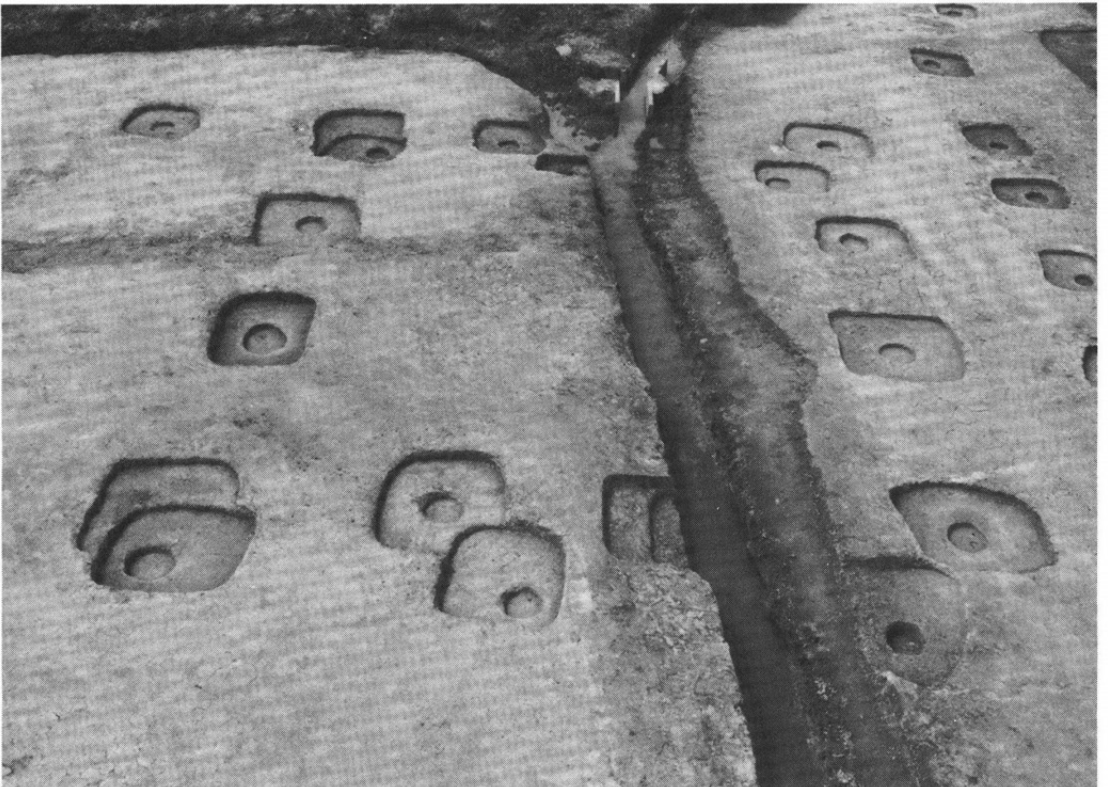


2. 建物SB02・SB03 (西から)





1. 建物SB02・SB03 (西から)



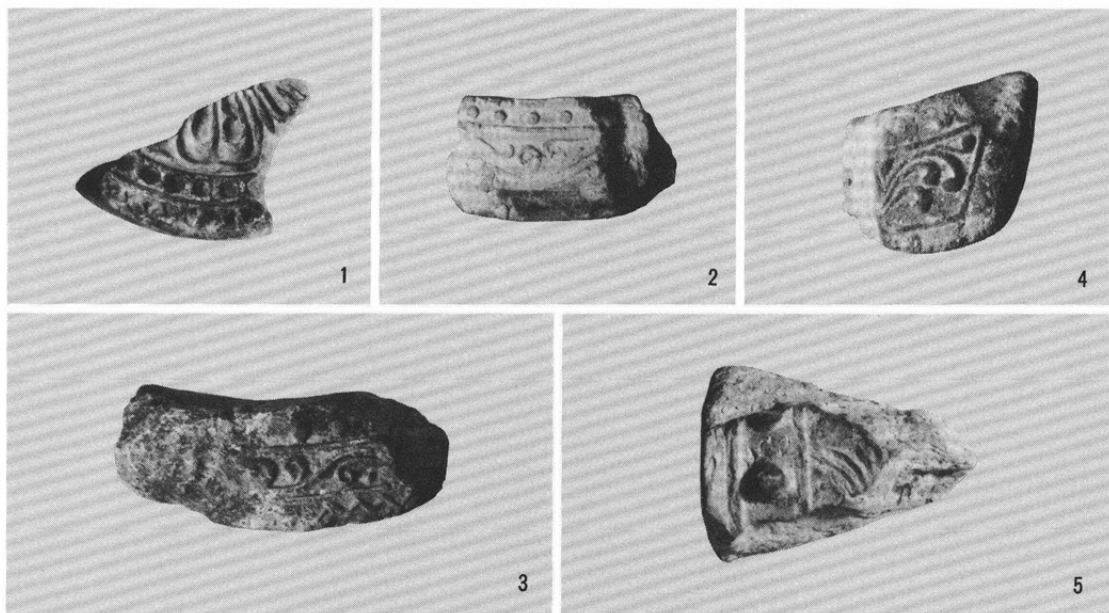
2. 建物SB02 (北から)



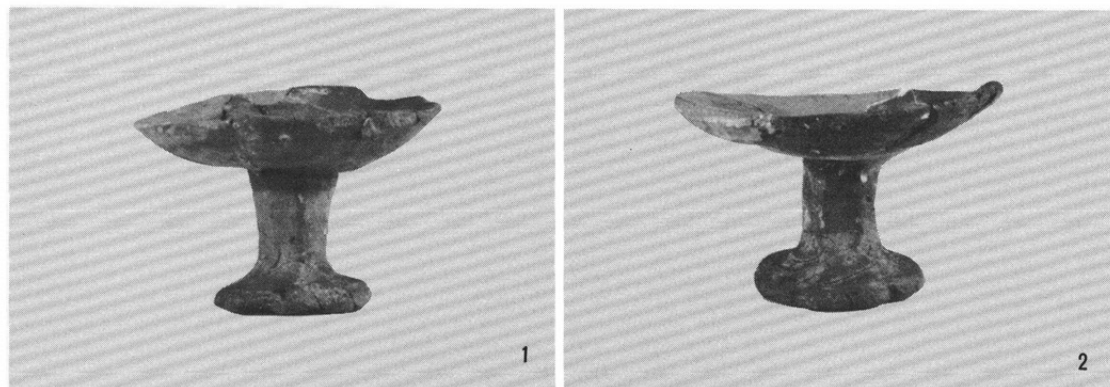
1. 溝SD05・SD06 (西から)



2. 溝SD05・SD06 (東から)



軒瓦・鬼瓦 (1/3)



ミニチュア高杯 (1/2)



# 平城京右京四条一坊十五坪

発掘調査報告

## 例 言

1. 本書は、奈良市四条大路5丁目139-1番地ほかにおいて実施した、奈良市立都跡小学校、校地造成工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は昭和55年9月16日から同年12月5日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財室が行ない、森下恵介、篠原豊一が現地を担当し、調査補助員として、横山伸司（立命館大学）、宍道年弘、奈良俊也、千代田秋充、鄭喜斗、飯野公子、上阪雅恵、岡本広子、霜島純一、田中靖、田原栄子、富山直人、服部芳人、長谷川一英、平井信吾（以上奈良大学）他、奈良大学学生諸氏の参加があった。
1. 現地調査において、国土座標の計測にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部計測修景室の手を煩すとともに、発掘調査および本書の作成にあたっては、平城宮跡発掘調査部の方々、花園大学 伊達宗泰教授（奈良市文化財保護審議会委員）の御教示、御協力を得た。記して感謝したい。
1. 本書の執筆、編集は森下恵介が行った。
1. 本書に使用した写真図版のうち、図版1についてはアジア航空測量株式会社が撮影したものである。

## 目 次

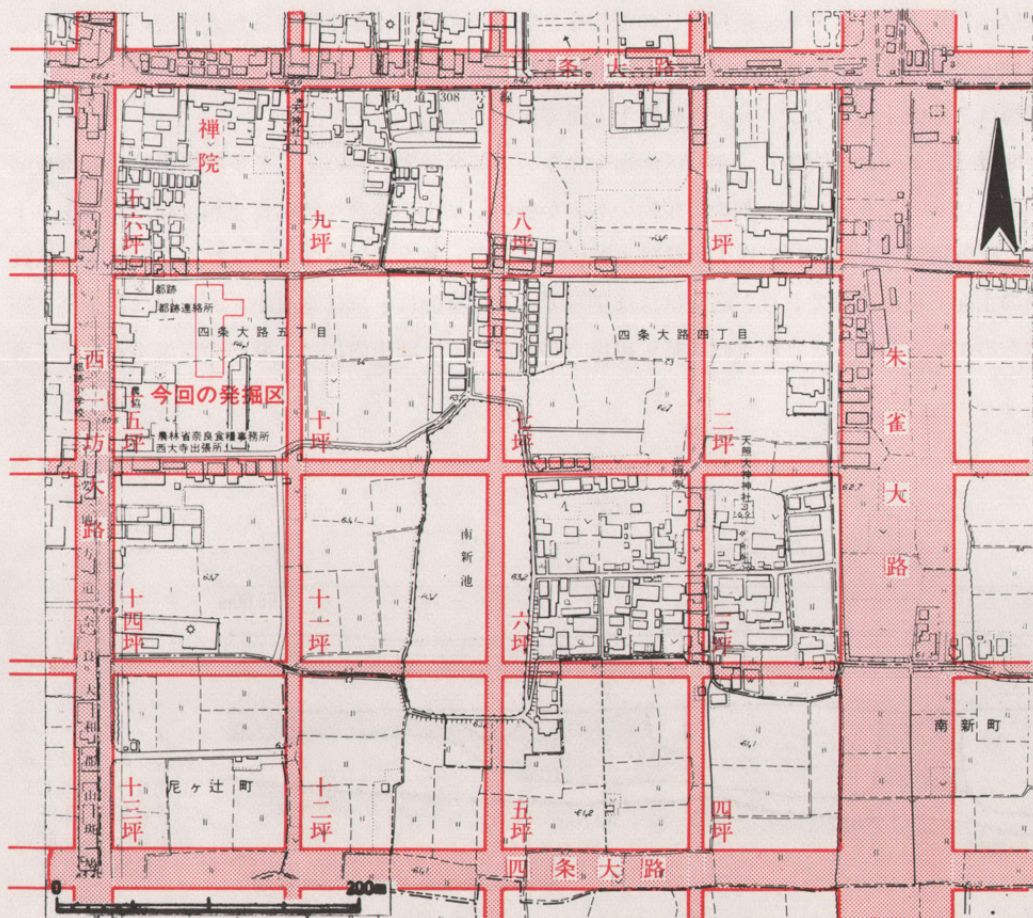
I はじめに .....	103
II 検出遺構 .....	104
III 出土遺物 .....	108
1. 瓦類 .....	108
2. 土器類 .....	109
3. 木製品 .....	111
IV ま と め .....	112



## I はじめに

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市立都跡小学校の校地造成工事に伴う事前調査として実施したものである。

調査地は、奈良市四条大路5丁目139-1番地他の水田で、平城京の条坊では右京四条一坊十五坪にあたる。調査地の周辺は、近年まで標高63~64mを測る水田地帯であったが、他の奈良市域同様、宅地化が進んできている。しかしながら、周辺の水田区画には条坊の地割痕跡をよく留めており、調査地の西側を南北にはしる県道「奈良・大和郡山線」は、西一坊大路を踏襲していることが知られている。また右京四条一坊では、調査地の北に隣接する十六坪に「禅院寺」の存在が推定されており、正倉院文書『天平神護二年越前国司解』によれば、「従七位上 上毛野公奥麻呂」の名が右京四条一坊の居住者の1人として知られる。<sup>注)</sup>



第1図 発掘区の位置と周辺の条坊 (1/5000)



## II 検出遺構

調査対象地は、その面積が3352㎡あるが、発掘調査では、十六坪推定地のほぼ中央に1200㎡の発掘区（東西20m、南北60m）を設定し、東に150㎡の発掘区（東西15m、南北10m）をこれに加えた。調査は昭和55年9月16日に開始し、同年12月5日に現地での日程を終了することができた。調査の結果、発掘区のほぼ全域に、中世に掘削されたと考えられる土坑群が広がっていることが確認され、奈良時代の遺構の大部分はこの土坑群によって破壊されていることが明らかになった。

注） 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』1966

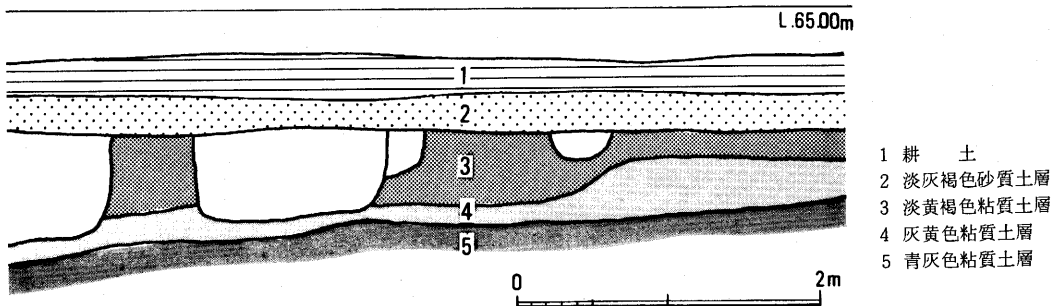
## II 検 出 遺 構

今回の調査で検出した遺構には、中世に掘削されたと考えられる土坑群、奈良時代に属する井戸2基、掘立柱列2条、溝4条、奈良時代以前の自然流路1条などがある。

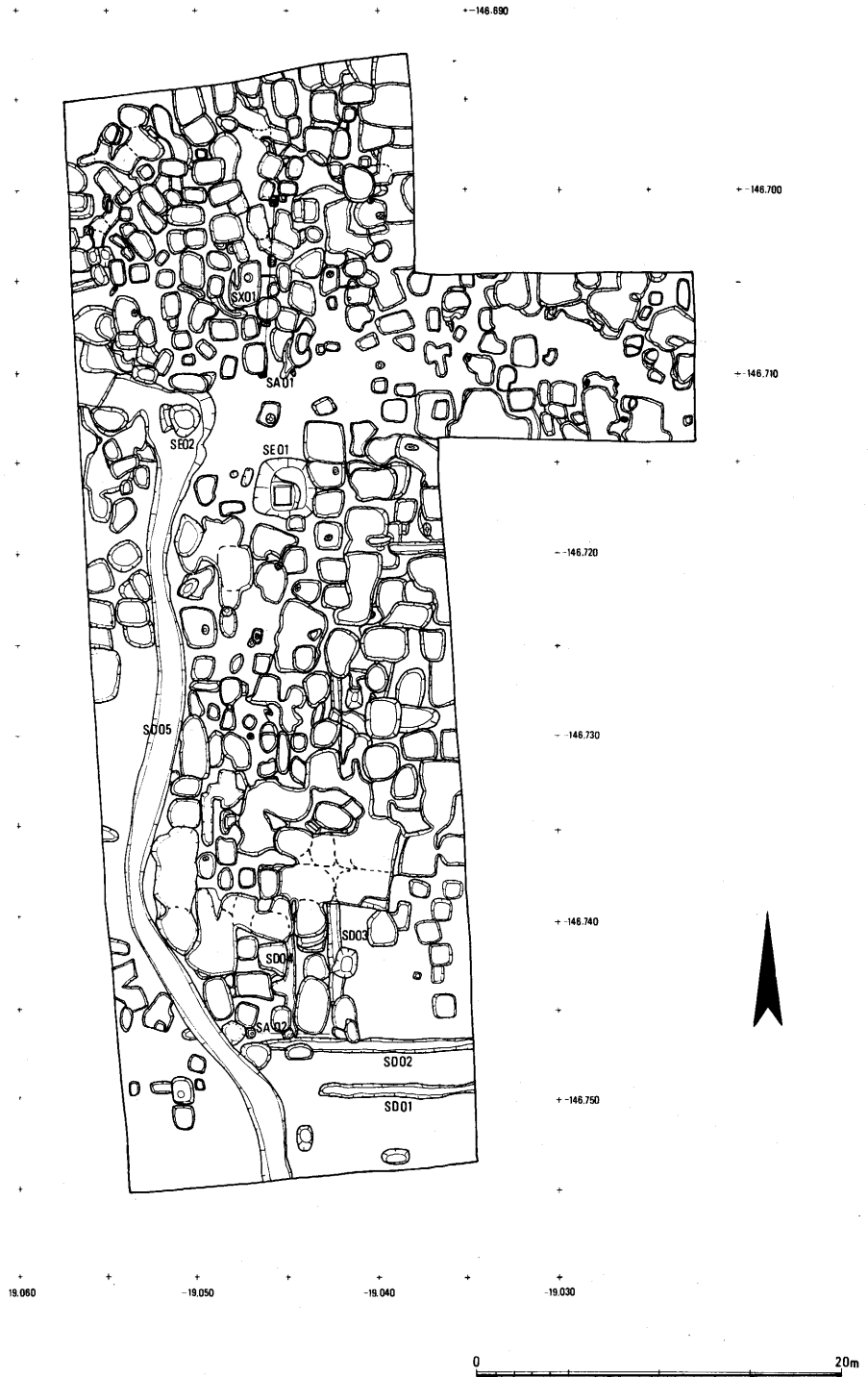
発掘区の基本的な土層の堆積は、耕土（20～30cm）の下、淡灰褐色砂質土（約20cm）が堆積し、発掘区南寄りでは、この下に奈良時代の遺物を含む黄灰色砂質土が堆積するが大部分の地域では、直接地山である淡黄褐色粘質土層となる。（第2図）

遺構は、地山上面および、黄灰色砂質土上面で検出した。

**土坑群**（第3図、図版2） 発掘区南端を除き、ほぼ全域で方形の土坑を多数検出した。重複関係が著しいが、1.5m×2m前後の規模のものが多く、地山の淡黄褐色粘質土層は40～80cm掘り下げると灰黄色粘質土層を経て青灰色粘質土層に達するが、各土坑の掘削はいずれもこの青灰色粘質土層の上面で止められており、底面はほぼ平らで、土坑壁面は、ほぼ垂直か、あるいは若干外へ膨らむものが見られる。また埋土は、暗灰褐色土が大部分で、埋土内には、壁面の崩壊土と考えられ



第2図 発掘区堆積土層図(1/50)



第3図 検出遺構平面図(1/400)

## II 検出遺構

る淡黄褐色粘質土のブロックおよび、奈良時代の土器片を含む他、瓦器片を含むものが若干あるが、出土遺物は全体に少ない。このような点から、土壇掘削の目的は、掘削そのものいわば、淡黄褐色粘質土、灰黄色粘質土などの粘質土の採取にあったものと推定される。

**SX01** (第4図、図版3) 発掘区中央北寄りで検出した。方形土壇(1.1m×2.6m、深さ約40cm)の中にさらに円形の土壇(径約50cm、深さ25cm)を掘削し、その中に曲物容器4段を伏せた状態で埋置する。容器内には、遺物はまったく認められず、その性格については知る手がかりはない。埋土中から瓦器碗小片が出土した。

**SE01** (第5図、図版3) 発掘区ほぼ中央で検出した井戸である。方形掘形(一辺約3m、深さ約1.6m)の西南隅に井籠組の井戸枠(内径1辺92cm)をすえつける。井戸枠は最下段の1段が遺存しており、板厚は約4cmある。井戸上部は破壊されており、底部分についても掘形壁面が灰色砂層のため崩壊が著しい。遺物は少なく、枠内より奈良時代前半の土器が若干と篋形木製品1点が出土した。

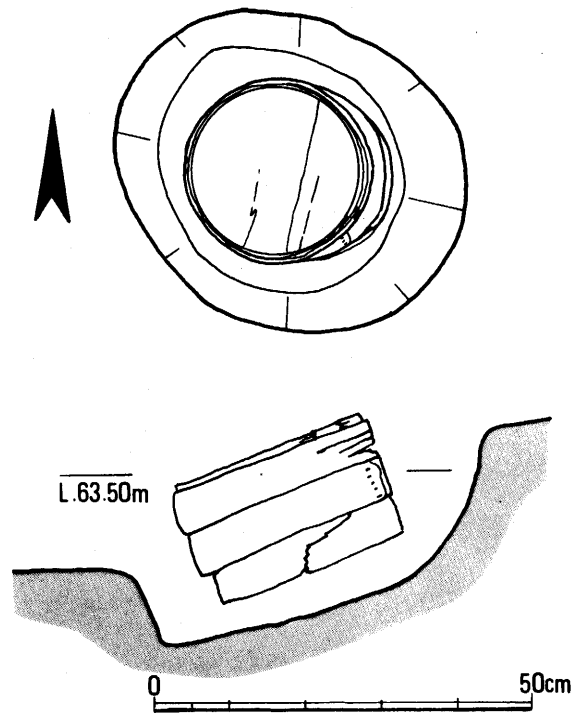
**SE02** SD05の北端で検出した井戸である。掘形(径1.4m、2.2m)内に井戸枠があったと考えられ、板材、角材片が多数出土した。出土遺物には須恵器破片が若干ある。

**SA01** 発掘区北寄り中央で検出した南北方向の掘立柱列である。長さ3間(9.6m)を検出した。方向は北で東に振れる。柱穴は40cm×50cm程度の大きさで、土壇群による破壊が著しい。

**SA02** SD02の北側に沿って検出した東西方向の掘立柱列である。長さ2間(4.8m)を検出した。重複関係からSD03よりも新しいことがうかがえる。

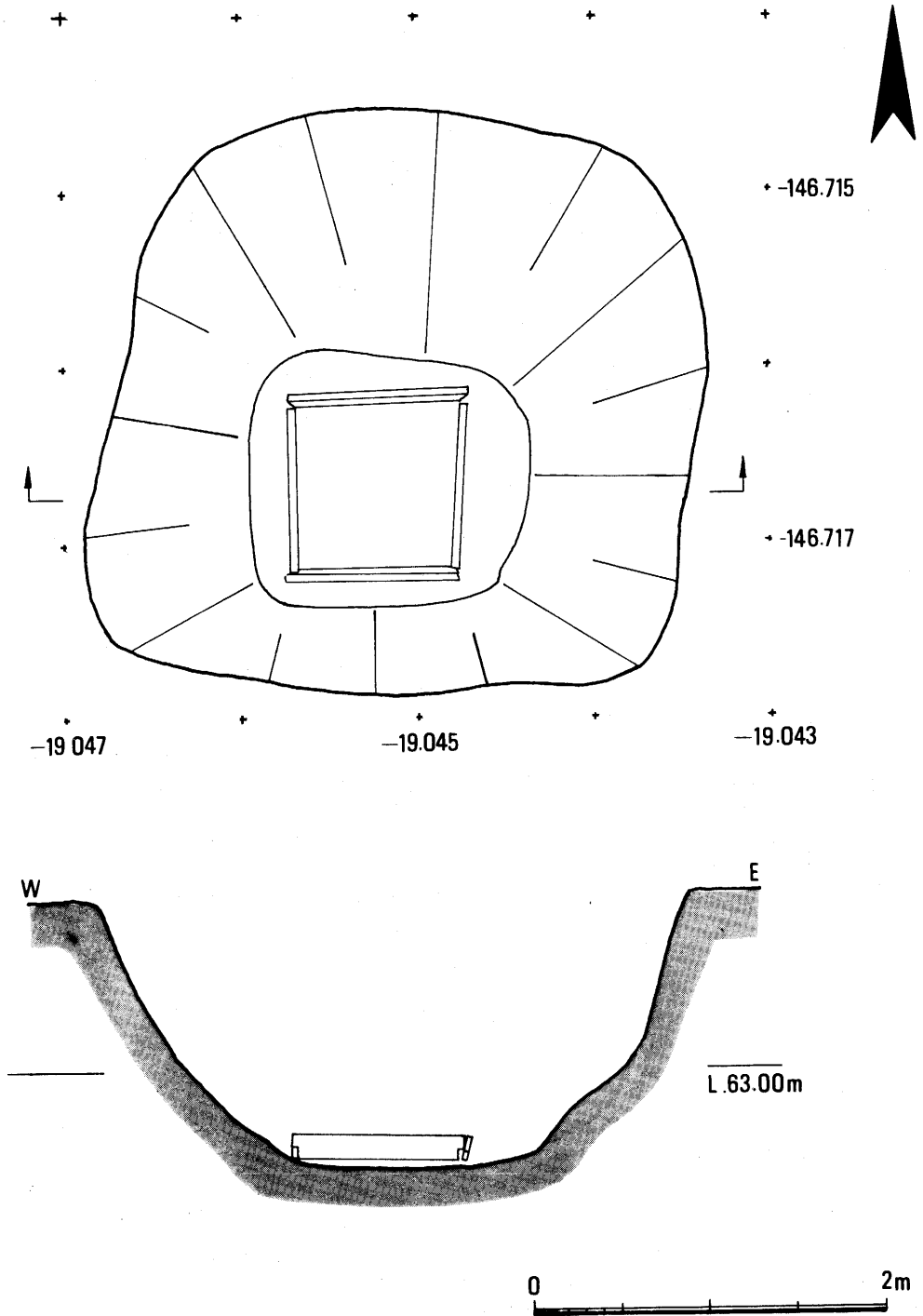
**SD01** 発掘区南寄りで検出した東西方向の溝(幅約80cm、深さ約10cm)である。長さ9m分検出した。東側は発掘区外へつづくが、西端は浅くなり終わっている。須恵器片、土師器片が出土した。

**SD02** SD01の北約2.4mの間隔をもって平行する東西方向の溝(幅約80cm、深さ約10cm)である。長さ12m分検出した。東側は発掘区外へつづくが、西端はSD05付近で浅くなり終わっている。南北方向の溝SD03、04とつながっていたとも考えられるが、破壊が著しく明らかではない。



第4図 SX01平面・断面図





第5图 SE 01 平面·断面图 (1/40)

### Ⅲ 出土遺物

須恵器片、土師器片が出土した。

SD03 発掘区中央で検出した南北溝（幅約80cm、深さ約20cm）である。長さ20m分検出したが、8m分は土塚群によって破壊されている。須恵器片が出土した。

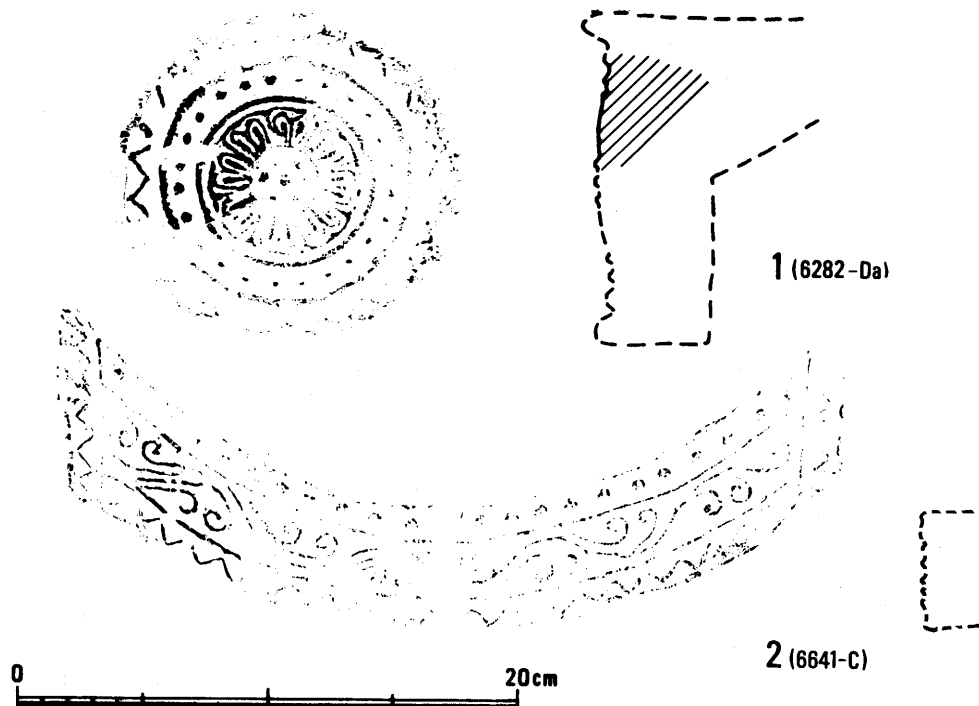
SD04 SD04の西約2.8mの間隔をもって平行する南北方向の溝（幅約50cm、深さ約20cm）であり、長さは5m分検出した。

SD05 発掘区西寄りを蛇行する南北方向の自然流路（幅約1.5m、深さ約60cm）である。北側は西へまがり発掘区外へつづき、南側も発掘区外へつづく。灰色砂が堆積し、流木2点が出土した。発掘区南寄りでは、この流路の上に奈良時代の遺物を含む黄灰色砂質土が堆積しているため、奈良時代以前の自然流路と考えられる。

## Ⅲ 出 土 遺 物

### 1. 瓦類（第6図、図版4）

瓦類は丸瓦、平瓦の他、軒丸瓦、軒平瓦の各1点が出土した。いずれも小片で土塚群埋土より出土したものである。



第6図 出土軒丸瓦・軒平瓦 (1/3)

1は面径が小さな八弁蓮華文軒丸瓦（平城宮6282-Da型式）で、線刻調の平面的な蓮弁、圏線状にめぐり複弁を区画する間弁、太い圏線などが特徴的である。

2は扁行唐草文軒平瓦（平城宮6641-C型式）で内区主文が左から右へ流れ、上外区に珠文を下外区と脇区に線鋸齒文をおくものであることが知られる。

## 2. 土器類

土器は、土坑群の埋土を中心に出土した。小片が多く、また遺構に伴う資料としてはSE01出土の土器が若干あるだけにすぎない。

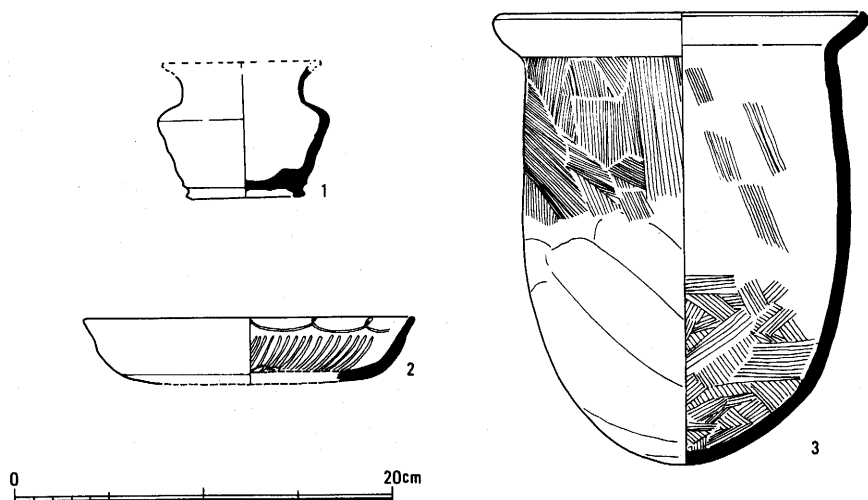
### SE01出土土器（第7図、図版4）

土師器には杯A、高杯A、甕C、竈、須恵器には広口の壺がある。小片が多く、全体が明らかなのは少ない。

杯A（2） 広く平らな底部と斜め上にひろく口縁部とからなる。口縁端部は、内側に若干肥厚させる。底部外面はへら削り、口縁部はよこなで仕上げられる。内面に螺旋暗文+1段放射暗文+連弧暗文が観察される。色調は灰褐色を呈する。<sup>注</sup>「平城宮Ⅱ」（靈龜2年～天平元年頃）の時期に属するものと思われる。

甕C（3） 長手丸底の器体に斜め上にひろく口縁部をつける。口縁部の内外はよこなでを行い、胴部外面は、上半部が縦方向のハケ目を密に施し、下半部は斜め方向に上から下へへら削りする。底部外面にはハケ目を施す。内面は上半部は細かなハケ目を縦方向に施し、下半部から底部にかけては荒いハケ目を密に施す。色調は黄白色を呈し、胎土中には荒い砂粒を多く含む。いわゆる近江系の甕とされるものである。

注）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1978



第7図 SE01出土土器（1/4）

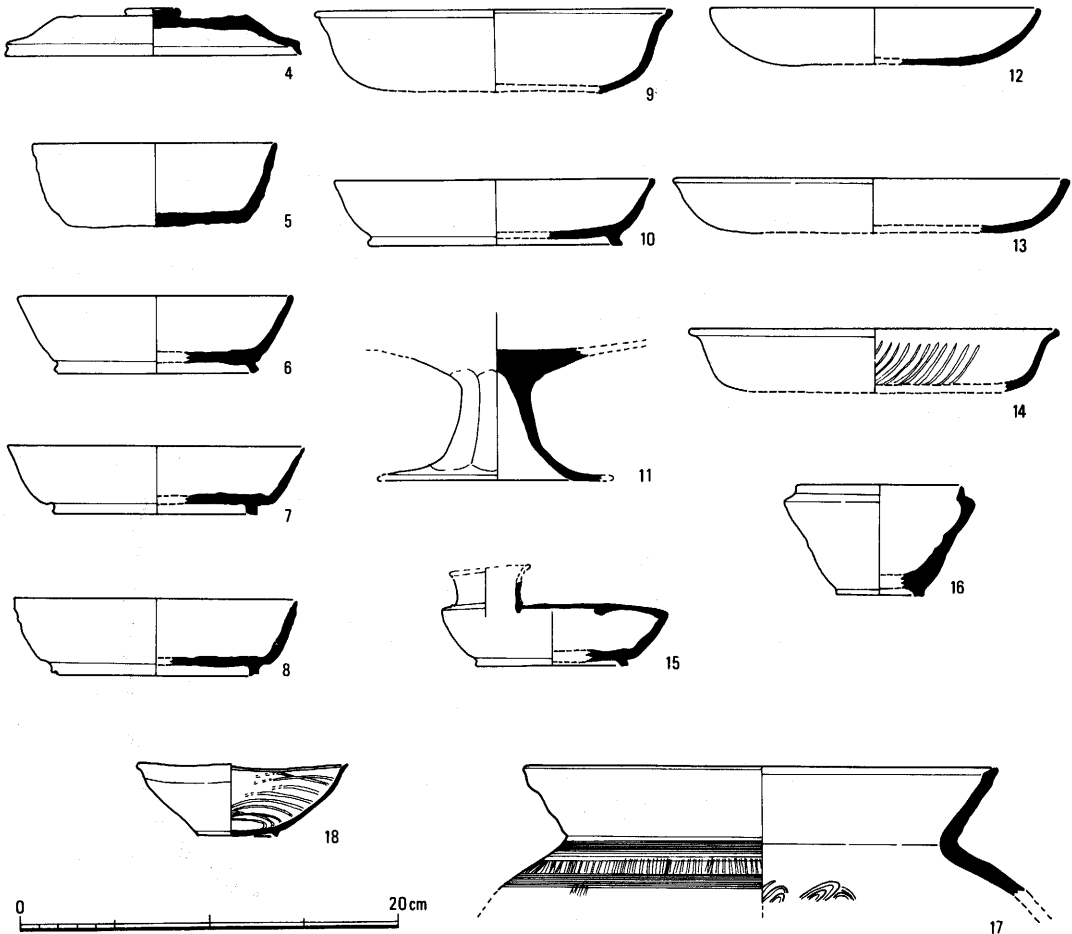


### Ⅲ 出土遺物

須恵器壺（1） 肩部が張った低い体部と外反する広口の口縁部をもつ。高台を備え、ロクロナデで仕上げる。色調は青灰色、硬質である。

#### 土塚群出土土器（第8図、図版4）

土塚群の埋土より出土した土器には、奈良時代の土師器では杯A、杯B、皿A、高杯、須恵器では杯A、杯B、杯B蓋、壺E、甕A、平瓶などがある。いずれも破片で、土塚の掘削によって掘り出され、再度埋土とともに埋められたものと考えられる。18は瓦器碗で、土塚のひとつから出土した。底部には断面三角形のきわめて不安定な高台がつけられるが、 $\frac{2}{3}$ 以上剥離してしまっている。口縁部内面には沈線1条をめぐらし、口縁端部はごく薄くおさめている。器壁は薄く、口縁部内外面及び底部内面にはなでを施すが、外肩下半には指おさえの凹凸が残る。内面には、簡単な渦巻状の暗文がみられる。色調は灰白色で部分的に黒灰色を呈している。時期は13世紀後半と考えられ、土塚群掘削の時期の一端がうかがえる。



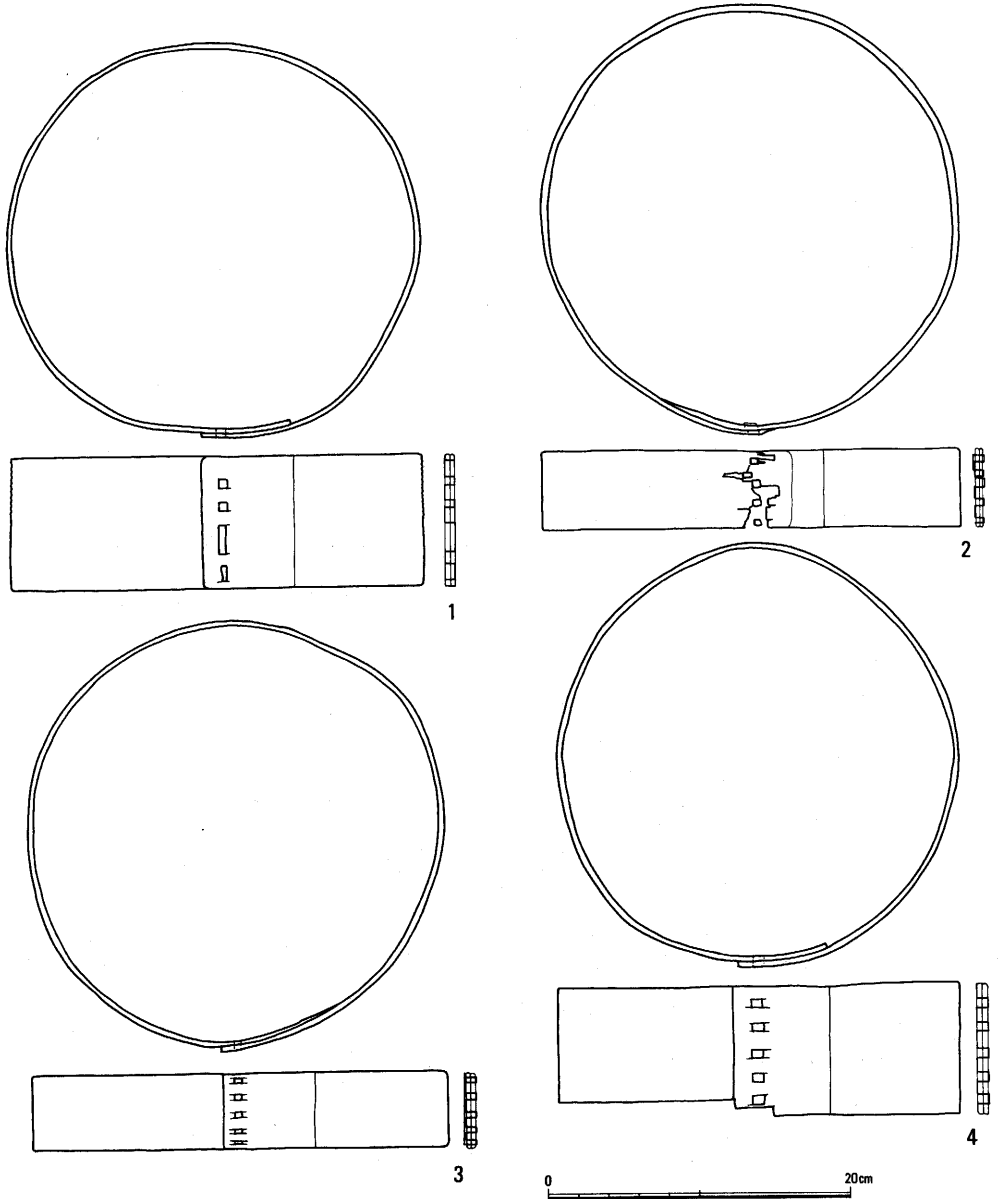
第8図 土塚群出土土器(1/4)

### 3. 木製品

SX 01出土の曲物容器とSE 01出土の筒形木製品がある。

曲物容器（第9・10図、図版5）

側板4点と底板1点出土した。側板の直径は27cm前後ではほぼ等しいが、高さが8.8cmを測るものと、5.2cmを測るものがそれぞれ2点ある。柂目板を用いており、表裏の削りは入念で加工痕は



第9図 SX 01出土曲物容器側板（1/5）

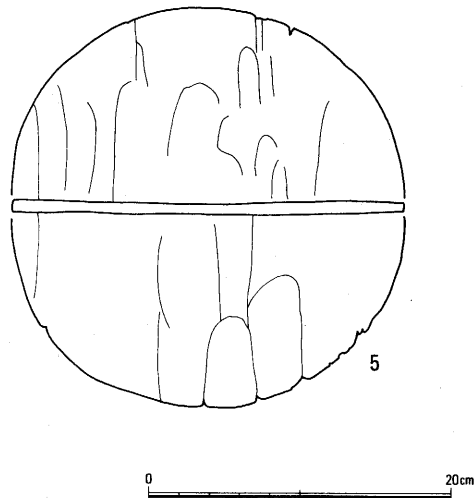
#### IV まとめ

ほとんどとどめない。厚さも均一で、内面の刻み目(けびき)はみられない。側板を縫合する樺皮縫いには種々の方法がみられる。底板(5)との固定方法は明らかではない。

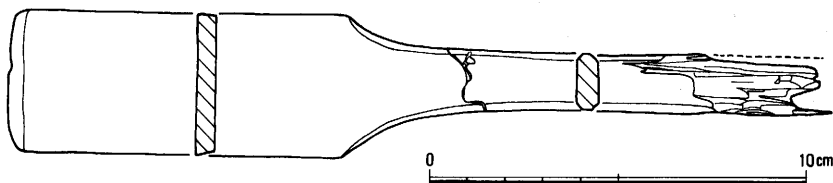
底板は、直径約26cmで厚さは約0.8cmを測る。柂目板を用いており、加工はていねいで、加工痕をほとんどとどめない。

#### 筧形木製品(第11図、図版5)

薄い細板から身と柄を削り出したもので、身先の縁は直線にし、片刃のノミ先状につくる。頸部はしだいに幅をせばめ柄に移行しており、頸部、柄には面取りする。柂目板を用いている。



第10図 SX 01 出土曲物容器底板(1/5)



第11図 SE 01 出土筧形木製品(1/2)

#### IV まとめ

今回の調査は、平城宮に比較的近い地域で行ったものではあるが、奈良時代の遺構は、中世に掘削された土塚群によってその大部分が破壊されており、遺存状況は良好なものではなかった。しかしながら井戸SE01や掘立柱列など、右京四条一坊十五坪の様相を知る手がかりを若干ではあるが得ることもできた。

一方、中世に掘削された土塚群は、その掘削の目的が粘土採取にあったであろうことを述べたが、薬師寺周辺、西市跡などでも同様の土取りを目的とした土塚が検出されている。<sup>注)</sup>中世において、西京火鉢座、西京土器座などが西京と呼ばれる調査地の周辺に存在しており、さらに瓦大工橋氏の近世における「西之京」における居住など、粘土採取を裏づける資料は多い。今後これらの生産工房の所在の追求とともに、原材料の採取といった生産過程の復原の中で、こうした土塚群を位置づけていく必要があるものと思われる。

注) 奈良国立文化財研究所 『昭和55年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1981

# 圖 版



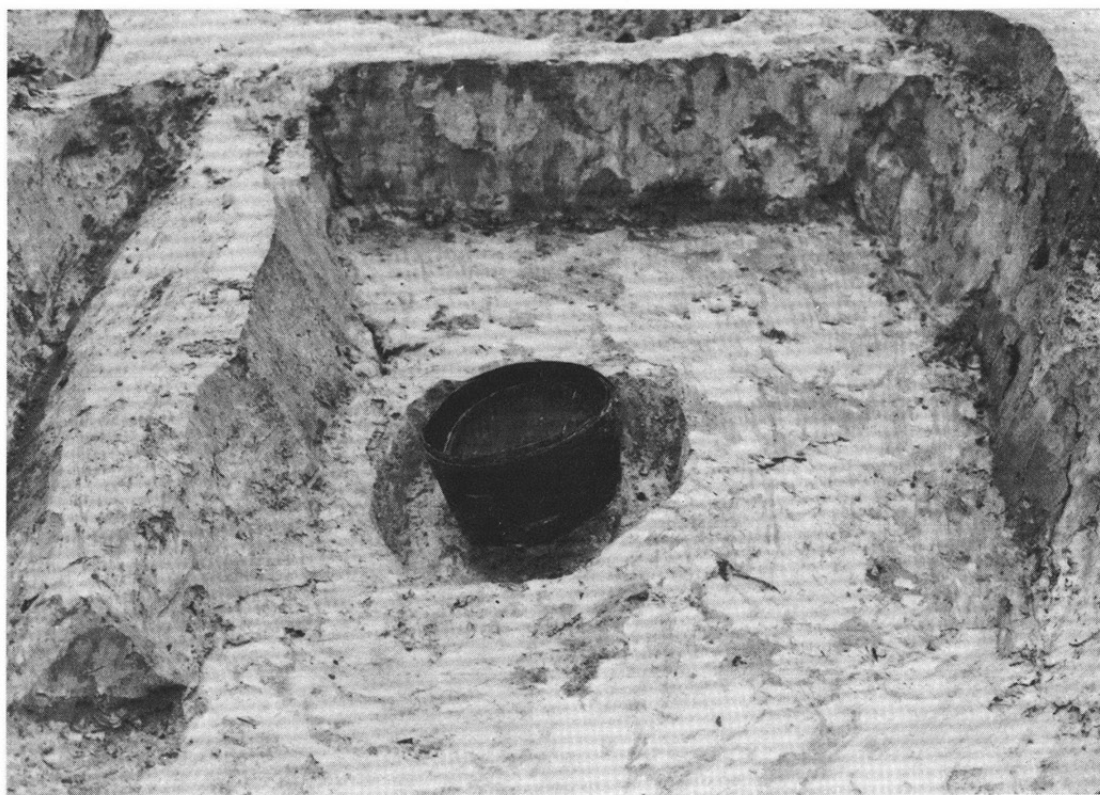




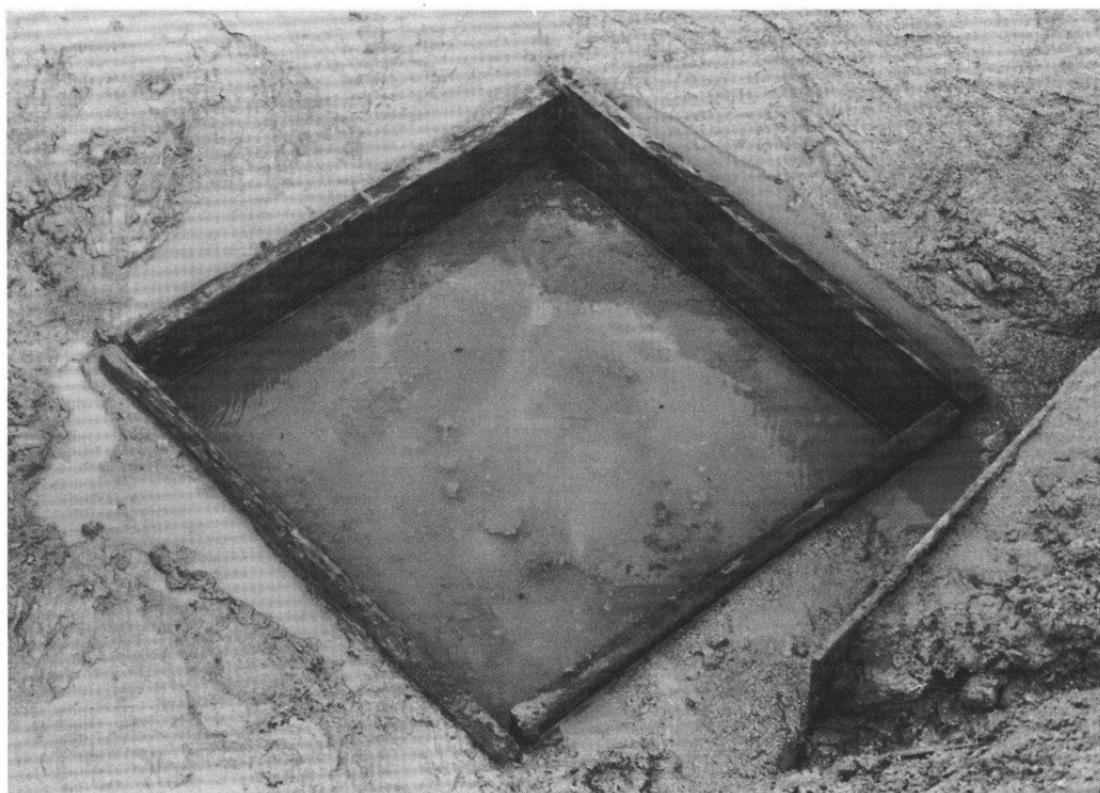
1. 土壇群 (北から)



2. 土壇群 (南から)

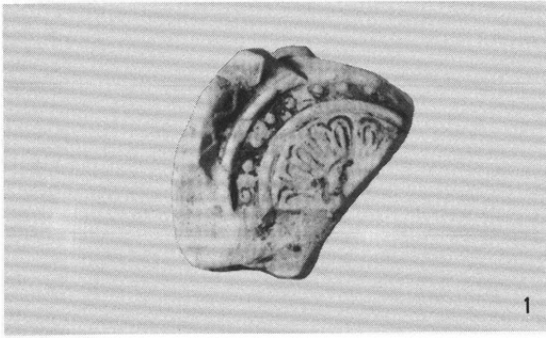


1. SX01 (南から)



2. SE01 (北西から)



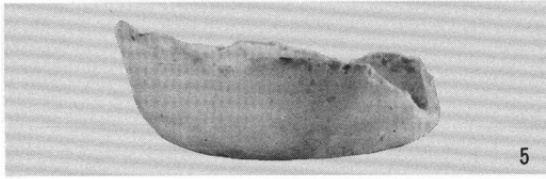


1



2

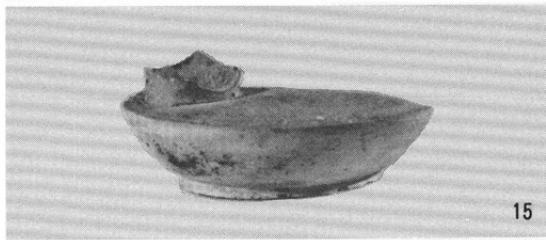
出土軒丸瓦・軒平瓦(1/3)



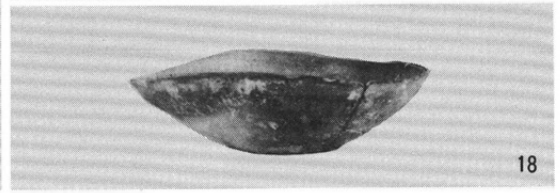
5



11

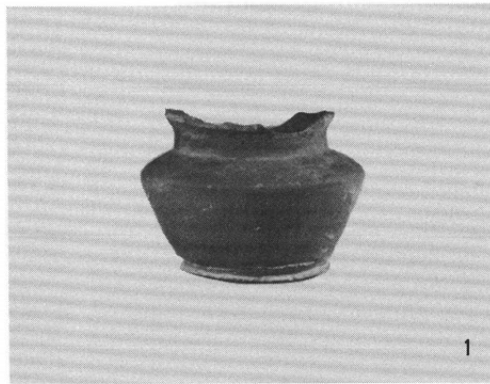


15



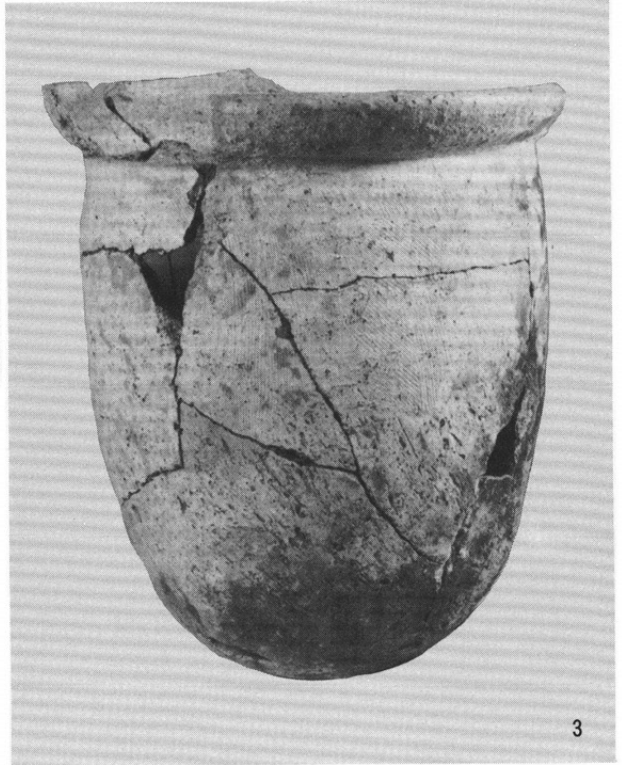
18

土塚群出土土器(1/3)



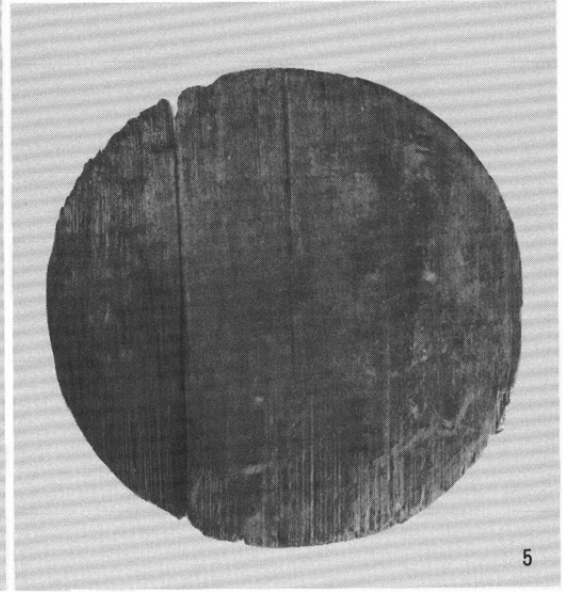
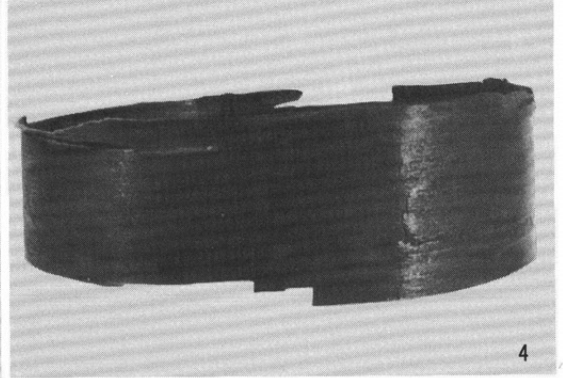
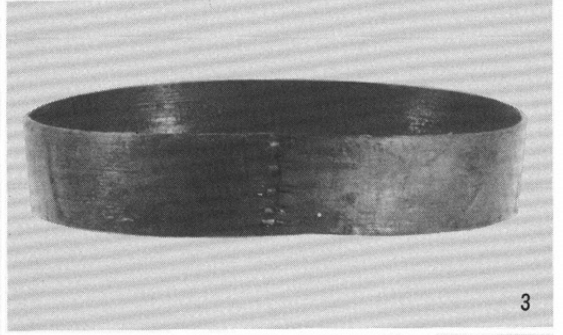
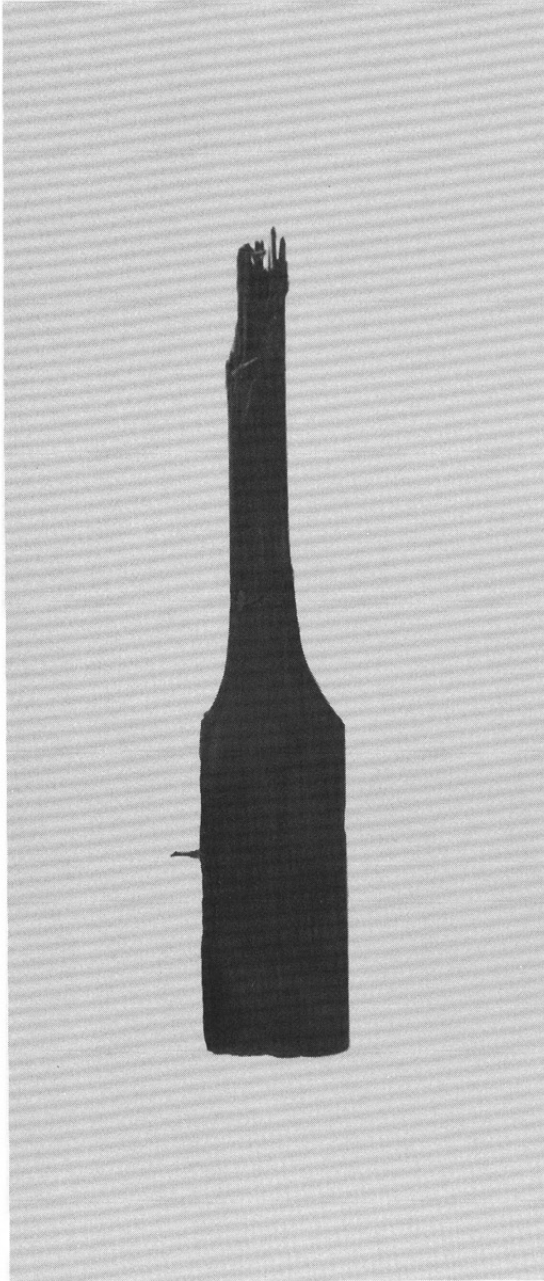
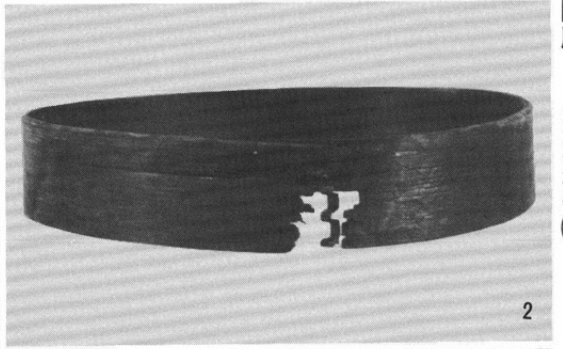
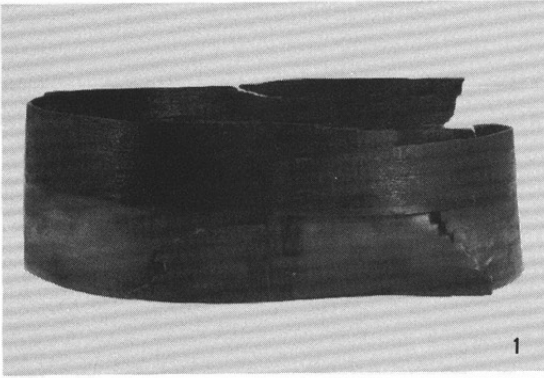
1

SE 01 出土土器(1/3)



3





SX 01 出土曲物容器(1/4)・SE 01 出土篋形木製品(1/2)

# 平城京右京三条四坊四坪

発掘調査報告



## 例 言

1. 本書は、奈良市宝来町765-5、767番地において実施した奈良市立伏見保育園運動場拡張工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 発掘調査は、昭和55年4月7日から同年4月15日にかけて実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財室が行ない、森下恵介、篠原豊一が現地を担当した。
1. 本書の執筆、編集は森下恵介が行った。

## 目 次

I はじめに .....	113
II 検出遺構 .....	114
III 出土遺物 .....	116
IV ま と め .....	118



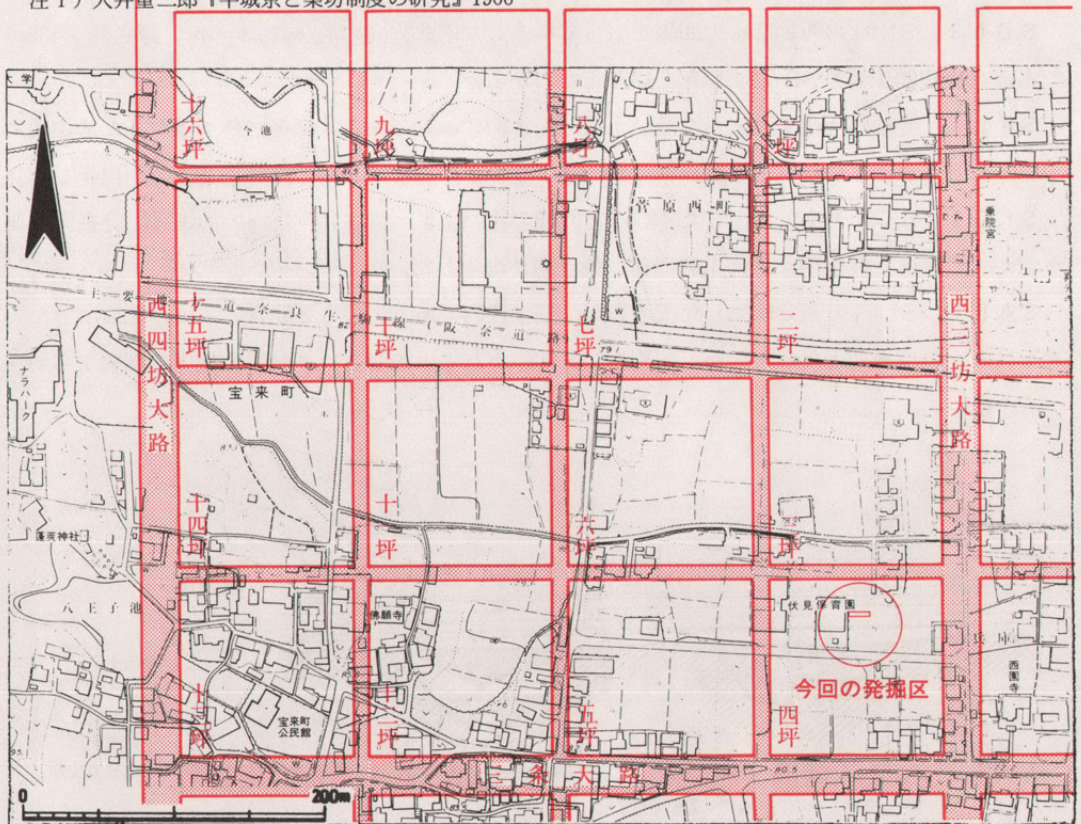
# I はじめに

今回の調査は、奈良市が計画した奈良市立伏見保育園運動場拡張工事に伴う事前調査として実施したものである。

調査地は、奈良市宝来町765-5、767番地の水田で、平城京の条坊では右京三条四坊四坪にあたり、標高約80mの西から東へのびる丘陵先端部に位置する。右京三条四坊の地は、正倉院文書『天平五年右京計帳』には「箭集宿禰石依」、『天平勝宝五年勘籍歴名』には「大宅岡田臣虫麻呂」がその居住者の一人であったことが知られる。<sup>注1)</sup>

調査の対象となった造成予定地は約500㎡あるが、約2mの段差をもつ水田2面に分れており、その上段の水田に発掘区（南北6m東西15m）を設定した。調査は昭和55年4月7日に開始し、同年4月15日に現地での日程を終了することができた。

注1) 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』1966



第1図 発掘区の位置と条坊(1/5000)



## II 検出遺構

発掘区は、水田耕土下約30cmで黄白色の粘土層が平坦にあってこれが地山面となる。遺構は、耕作に伴うものと思われる素掘り溝が7条、中世の溝3条、井戸1基、土壇2ヶ所、ピット群、掘立柱列1条である。遺構はすべて地山面で検出したが、遺構面はかなりの削平を受けている。

SE01 発掘区東寄りで検出した円形の素掘りの井戸（径約1.2m、深さ3.4m）である。底から約1mの間は少し脹らんでおり、滞水面を示しているものと思われる。瓦器碗、瓦器皿が出土した。出土土器から12世紀後半にその時期が求められる。

SD01 発掘区中央で検出した南北方向の溝（幅約60cm、深さ約10cm）である。重複関係よりSD02より古いことがわかる。瓦器碗、土師器皿が出土した。

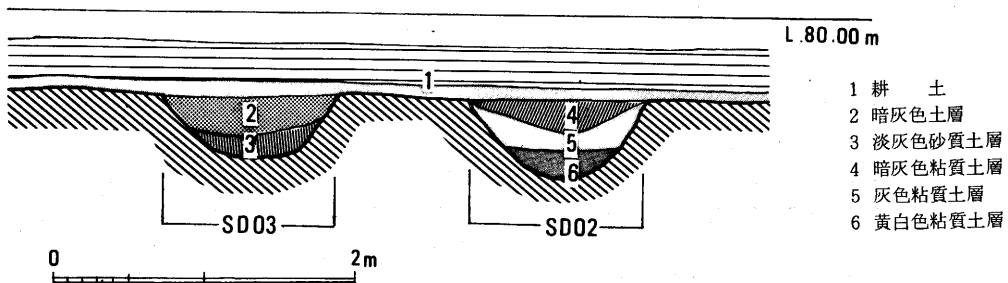
SD02 SD01、SD03との間を斜めに流れる溝（幅1.2m～80cm、深さ約40cm）である。溝内よりは中世の土師器皿、土師器羽釜、瓦器碗、などが出土した。出土土器から14世紀～15世紀にその時期が求められる。

SD03 SD01の西約2mの間隔をもって検出した南北方向の溝（幅約1.4m、深さ30～40cm）である。重複関係よりSD02より新しいことがわかる。

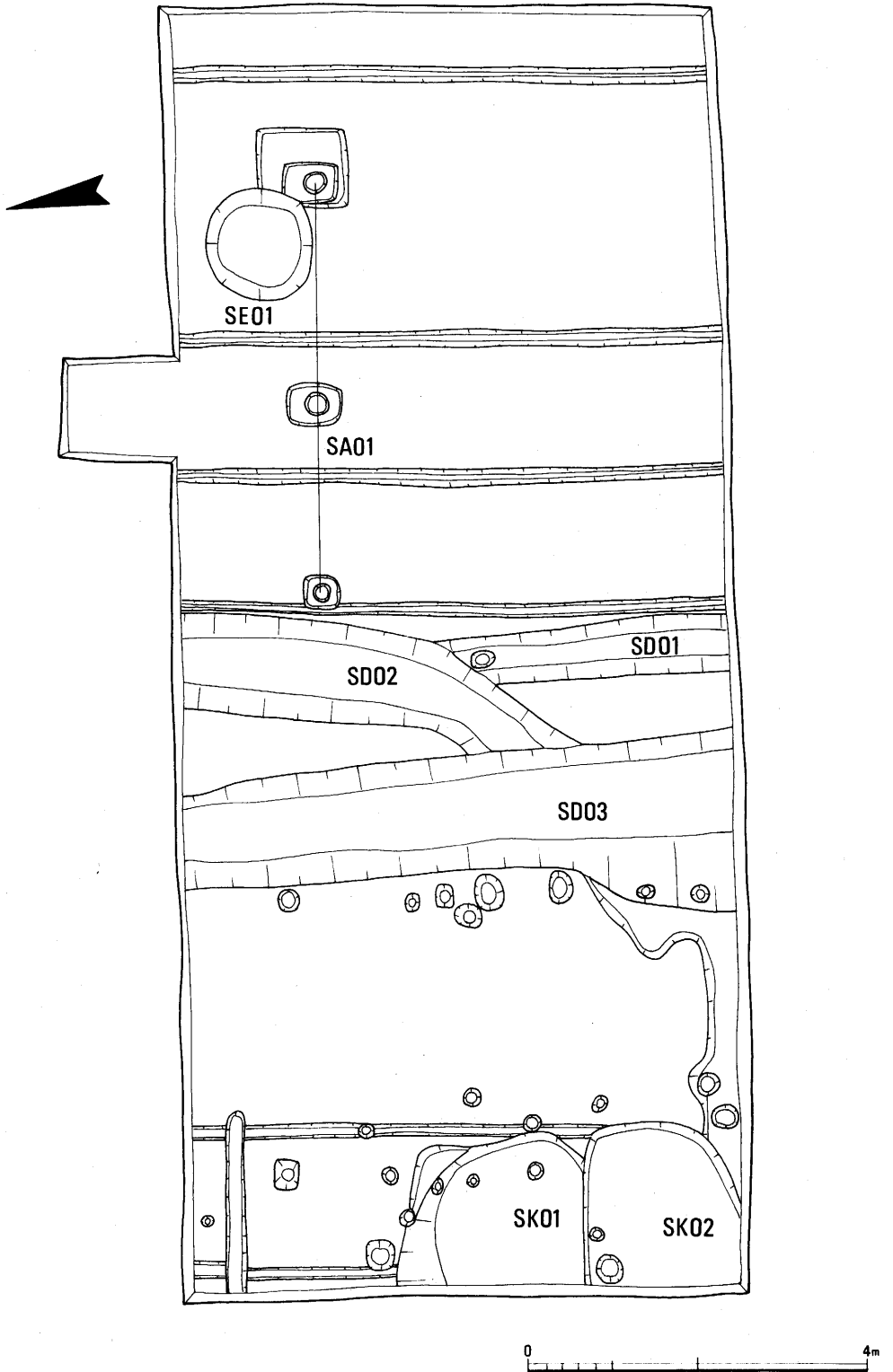
SK01 発掘区西端で検出した浅い土壇（深さ約10cm）である。発掘区外へ広がるため規模については明らかではない。重複関係よりSK02より新しいことがわかる。軒平瓦1点が出土した。

SK02 SK01の南で検出したSK01と同様の浅い土壇（深さ10～15cm）である。発掘区西側へ広がっている。埋土内よりは土師器皿、焼土塊が出土した。

SA01 SE01の南で検出した東西方向の掘立柱列である。長さ2間（4.8m）を検出した。発掘区東へのび柵列となるものか、北側へのび建物となるものか、いずれも発掘区の制約から明ら



第2図 発掘区堆積土層図（1/50）



第3図 検出遺構平面図 (1/80)

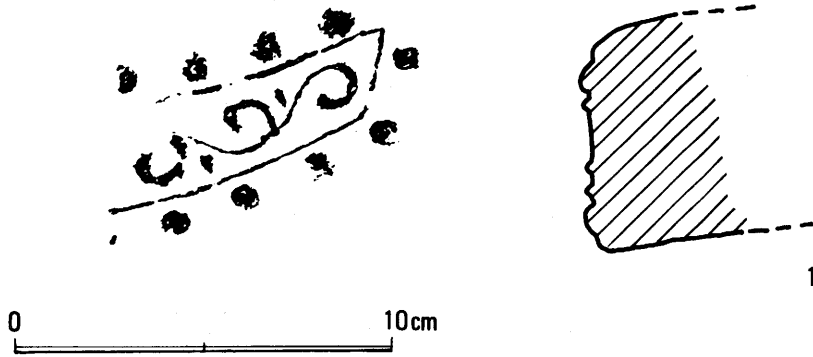
### Ⅲ 出土遺物

かではない。柱掘形内より須恵器杯片が出土しており、時期は奈良時代と考えられる。

**その他の遺構** その他の遺構としては、SD03の西に沿ったピット群、SK01、SK02付近で検出したピット群がある。いずれも小規模なもの（径10～40cm）でSD03に沿ったものは柵列などの可能性もあるが、その間隔は一定ではない。

## Ⅲ 出 土 遺 物

### 1. 瓦類（第4図、図版2）



第4図 出土軒平瓦(1/2)

SK01より出土した軒平瓦が1点ある。内区主文に均整唐草文様を飾り、上外区、下外区、脇区には、大ぶりの珠文をめぐる。外縁はもたない。色調は灰色を呈し、焼成は良好で堅緻である。胎土中には荒い砂粒をわずかに含む。

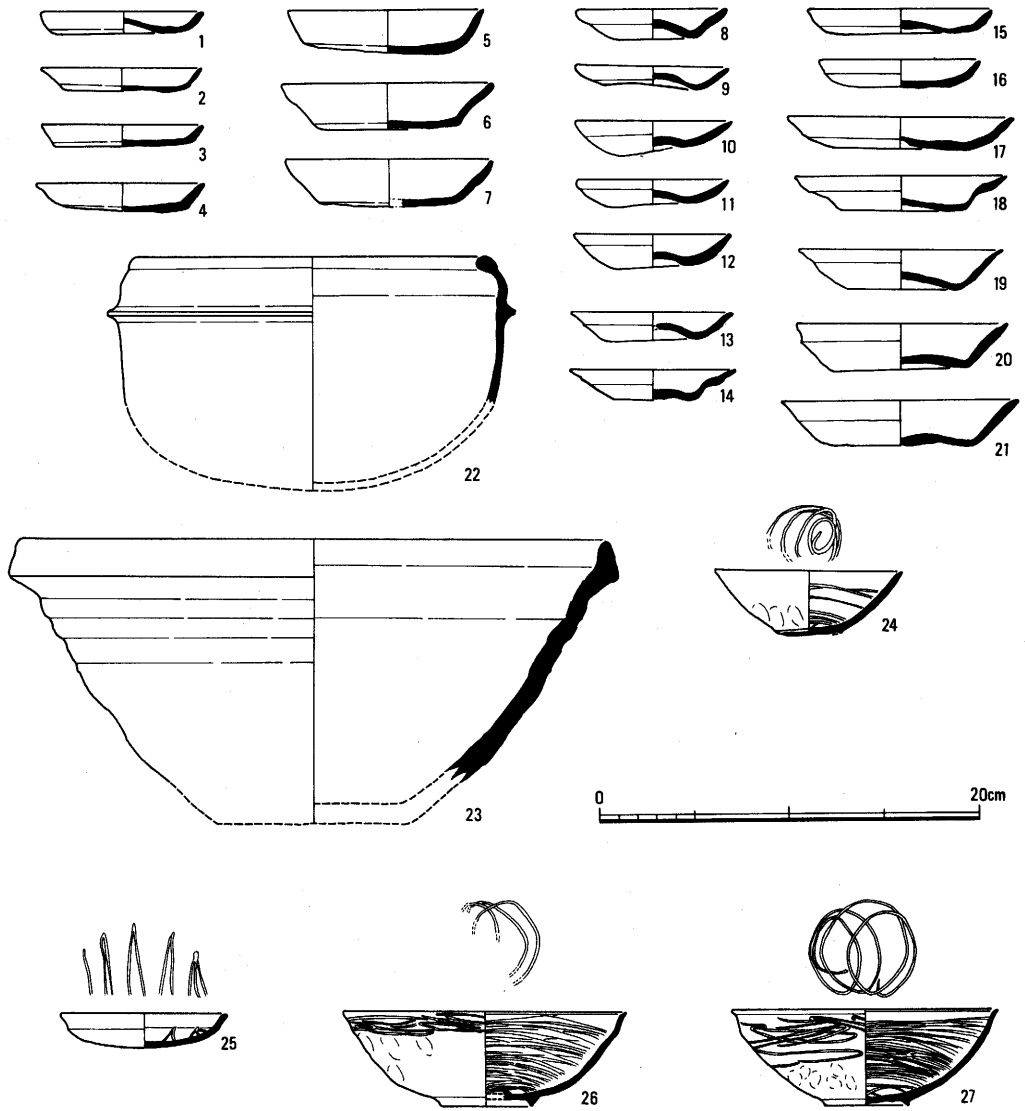
### 2. 土器類

土器は、溝SD01、SD02、SK02、SE01などから出土したが、SD02、SE01より出土したものに完形に近いものが多く、量的にもまとまっているので、これらを中心にのべる。

#### SD02出土土器（第5図1～24、図版2）

土師器皿、土師器羽釜、須恵器鉢、瓦器碗があり、時期的には14～15世紀のものと考えられる。

**土師器皿（1～21）** 色調が白みをおびた淡褐色～淡灰褐色を呈するもの（1～7）と赤褐色を呈するもの（8～21）がある。胎土も赤褐色のものには砂粒を多く含む。1～4は平らな広い底部と短い口縁部をもつもの（口径約8cm、器高1.0～1.4cm）で、赤褐色を呈するもの（16）もみられる。内面と口縁部のみよこなでを施す。5～7は口縁部が長く、深い形態のもの（口径10～11cm、



第5図 出土土器 (1/4)

器高約 2.2 cm) で、口縁部には強くよこなでを施すが、底部外面には成形時の凹凸を残すものである。8～15は底部が上げ底気味のもの(口径 8～9 cm、器高 1.0～1.4 cm) で内面および、口縁外面上半部よこなでを施す。17～21はやや深い形態のもの(口径 11～12 cm、器高 1.6～2.4 cm) で、5～6に近似するが、口縁外面のよこなでが上半部だけに施され底部外面および、口縁下半には成形時の凹凸が残されている。

土師器羽釜(22) 口縁部を外側へ折り返すもので、断面三角形の短い鑿部を貼付している。色調は淡黄白色を呈し、全面によこなでが施される。胎土中には細かな砂粒をわずかに含む。外面鑿



#### IV まとめ

部以下には付煤している。

須恵器鉢 (23) 直線的に外上方に開く体部をもち、口縁部は上下に拡張する。粘土紐巻き上げで成形しており、内外面にはヨコナデを施す。片口鉢と考えられるが、破片のため明らかではない。色調は淡青灰色を呈するが、口縁外面は灰黒色を呈する。胎土中に微量の細かな砂粒を含む。

瓦器碗 (24) 底部に突線状のきわめて不安定な高台がつけられるが、碗の底部が高台より低い位置にあって、その機能は全くはたさず、痕跡にすぎない。口縁端部内面に沈線一条をめぐらし、内面には簡単な渦巻状の暗文が施される。口縁部内外面、底部内面にはなでが施されるが、口縁下半部には成形時の指おさえによる凹凸が残る。内外面とも色調は灰黒色を呈し、胎土はきめこまかい。

#### SE01 出土土器 (第5図25~27、図版2)

瓦器碗、瓦器皿がある。

瓦器皿 (25) 口縁部、内面によこなでを施すが、底部外面はわずかになでを施すだけで、成形時の指おさえによる凹凸が残される。底部内面には粗い鋸歯状の暗文が施されている。色調は灰褐色を呈するが全面に炭素を吸着させているため表面は黒色である。

瓦器碗 (26、27) 内面および、口縁部外面上半部によこなでを施し、外面下半部には指おさえによる凹凸が残される。口縁部内面には暗文を密に施し、底部内面には螺旋状の暗文を施す。口縁部外面にも軽く、ジグザグ状の暗文を施している。色調は淡灰色を呈するが表面は炭素の吸着により黒色を呈している。時期は12世紀後半のものと考えられる。

## IV ま と め

今回の調査は、従来調査例の少ない平城京右京での調査であった。平城京右京について特に四坊の地域は丘陵地でもあり、条坊の存在さえも疑問視される部分が多い。今回の調査においても、奈良時代の遺構と思われるものは、わずかに掘立柱列1条のみ検出しただけにとどまり、これも発掘区の制約から、柵列か、建物になるものか確認するまでには至らなかったが、左京とくらべ、奈良時代遺構の存在が疎らであることは指摘でき、利用度が少なかったといった可能性も考えることができよう。また検出した中世の井戸、溝などからは、12世紀~15世紀に至る土器がそれぞれ出土しており、中世の集落が周辺に存在する手がかりを得ることもできた。今後とも、京の西端である周辺地では、西京極になる西四坊大路などの条坊の確認とともに、京内丘陵地の利用状況の解明のため、一層充分な調査が実施されねばならないものと思われる。

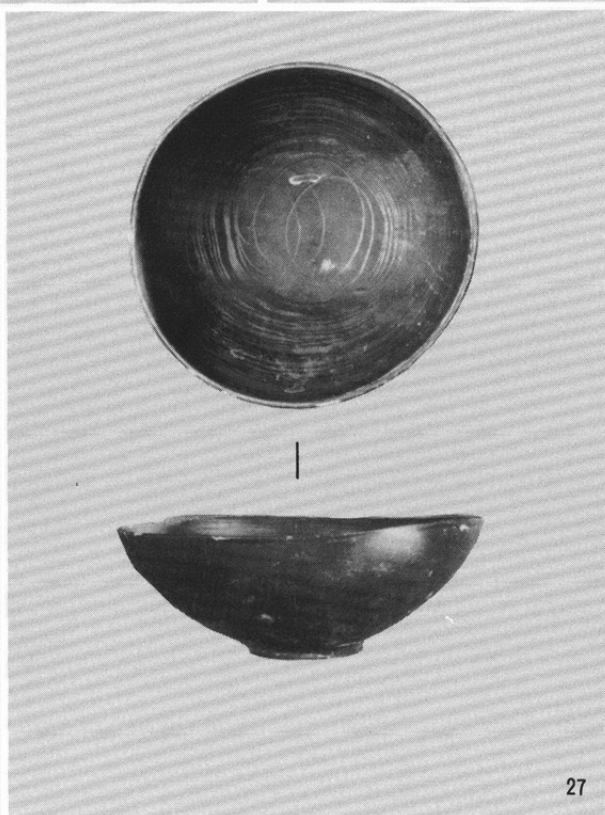
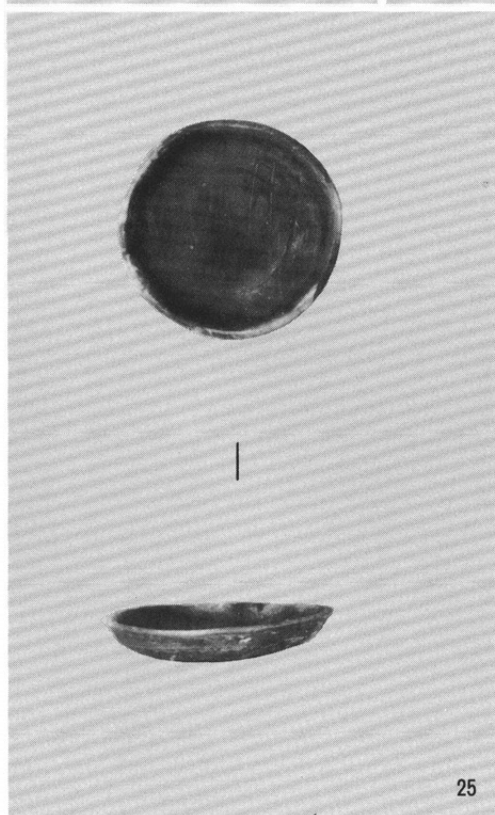
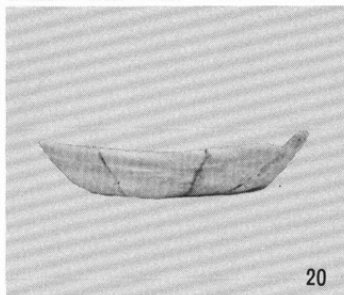
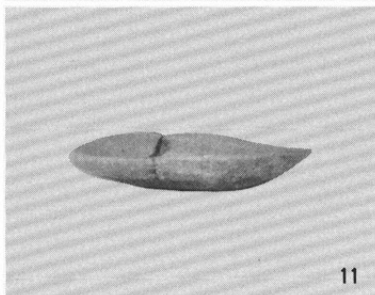
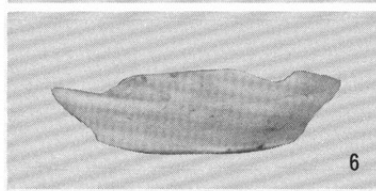
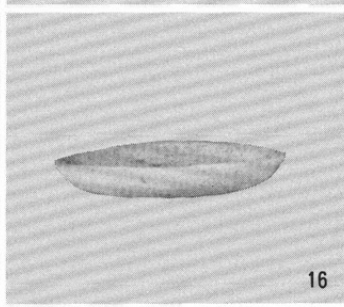
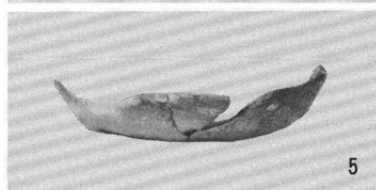
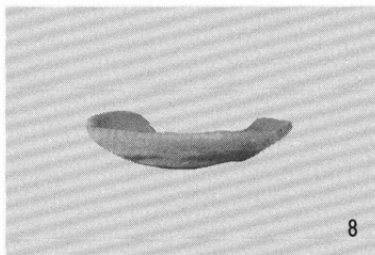
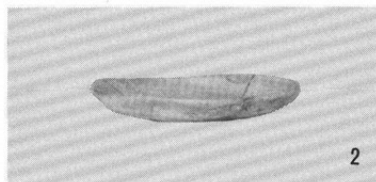
圖 版



1. 発掘区全景（北から）



2. 発掘区全景（西から）





# 平城京左京五条二坊十三坪

発掘調査報告

## 例 言

1. 本書は、奈良市大安寺町 345 番地において奈良市立大安寺西小学校プール建設に伴って実施した発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は昭和55年 4 月17日から同年 4 月22日まで実施した。
3. 発掘調査は奈良市教育委員会社会教育部文化財室が行い、西崎卓哉、篠原豊一が現地を担当した。
4. 本書の執筆ならびに編集は西崎卓哉が行った。

## 目 次

I はじめに .....	119
II 検出遺構 .....	120

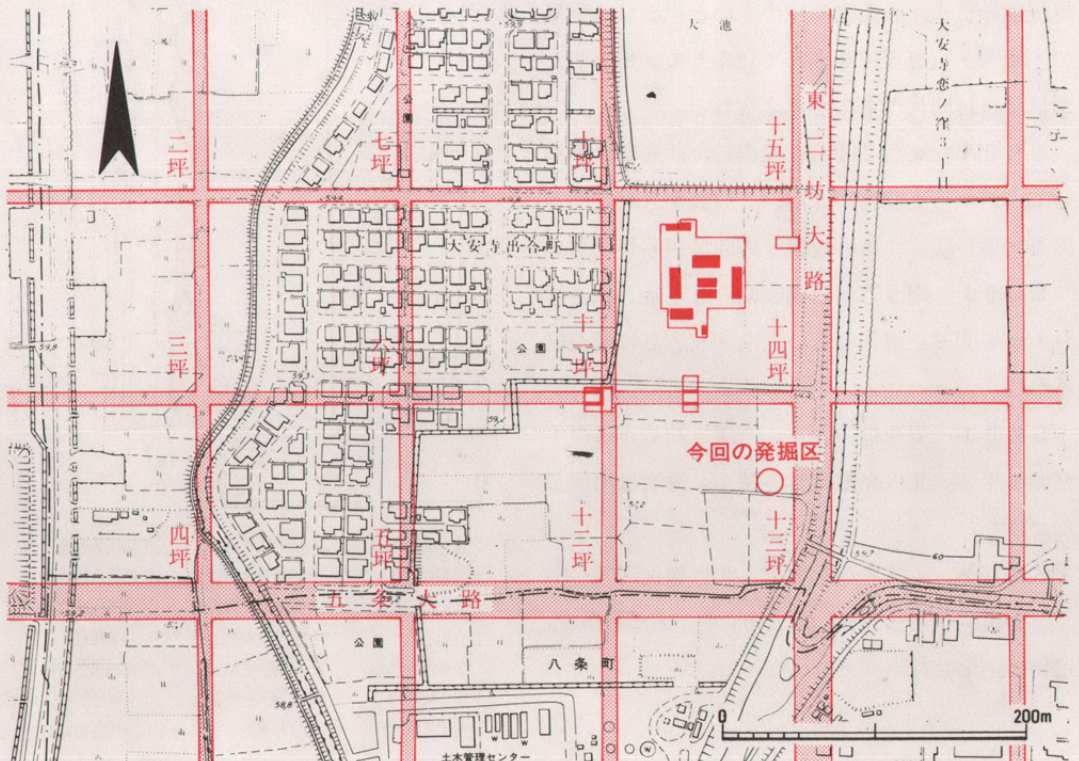


## I はじめに

奈良市は、市内大安寺町 331 番地の 1 他において、昭和55年度内開校をめざし建設を進めていた大安寺西小学校（昭和54年度発掘調査済）敷地内に新たにプール建設を計画した。計画地は平条京の条坊復元では左京五条二坊十三坪に相当するため（第1図）、奈良市教育委員会では事前の発掘調査が必要であると判断し、関係各課及び奈良県教育委員会文化財保存課との協議に入った。その結果、奈良市教育委員会文化財室が現地での発掘調査を担当することとなった。調査は昭和55年4月17日から4月22日にかけて実施した。調査面積は25㎡にとどまった。調査地は、本来西に菰川、東に佐保川と南流する2条の河川にはさまれた低湿地であるが、現状では約3mの盛土がなされており調査面積を規制する大きな原因となった。

ところで、左京五条二坊に相当する地域での調査例として、今回の調査地に北接する十四坪の調査が知られる。この調査は大安寺西小学校々舎建設に先だて行われたものであり、十四坪内の様相をほぼ明らかにしている。すなわち、十四坪中央には主殿を中心に2棟の前殿と両脇殿とが左右対称型に整然と配置されていたことがわかっている。

注1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度』（1980）



第1図 発掘区の位置と周辺の条坊

## II 検出遺構

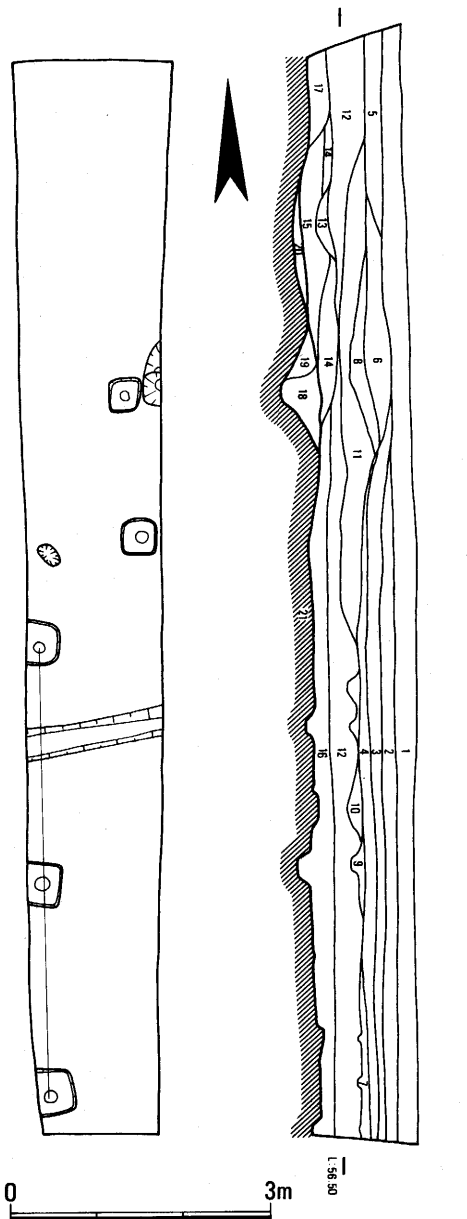
今回の発掘区は、十三坪内東端の一角を占める。検出した主な遺構は、奈良時代の掘立柱建物1棟、溝1条、土壇などである。発掘区内の基本的な土層堆積は次のようなものであった。すなわち、約3mにおよぶ現代盛土以下、黒色粘土(旧耕土)、黄褐色砂質土、暗青灰色砂質土、黄褐色粘質土と続き旧耕土上面より約1.9mで地山である茶褐色粘質土に達する。しかし、この基本堆積土層が見られるのは発掘区西端に限られており、大半は、発掘区東側を南流する佐保川の氾濫によって複雑な土層堆積となっている。この氾濫は奈良時代以降3回以上にのぼると考えられる。遺構は地山である茶褐色粘質土上面で検出した。地山直上の暗青灰色砂質土が、奈良時代のものと思われる少量の土師器・須恵器片を含んでいるため、検出した遺構は奈良時代のものと考えられる。

**SB01** 東西2間分を検出した。柱間は不揃いで、西から1間目が9尺、2間目が8尺である。調査区外へ続くため、規模・方向は明らかでない。

**SD01** 南北方向の溝。幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。遺物はない。南・北ともに調査区外へ続く。

**SK01** 東西幅約1.0m、深さ約0.4mの不整形な土壇。北は発掘区外へ続く。遺物は出土しなかった。

**SK02** 不整形な土壇で、北は発掘区外へ続く。重複関係によりSK01より古いことがわかる。遺物は出土しなかった。



- |            |             |             |
|------------|-------------|-------------|
| 1. 黒色腐蝕土   | 8. 淡青灰色砂    | 15. 暗灰色砂礫   |
| 2. 黄褐色砂質土  | 9. 暗黄褐色砂質土  | 16. 暗青灰色砂質土 |
| 3. 青灰色粘質土  | 10. 淡青灰色砂質土 | 17. 黄褐色粘質土  |
| 4. 青灰色土    | 11. 青灰色粘質土  | 18. 淡黄褐色粘質土 |
| 5. 黄褐色砂質土  | 12. 暗青灰色粘質土 | 19. 淡茶褐色粘質土 |
| 6. 暗青灰色砂   | 13. 淡青灰色粘質土 | 20. 青灰色砂礫   |
| 7. 暗黄褐色砂質土 | 14. 灰褐色砂    | 21. 茶褐色粘質土  |

第2図 発掘区堆積土層・検出遺構



# 圖 版